

事象構造による日本語複合動詞の自他交替の分析

著者	史 曼
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第15907号
URL	http://hdl.handle.net/10097/57691

博士論文

事象構造による日本語複合動詞の
自他交替の分析

史 曼

2013 年

目 次

第 1 章 序論.....	1
1.1 はじめに	1
1.2 日本語の語彙的複合動詞の自他交替について	2
1.3 本稿の位置づけ	5
1.4 本稿の構成	6
第 2 章 理論的枠組み	8
2.1 はじめに	8
2.2 理論的枠組み—語彙意味論と事象構造	8
第 3 章 語彙的複合動詞の事象構造	17
3.1 はじめに	17
3.2 複合動詞に関する理論的研究	17
3.2.1 複合動詞の分類.....	17
3.2.2 語彙的複合動詞の語形成制約	22
3.2.3 語彙的複合動詞の語形成モデル	29
3.2.4 先行研究のまとめ	33
3.3 語彙的複合動詞と語彙化	35
3.3.1 語彙的複合動詞が語彙化された「一語」である	35
3.3.2 「語彙化」について.....	37
3.3.3 「一語」が表す可能な意味と意味構造	44
3.4 日本語単純動詞の事象構造.....	47
3.4.1 「様態」と「結果」について.....	48
3.4.2 事象タイプと事象構造	52
3.5 語彙的複合動詞の語彙化タイプと事象構造	55
3.5.1 語彙的複合動詞の語彙化.....	55
3.5.2 「様態+結果」タイプ	57
3.5.3 「様態+様態」タイプ	65
3.5.4 「結果+結果」タイプ	67
3.5.5 語彙化のアプローチのメリット	72

3.6 まとめ	76
第 4 章 語彙的複合動詞の事象構造と自他交替	79
4.1 はじめに	79
4.2 先行研究	79
4.2.1 朱 (2009) : V1、V2 の実質的な意味の有無	80
4.2.2 陳 (2010) : 「結果一致性の仮説」	83
4.2.3 日高 (2012) : 「反使役化」「脱使役化」	86
4.2.4 先行研究のまとめと本稿の立場	89
4.3 単純動詞の自他交替	90
4.3.1 先行研究の概観	90
4.3.2 先行研究のまとめ	93
4.3.3 結果事象の焦点化	95
4.3.4 単純動詞の自他交替	101
4.4 語彙的複合動詞の自他交替	104
4.4.1 自他交替しない語彙的複合動詞	104
4.4.2 自他交替する語彙的複合動詞	107
4.5 まとめ	113
第 5 章 語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化と自他交替	116
5.1 はじめに	116
5.2 語彙的複合動詞における意味変化に関する先行研究	116
5.2.1 先行研究の概観	116
5.2.2 先行研究のまとめ	123
5.3 語彙的複合動詞における意味変化と文法化	124
5.3.1 「文法化」理論について	124
5.3.2 語彙的複合動詞に見られる文法化	127
5.3.3 語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化の段階分け	129
5.4 V1 の語彙的意味の希薄化と自他交替	134
5.4.1 V1 の語彙的意味の希薄化	134
5.4.2 V1 の語彙的意味の希薄化と語彙的複合動詞の事象構造	139
5.4.3 V1 の語彙的意味の希薄化と自他交替	143

5.5 V2 の語彙的意味の希薄化と自他交替.....	148
5.5.1 V2 の語彙的意味の希薄化.....	149
5.5.2 V2 の語彙的意味の希薄化と事象構造	157
5.5.3 空間的アスペクト複合動詞の事象構造	161
5.5.4 空間的アスペクト複合動詞の自他交替.....	164
5.5.5 時間的アスペクト複合動詞の事象構造	171
5.5.6 時間的アスペクト複合動詞の自他交替	173
5.5.7 強調機能複合動詞	180
5.5.8 5.5 節のまとめ	182
5.6 本章のまとめ	183
第 6 章 結論.....	185
6.1 論文内容のまとめ	185
6.1.1 各章の概要	185
6.1.2 語彙的複合動詞の自他交替と複合動詞の語形成	187
6.2 本論文の意義	189
6.3 今後の課題	191
参考文献.....	194
謝辞	205

凡例

- (1) 本論文では、例文は章ごとに番号を振り直す。
- (2) 例文や考察対象語句の文頭に付された「*」は当該例文が非文法的であることを示す。
- (3) 引用例の出典は、例文の後の（）内に示す。例文出典が明記されていないものは作例である。

図表リスト

図 5-1 : 助動詞 be going to の発展 Hopper and Traugott (2003:69)	126
図 5-2 : 複合動詞から補助動詞へ 大堀 (2002:193)	159
図 5-3 : 「上げる」のイメージスキーマ	160
図 5-4 : アスペクト複合動詞の事象構造	161
図 5-5 : 空間的アスペクト複合動詞の事象構造	162
図 5-6 : 時間的アスペクト複合動詞の事象構造	171
表 3-1 : 事象タイプと事象構造	53
表 3-2 : 語彙的複合動詞の語彙化タイプ (1272 語)	57
表 3-3 : 語彙的複合動詞の事象構造	71
表 3-4 : 語彙的複合動詞の意味関係	73
表 4-1 : 他動詞の事象構造と自他交替	114
表 4-2 : 語彙的複合動詞の他動詞の事象構造と自他交替	114
表 5-1 : V1 の語彙的意味の希薄化の段階分け	139
表 5-2 : V1 の語彙的意味の希薄化と事象構造	143
表 5-3 : V1 の語彙的意味の希薄化と自他交替	148
表 5-4 : V2 の語彙的意味の希薄化の段階性	156
表 5-5 : 空間的アスペクト複合動詞の事象構造	164
表 5-6 : V2 の語彙的意味が希薄化した場合の事象構造と自他交替	182
表 5-7 : 複合動詞における語彙的意味の希薄化と自他交替	183
表 6-1 : 自他交替と語彙化	188
表 6-2 : 自他交替と文法化	188

第 1 章 序論

1.1 はじめに

日本語の特徴として動詞と動詞の結合による複合動詞を豊富に持つことが挙げられる。『複合動詞資料集』によると、複合動詞は 7,000 語を上回る莫大な数に上っている。量的な特徴だけではなく、単純動詞と比べて複合動詞がより複雑な意味を表しており、より多種多様な文法的特徴を見せているため、今まで多くの研究者が様々な角度から複合動詞に関する研究を行ってきた。その中で、日本語の複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に大別して研究する（影山 1993）という考え方は一般に認められている。

統語的複合動詞は統語的な補文形式に由来し、前項動詞（以下、V1 と略す）と後項動詞（以下、V2 と略す）は補文関係をなしている。補文関係というのは、「V1 することを V2」または「V1 することが V2」のような関係である。例えば、「読み始める」は「読むことを始める」と言い換えられるように、V1 と V2 は補文関係として分析できる。統語的複合動詞は補文構造を持つがゆえに、意味が透明であり、生産性が高く、ほとんど語彙的な制限を受けずに形成される。一方、語彙的複合動詞は語彙部門で形成され、V1 と V2 は手段（叩き壊す）、様態（駆け上がる）、原因（待ちくたびれる）、並列（泣き叫ぶ）などといった雑多な意味関係が観察されている。語彙的複合動詞は意味の不透明化と語彙化が進んでいる典型的な語彙である。統語的複合動詞の高い生産性に対して、語彙的複合動詞は厳しい制限が課されている。例えば、よく取り上げられているように、「*切り倒れる」、「*叩き壊れる」のような組み合わせは適格ではない。これについて、広く受け入れられているのは他動詞と非対格自動詞の組み合わせのパターンが許されないという「他動性調和の原則」（影山 1993）による説明である。この原則は、動詞と動詞の組み合わせに着目した、本質的に合成的な観点からの説明である。しかし、この原則には、「打ち上がる」、「積み重なる」など少数の「他動詞＋非対格自動詞」の結合による複合動詞を例外扱いするという欠点がある。

興味深いことに、例外とされている「打ち上がる」「積み重なる」などの複合動詞には対応する他動詞形「打ち上げる」「積み重ねる」がある。つまり、「打ち上げる－打ち上がる」、「積み重ねる－積み重なる」のように、これらの複合動詞は自他交替を起こす。これに関連させて、「*切り倒れる」を「切る」と「倒れる」という組み合わせが許されないと考えのではなく、「切り倒す」と自他交替できないので、成立しないと捉えてもよいであ

ろう。 自他交替の角度から考えるメリットは、「*切り倒れる」の不成立と「打ちあがる」の成立を同じ角度からみることができることである。

自他交替視点のもう一つのメリットは複合動詞を単純動詞とパラレルに分析できることである。語彙的複合動詞は単純動詞と同じように語彙化された一語であるので、両者を比べる視点が必要であると考えられる。しかし、語彙的複合動詞は従来、合成的な原理で研究され、単純動詞と同じような語彙的な視点が欠落している。同じ語彙化された一語として、複合動詞と単純動詞の自他交替現象における異同点を考察することによって、複合動詞の語形成及び語彙化に対する認識を深めることが期待できる。

では、なぜほとんどの複合動詞は「切り倒す－*切り倒れる」のように自他交替できないのか、なぜ「打ち上げる－打ち上がる」などといった複合動詞は自他交替を起こすのであろうか。管見では、その理由はまだ明らかにされていない。このため、本稿は従来の分析とは異なるアプローチから説明を試みることによって、複合動詞自他交替のメカニズムを究明するものである。次節から研究目的である日本語の語彙的複合動詞の自他交替について詳しく説明し、本稿の位置づけを定める。その後、本稿の構成について紹介する。

1.2 日本語の語彙的複合動詞の自他交替について

まず日本語の単純動詞の自他交替を見てみよう。日本語の単純動詞には、次のように、形態的、統語的、意味的に対応している自他動詞のペアがよく見られる¹。このような現象は自他交替と呼ばれている。

- (1) a. 木を倒した
b. 木が倒れた
- (2) a. ガラスを壊した
b. ガラスが壊れた
- (3) a. 垢を落とした
b. 垢が落ちた

¹ 西尾（1988）は『分類語彙表』4800個の動詞から、419対の対応する自動詞・他動詞を抜き出し、六分の一強に当たる動詞が対応する相手をもつという結果を出している。早津（1987）が収集した約740個の動詞のうち、自他対応をなす動詞対の数は約220対であり、有対自他動詞対の数は動詞の総数の59.5%を占めていると指摘している。

自他交替する動詞は(1)～(3)に示されているように、他動詞と自動詞は形態的、統語的、意味的に対応している。例えば、「倒す」と「倒れる」は形態的には同一の語根「tao-」を共有している。統語的には、他動詞文の「ヲ格」も自動詞文の「ガ格」も同一の名詞句「木」である。意味的には、他動詞のほうは、「木を『倒れる』という状態に変化させる」という意味であり、自動詞のほうは「木が『倒れる』という状態に変化する」という意味である。すなわち、同一の事象の異なる側面を叙述している。

しかし、このような自他交替する単純動詞を V2 に取る際、ほとんどの場合は(4)～(6)のように、他動詞のほうだけ成立する。例えば、「木を切り倒した」という文は「木を切ることによって、倒した」という意味を表している。この出来事を変化結果に注目して表すと、「木が切られて、倒れた」という表現を使用しなければならず、「*木が切り倒れた」は成立しない。

- (4) a. 木を切り倒した
- b. *木が切り倒れた
- (5) a. ガラスを叩き壊した
- b. *ガラスが叩き壊れた
- (6) a. 垢を洗い落とした
- b. *垢が洗い落ちた

なぜ単純動詞の場合、形態的、統語的、意味的に対応している他動詞と自動詞はともに数が多いのに対して²、複合動詞になると、他動詞のほうだけ成立するのであろうか。本稿では、(4) b を自他交替の観点から見ているが、冒頭で述べたように、影山(1993)はそれを合成的な観点から解釈している。(4) b～(6) b が不適格である原因について、影山(1993)は動詞と動詞の組み合わせのパターンの可能性を決める「他動性調和の原則」³によって説明している。(4) a～(6) a における他動詞形の複合動詞は「他動詞+他動詞」の組み合わせであり、同じ項構造を持っているため、成立するという。一方、(4) b～(6) b における自動詞形の複合動詞は「他動詞+非対格自動詞」の複合であり、外項を持たな

² 注 1 を参照されたい。

³ 影山(1993,1999)は日本語の語彙的複合動詞は項構造レベルでの合成であり、同じタイプの項構造を持つ 2 つの動詞が結合するという「他動性調和の原則」を提案している。なお、「他動性調和の原則」については第 3 章で詳述する。

い非対格自動詞は外項を持つ他動詞と複合動詞できないという「他動性調和の原則」に反するので、複合動詞として成立しないと分析している。

確かに、ほとんどの「*切り倒れる」のような「他動詞＋非対格自動詞」からなる複合動詞は成立しない。しかし、影山（1993）のこの解釈は本当に正しいのであろうか。「他動詞＋非対格自動詞」の組み合わせが許されないとされるなら、次の（7）b～（9）bのような自他交替関係にある自動詞形の複合動詞の存在は説明できなくなる。

- （7） a. 花火を打ち上げた
 b. 花火が打ち上がった
- （8） a. 映像を切り替えた
 b. 映像が切り替わった
- （9） a. 風鈴を吊り下げた
 b. 風鈴が吊り下がる

（7）b～（9）bは「他動性調和の原則」に違反する「他動詞＋非対格自動詞」タイプの複合動詞である。「他動詞＋非対格自動詞」の組み合わせが認められないなら、なぜこれらの複合動詞は成立するのであろうか。これについて、影山（1993）は（7）b～（9）bにおける自動詞形の複合動詞は（7）a～（9）aの他動詞形からの逆形成であり、複合動詞の語形成の例外であるとしている。しかし、例外として扱うだけでは問題解決にはならない。「打ち上がる」のような「他動詞＋非対格自動詞」タイプの複合動詞は数量的に少ないが、例外として捉えるのは望ましくない。

ところで、視点を変えれば、動詞と動詞の組み合わせではなく、自他交替という視点から考えると、「*切り倒れる」タイプの複合動詞が成立しないのは、自他交替を起こさないことに起因し、少数の「打ち上がる」などの複合動詞の成立は自他交替を起こすことに起因するということになる。これにより、「*切り倒れる」と「打ち上がる」を語彙化された複合動詞が自動詞として認められるかどうかという同じ角度からみることができ、「打ちあがる」を例外として扱わずに説明することができる。

自他交替の角度から考える際、複合動詞の語形成の問題はなぜほとんどの複合動詞は「切り倒す－*切り倒れる」のように自他交替できないのか、なぜ少数の複合動詞は「打ち上げる－打ち上がる」のように自他交替できるのかという問題になる。後述するが、これ

は語彙的複合動詞の全体の事象構造に起因すると考えられるので、自他交替の角度から考えると、「打ち上がる」のような複合動詞は例外どころか、複合動詞の語形成メカニズムを考え直す切り口になると考えられる。

複合動詞の自他交替を議論する際、複合動詞自体の自他交替の原因を探る以外に、単純動詞の自他交替と比較して分析する必要もあると考えられる。上述したように、日本語において、自他交替できる単純動詞は多く観察されている。これに対して、ほとんどの複合動詞は自他交替できない。なぜ語彙的複合動詞は単純動詞と同じように語彙化された一語であるものの、自他交替のふるまいが大いに異なるのであろうか。これは語彙化の問題と関わると考えられ、非常に興味深いことであるが、不思議なことに、これについてはまだ全く議論されていない。

以上述べたように、複合動詞の自他交替は複合動詞の語形成を考え直す切り口になり、語彙化の問題とも関わっている非常に重要な言語現象である。複合動詞の自他交替に関する議論もあるが（朱 2009、陳 2010、日高 2012）、いずれも分析に多くの問題点や反例が見られており、自他交替のメカニズムはまだ解明されていない。このため、本稿は複合動詞における自他交替のメカニズムの解明を目的とする。具体的には、次の三つの問題を解決する。

- (10) a. なぜほとんどの複合動詞は自他交替できないのか、
- b. なぜ一部の複合動詞は自他交替できるのか、
- c. なぜ自他交替できる単純動詞が多いのに対して、自他交替できる複合動詞が少ないのか。

なお、日本語の複合動詞は統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分けられているが（影山 1993）、統語的複合動詞の自他性は V1 から受け継いでいるため⁴、自他交替現象が存在しないことから、語彙的複合動詞の自他交替のみ扱うことにする。この点について、第 3 章で詳述する。

1.3 本稿の位置づけ

先に挙げた影山（1993）をはじめとする多くの先行研究では、複合動詞の自他交替の間

⁴ この点については、3.2.1 節で詳述する。

題を V1 と V2 の組み合わせの問題に還元して説明している(松本 1998, 由本 2005 など)。すなわち、「*切り倒れる」が排除されるのは、他動詞と非対格動詞の組み合わせが認められないからと考えるのである。しかし、自他動詞の対として見れば、「倒す―倒れる」が成立し、「切り倒す―*切り倒れる」が成立しないのは、後者において「切る」が何らかの阻害要因になっていると想定するのが自然である。この想定を出発点にして、本稿では、「他動性調和の原則」のような合成的な原理ではなく、語彙意味論的な分析から自他交替要因の説明を行う。すなわち、従来の合成的なアプローチに対して、語彙的なアプローチを提案する。

語彙意味論の一つのモデルの考えとして、「動詞の意味がその統語的ふるまいを決定する」という考えがあり、動詞の自他交替を動詞の意味構造によって説明している。本稿では、この考えにしたがって、先行研究のように動詞と動詞の組み合わせのパターンによってではなく、語彙的複合動詞の自他交替の意味的な要因を探り、複合動詞全体の意味構造によって分析する。語彙的複合動詞は単純動詞と同じように、語彙化された一語であり、単純動詞と平行な意味構造を持っており、自他交替においても平行な分析ができると考えている。次節では本稿の構成を簡単に紹介する。

1.4 本稿の構成

1.3 節ですでに述べたが、語彙的複合動詞の自他交替について、本稿では基本的に次のように考える。語彙的複合動詞は単純動詞と同じように語彙化された一語であり、平行な意味構造を持っているため、単純動詞と同じ自他交替のメカニズムが働いていると考えられる。この考えに基づいて、第 2 章以降の論文の構成と各章の概要は下記の通りである。

第 2 章では、語彙的複合動詞の自他交替の分析において依拠する語彙意味論及び事象構造を概観する。従来、事象構造の統一した使われ方はないが、本稿は先行研究を参考にした上で、事象構造の表記法を定める。

第 3 章では、V1 と V2 の本義が生きている場合の語彙的複合動詞の語構造を分析し、その事象構造を提示する。この章では、先行研究の合成的なプロセスの問題点を指摘した上で、語彙化のアプローチを提出し、語彙的複合動詞は単純動詞と平行な事象構造を持っていることを明らかにする。

第 4 章では、第 3 章で提出した事象構造に基づいて語彙的複合動詞の自他交替について

分析する。単純動詞の自他交替のメカニズムを明らかにした上で、同じメカニズムによって語彙的複合動詞の自他交替を説明する。この章では主に「切り倒す－*切り倒れる」のような自他交替できない複合動詞について分析する。また、複合動詞と単純動詞における自他交替のふるまいの異同の原因についても探る。

第 5 章では、V1 あるいは V2 に意味変化が起こっている場合の語彙的複合動詞の事象構造を提示し、その自他交替について議論する。この章では文法化の理論を取り入れて、語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化を詳しく考察した上で、語彙的意味の希薄化による自他交替について詳しく分析する。なぜ「打ち上げる－打ち上がる」などといった少数の複合動詞が自他交替できるかという問題はこの章で解決する。

第 6 章では、第 3 章から第 5 章までの内容を体系的にまとめ、本稿の結論と意義を述べる。その上で、最後に残された問題および今後の課題について記す。

第 2 章 理論的枠組み

2.1 はじめに

本章では、具体的に語彙的複合動詞の自他交替の分析を進める前提として、その分析において依拠する語彙意味論及び事象構造について確認していく。また、本稿独自のアイデアを発展させることも試み、事象構造の表示法を定める。

2.2 理論的枠組み—語彙意味論と事象構造

語彙意味論は、語の意味の問題を取り扱う意味論の一分野である（小野 2005:13）。本稿は動詞を扱うので、語彙意味論における動詞に関する考えについて述べる。語彙意味論では、どのような意味の違いが統語に反映されるのかという問題に注目し、動詞の意味構造からその動詞の統語的ふるまいを予測するアプローチを取っている。統語的によく似たふるまいを示す動詞の意味からその共通性の基となる意味要素を抽出し、動詞クラスの統語への写像の違いを説明している。

動詞は基本的には外界における状態、出来事、あるいは行為—これらをひっくるめて事象という—を言語化するものである（影山 1996:44）。語彙意味論では動詞の表す事象を分析する主なアプローチは語彙アスペクトの観点からの見方である。語彙アスペクトについての研究は Vendler（1967）の動詞の 4 分類を基にしているので、まず Vendler の研究を紹介する。Vendler は英語の動詞を次の 4 つのタイプに分けている。

（11）Vendler（1967）の動詞分類

状態（state）：know, believe, have, desire, love

活動（activity）：run, walk, play, swim, push a cart, drive

到達（achievement）：recognize, spot, find, lose, reach, die, arrive, win

達成（accomplishment）：paint a picture, make a chair

以上の四つの分類の最も基本的な区別は、限界的（bounded）か非限界的（unbounded）かということである。言い換えれば、時間的な終点を持っているかどうかなのである。これについて、影山（1996,2008）を参考にして説明する。状態動詞は時間的な開始点と終点を持っていない恒常的な状態を意味する。例えば、「know」という状態動詞は静的な

状態を表しており、*He is knowing the truth.のように進行形を付ける必要はない。また、*He knew the truth in/for an hourのように、時間副詞とも共起しない。活動動詞は意図的に開始したり終了したりできる行為を表し、決まった終結点や時間的限界を持っていない。進行形を付けて He is walking はその活動が継続していることを意味する。また、活動動詞は時間的幅を持っているため、for 時間副詞と共起する。例えば、He walked for an hour. 到達動詞は何らかの目標に至るという行為の終了点を重点的に述べる動詞であり、時間幅を持っていない。for 時間副詞と共起しないが、in 時間副詞を付けることができる。達成動詞は何らかの活動があり、その結果何らかの目標に至ることを表す。活動と到達をあわせた複合的な事象とみなすことができる。

Vendler のこの分類は、動詞の分類に係わるだけで、意味構造そのものを述べたものではない。語彙意味論では、動詞の意味情報を語彙分解⁵による分解方法を援用し、Vendler (1967)の動詞の4分類を意味構造に分析している。語彙分解によって動詞の意味から基本的なパーツを取り出し、さらに精緻な語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure: LCS)⁶という表示を与えて分析している。LCS の具体的な表記は学者によって様々であるが、本稿では Rappaport Hovav & Levin (1998)、影山太郎 (1996,1999,2001)などを参考にし、Vendler の動詞4分類を発展させて語彙概念構造で動詞の基本的なタイプを以下のよう

(12) 語彙概念構造の基本形

- a. 状態動詞—静止状態・静止位置 [y BE AT z]
- b. 活動動詞—継続活動 [x ACT (ON y)]
- c. 到達動詞—位置変化・状態変化 [y BECOME BE AT z]
- d. 達成動詞—使役 [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT z]]

影山 (1999,2001) によると、これらの表記において、大文字の英単語で表したのはく

⁵ 影山 (1996:40) では、表面には現れない抽象的な意味要素を用いて単語の意味を分析することを語彙分解 (lexical decomposition) または述語分解 (predicate decomposition) という。

⁶ 動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造を語彙概念構造または概念構造という (影山 1996:47)。

使役>や<変化>といった意味の概念で、意味述語と呼ばれている⁷。x、y、z は変項と呼び、具体的な文においては項（主語や目的語）がそれらの位置に対応する。通常、ACT の主語 x は動詞の外項⁸と、BE の主語 y は内項と対応している。では、各動詞の LCS について、以下のように簡単に説明する。

(12) a は「y が z という静止状態ないし静止位置にある」ということを表している。例えば、次の (13) a 文であれば、その LCS は (13) b のように表示できる。

(13) a. 太郎は研究室にいる。

b. LCS:[y BE AT z]
 | |
 太郎 教室

(12) b 活動動詞は継続活動を表す動詞であり、「笑う」「泣く」などの自動詞と「打つ」「叩く」などの他動詞がある。他動詞のほうは目的語への働きかけを表すので、本稿では「働きかけ動詞」と呼ぶ。「叩く」を例として、その LCS を示すと、下記のようになる。

(14) a. 太郎は布団を叩く。

b. LCS:[x ACT ON y]
 | |
 太郎 布団

影山（1996）によると、(12) c の到達動詞は位置変化・状態変化を表す。その LCS は「y に変化「BECOME」が起こって、z の状態/位置になった」という意味を表している。では、実例を見よう。(15) は状態変化の例である。

⁷ それぞれの意味述語の意味は以下のようなになる。BE: 静止した状態を表す。AT: BE と一緒に用いられて、抽象的な状態ないし物理的位置を示す。BECOME: 変化を表す。ACT: 継続的あるいは一次的な「活動」を表す。ON: ACT と一緒に用いられると、働きかけの対象を示す。CAUSE: 使役を表す。影山（1999:66,73）を参照されたい。

⁸ 動詞は項構造を備えている。項構造とは、文法と意味とのインターフェースにある構造で、動詞が文法的に取る項を表示するものである。通常、外項は動作主（Agent）、内項は対象（theme）を表す。例えば、「飲む」の項構造は（Agent <Theme>）のように記述できる。項構造により、動詞は外項と内項を取る他動詞、外項を取る動詞非能格動詞、内項を取る動詞非対格動詞という三種類に分けられる。（影山 1993,松本 1998）

(15) a. ドアが開いた。

b. LCS:[y BECOME BE AT **OPEN**]
 ↓
 ドア

(12) d 達成動詞は、通常、「壊す、開ける、上げる」などのような位置変化・状態変化の他動詞が該当し、使役変化動詞とも呼ばれている。その LCS は「主語 x が何らかの行為によって、目的語 y の状態変化ないし位置変化を引き起こす」を意味する。「壊す」を例として、その LCS を次のように示す。

(16) a. 太郎はドアを壊した。

b. LCS: [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT **BROKEN**]]
 ↓ ↓ ↓
 太郎 ドア ドア

以上は 4 つのタイプの動詞についての説明であるが、これらの動詞間の関係について少し論じる。(12) から伺えるように、d 達成動詞は使役事象を表すものであり、その LCS は最大であり、他の動詞はその LCS の一部分を表す。それを (17) のように表すことができる。(17) に示されているように、活動動詞は上位事象、到達動詞は下位事象を表しており、達成動詞は上位事象と下位事象という使役事象を表している。後述するが、(17) に示される LCS は単一の動詞として表せる最大の意味構造である。

(17)

	達成		
	↙	↘	
上位事象			下位事象

[x ACT ON y] CAUSE [[BECOME [y BE AT-z]]

活動	使役	到達	状態
----	----	----	----

上のアスペクトに基づいて LCS を表記する以外に、もう一つの LCS の表記の仕方がある。Rappaport Hovav & Levin (1998,2010) の一連の研究では、動詞の意味はその動詞の意味クラスの決定に関わる構造的意味 (event schema) と、その動詞に個別の意味を表す「root」で構成されると述べている。「event schema」は、[ACT]、[BECOME]、[CAUSE] といった意味述語による特定の結合から構成されており、動詞の意味の構造的な側面

(structural part) を表現するものである。構造的な側面とは、文法的に関連する (grammatically relevant) 動詞の意味クラスの決定づけに関係する側面である。一方、「root」は、動詞によって異なるもので、動詞意味の特有な側面 (idiosyncratic part) を表すものであるという。特有な側面とは、Rappaport Hovav & Levin 1998 によると、ある動詞を同じ意味クラスに属するほかのメンバーから区別するための側面である。そして、「root」の「ontological categorization」と「event schema」との融合は次のように規定されている。

- (18) a. manner → [x ACT<MANNER>]
 (e.g., jog, run, creak, whistle, . . .)
- b. instrument → [x ACT<INSTRUMENT>]
 (e.g., brush, hammer, saw, shovel, . . .)
- c. placeable object → [[x CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]]
 (e.g., butter, oil, paper, tile, wax, . . .)
- d. place → [[x CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]]
 (e.g., bag, box, cage, crate, garage, pocket, . . .)
- e. internally caused state → [x <STATE>]
 (e.g., bloom, blossom, decay, flower, rot, rust, sprout, . . .)
- f. externally caused state →
 [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]
 (e.g., break, dry, harden, melt, open, . . .)

Rappaport Hovav & Levin (1998 : 109)

(18) b 「instrument」は「manner」の一種であり、c,d の「place」は「state」と平行していると考えられるため、a、b を一種類に、c、d、e、f を一つの種類にまとめられる。a、b では、root は ACT 述語を修飾している。c、d、e、f では、root は BECOME の項になっている。そこで、Rappaport Hovav & Levin は LCS を root と event schema の融合の仕方によって大きく二つに分けている。root は event schema の BECOME の項になるか、ACT を修飾するか、動態動詞（状態動詞を除く動詞）を大きく Result verbs（結果動詞）と Manner verbs（様態動詞）に分けている。そして、それぞれの LCS 及びアスペク

トとの対応関係は次のように示している。

(19) a. Result verbs

[[x ACT] CAUSE [y BECOME < STATE>]]—accomplishments

[y BECOME <STATE>] —achievements

b. Manner verbs [x ACT<MANNER>]—activities

Rappaport Hovav & Levin では、結果動詞の他動詞はほぼ (12) の達成動詞と対応し、結果動詞の自動詞は到達動詞と対応している。一方、様態動詞は活動動詞とほぼ対応している。Rappaport Hovav & Levin のこの LCS についての考え方は (12) と本質的な違いはないが、(12) はアスペクトに基づくものであるのに対して、(19) は意味要素の語彙化の問題を扱っている⁹。本稿では語彙化の観点から複合動詞の語形成及び自他交替を論じるので、主に Rappaport Hovav & Levin の表記法に従う。ただし、Rappaport Hovav & Levin では、(19) に示される 2 分類は状態変化事象にも移動事象にも適用すると述べており¹⁰、特に二つの事象タイプを区別して LCS を提示していない。本稿では語彙的複合動詞の語形成を論じる際、状態変化事象か移動事象かということが特に関係してくるので、二つのタイプの事象を区別して、それぞれの LCS を提示する。(19) は主に状態変化事象の LCS であると考えられるので、ここで移動事象を表す動詞について簡単に説明する。

移動動詞は均質的なものではなく、多種多様な性質を見せている。例えば、意志性から見れば、「歩く」「走る」「登る」「降りる」のような意志的動詞もあれば、「落ちる」「流れる」「舞う」のような非意志的動詞もあれば、「上がる」「出る」などといった中立的な動詞もある。また、アスペクトから考えれば、「歩く」「走る」は「2 時間歩く」「歩いている」(活動の継続) から分かるように、活動動詞になる。「登る」は「一時間山を登る」「一時間で頂上に登る」のように、活動動詞と到達動詞の両方の性質を持っている動詞である。しかし、ここでは、これらの差異に注目せず、ただ様態を表すか経路を表すかによって、移動動詞を移動様態動詞と移動経路動詞に分けてその LCS を考察する。移動様態動詞は

⁹ 語彙化について、第 3 章で詳述する。

¹⁰ 第 3 章で紹介するが、Talmy (1985) は「状態変化」が一つのイベントタイプとして言語において移動と平行していると論じている。状態変化事象か移動事象かということは本論の研究対象である語彙的複合動詞の語形成に影響を与えるため、本稿は事象をこの二つに分けて論じていく。

(19) b の様態動詞と並行しており、移動経路動詞は (19) a の結果動詞と並行している。それぞれの LCS を次のように示す。なお、移動動詞については第 3 章で改めて考察する。

(20) a. 移動様態動詞 LCS : [x MOVE<MANNER>]

b. 移動経路動詞 LCS: [y MOVE [path z]]

(20) のように、「移動」事象ということを [MOVE] で示す。a の移動様態動詞は例えば、「歩く」「走る」「這う」などがある。b の移動経路動詞には「上がる」「下がる」「落ちる」「出る」などがあるが、これはまた「起点指向」(出る、去るなど) か「着点指向」(「着く」「入る」) か、「経路指向」(「上がる」「下がる」など) かによって、下位分類できるが、ここではそれを統一して「path z」と記す。

ここまでは LCS についての説明である。語彙意味論では、LCS という表記システムは、動詞の意味クラスごとにその共通性を捉える仕組みとして機能するだけでなく、語の意味構造と統語構造との対応づけ、種々の構文交替現象や語形成の可否など、様々な動詞のふるまいを予測することのできる意味記述を可能にした。本稿で複合動詞の語形成及び自他交替を分析する際、主に動詞の LCS を用いている。

しかし、LCS だけでは (17) に示されている事象の内部構造及び下位事象の関係は見えない。本稿では自他交替を研究するため、動詞の表す LCS 以外に、動詞の表す事象のタイプと事象の内部構造といった情報も必要とする。事象タイプの表示法は Pustejovsky (1995) に従う。Pustejovsky では、動詞の表す事象タイプ及び事象の内部構造を表すものを事象構造 (Event Structure) と呼んでおり、次のように述べている。

(21) EVENT STRUCTURE: Definition of the event type of a lexical item and a phrase.
Sorts include STATE, PROCESS, and TRANSITION, and events may have
subeventual structure.

Pustejovsky (1995:61)

Pustejovsky では事象タイプは状態、過程、変化という三つがあると論じている。状態と過程はそれぞれ Vendler (1967) の分類における状態、活動と対応しているが、変化は到達と達成両方を含んでいる。Pustejovsky で到達と達成は基本事象として個別に表さず、

内部構造の違いによって表現している。到達動詞は下位事象しか持っていない「変化」タイプであるのに対して、達成動詞は上位事象（process）と下位事象（state）という複合事象を持っている「変化」である。例えば、Pustejovsky は達成動詞「build」の事象構造を（22）のように示している。

(22) build

EVENTSTR= E1=process
E2=state
RESTR=< ∞

Pustejovsky (1995:71)

（22）に示されているように、Pustejovsky (1995) では「build」の表す事象には「a development process」と「a resulting state」という二つの下位事象が含まれていると表記している。RESTR は制約条件を表す。（22）の例では、e1 が e2 よりも前にあり、その間に挟まれる事象がないということを表す。

本稿では動詞の表す事象のタイプ及び事象の内部構造の表示は Pustejovsky (1995) に従うが、事象構造の定義の仕方は Pustejovsky と異なる。小野 (2005) に指摘されているように、事象構造という用語は先行研究で統一した使われ方をしていない。事象構造は上述した LCS とほとんど同様に扱う学者も多い¹¹。本稿では事象構造を広く動詞の表す概念的意味を分解して表示する語彙概念構造（LCS）と、事象のタイプ及び事象の内部情報を表記する Pustejovsky (1995) の「Event Structure」という二つの構造を含めると捉える。

本稿は Pustejovsky (1995)、小野 (2000、2005) を参考に、項構造の情報も含め、Rappaport Hovav & Levin の動詞の二分類を以下のような事象構造で表示する。

(23) ①. 様態動詞：

a. LCS:[x ACT<MANNER>]or [x MOVE<MANNER>]
EVENTSTR=E1=e (x) :process

¹¹ Rappaport Hovav & Levin (1998) では、上で紹介した Rappaport Hovav & Levin (1998) の LCS 表記を事象構造と呼んでいる。「We call the pairing of a constant and an event structure template an ‘event structure’ (Rappaport Hovav & Levin 1998:109)。

- b. LCS:[x ACT<MANNER>ON y]
 EVENTSTR=E1=e (x,y) :process

②. 結果動詞：

- a. LCS:[y BECOME BE AT z]or [x MOVE [path z]]
 EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition
- b. LCS:[[x ACT]CAUSE[[y BECOME BE AT z]]
 EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process
 E2=e2 (y) :state

(23) ①様態動詞では、「root」は<MANNER>であり、「ACT」(行為)か「MOVE」(移動)を修飾する。また、項構造によって、自動詞か他動詞かという二つに分けている。

Rappaport Hovav & Levin (1998) によると、アスペクトから考えれば、様態動詞は活動動詞と対応しているため、様態動詞の事象タイプは「process」であると考えられる。

②結果動詞では、「root」は「BECOME」の項になる(状態変化動詞)か、「MOVE path」の項になる(移動経路動詞)。結果自動詞はアスペクト上は到達動詞と対応しており、事象タイプは「transition」である。②bは使役変化動詞と使役移動動詞を表す。「上げる」

「下げる」などの動詞は使役移動動詞であるが、本稿の議論で使役変化動詞との区別を必要としないため、便宜上、使役変化動詞と同じ LCS で表す。結果動詞の事象タイプは「transition」であるが、使役変化/移動動詞の場合は二つの下位事象から構成され、Pustejovsky (1995) にしたがって、それぞれの下位事象を「process」、「state」と示す。

以上、本章で議論の理論的拠りどころとなった語彙意味論及び事象構造について説明した。先行研究を踏まえ、本稿独自の考え及び表記法も定めた。

第 3 章 語彙的複合動詞の事象構造

3.1 はじめに

本章は語彙的複合動詞の自他交替を分析する前提として、語彙的複合動詞の語形成を明らかにし、語彙的複合動詞の事象構造を提示することを目的とする。

本章の構成は次の通りである。3.2 節では日本語複合動詞に関する先行研究について概観する。3.3 節で、「語彙化」の理論を紹介し、語彙的複合動詞は語彙化された一語であることを明らかにする。3.4 節では単純動詞の事象構造について、3.5 節で、語彙的複合動詞の語構造について詳しく考察し、事象構造を提示する。最後 3.6 節ではまとめを記す。

3.2 複合動詞に関する理論的研究

複合動詞は従来より多くの関心を集め、国語学においても、言語学においても盛んに研究され、複合動詞の構成要素間の意味関係、統語的特徴、語形成などはかなりの程度まで解明された。国語学における先行研究は複合動詞の構成要素の意味変化と関連するものが多いため、第 5 章で概観することにする。本節では言語学における複合動詞についての理論的な研究だけを検討する。

言語学では、影山 (1993,1999,2002)、由本 (2005)、松本 (1998)、Nishiyama (1998)、Fukushima (2005) などは複合動詞において、V1 と V2 がどのように複合されるのか、複合動詞の統語的特徴がどのように決まるのかなどについての詳しい分析を行っている。以下、本稿の研究と関連する影山 (1993,1999,2002)、由本 (2005)、松本 (1998) の研究をめぐって、複合動詞の分類、複合動詞の語形成制約、語形成モデルを順次に詳しく検討する。複合動詞に関する先行研究を検討するに当たって、次の点を明らかにしておく。

- 〔1〕 日本語の複合動詞はどのようなものであるか
- 〔2〕 複合動詞の語形成制約をどのように論じているか
- 〔3〕 複合動詞の意味構造をどのように論じているか
- 〔4〕 先行研究に残された問題点は何か

3.2.1 複合動詞の分類

複合動詞はこれまで、語形成部門による分類、V1 と V2 の意味関係による分類などがなされてきた。この節では、複合動詞の分類について説明し、本稿の研究対象である語彙的

複合動詞とはどのようなものであるかということを明らかにする。

影山（1993）は語形成部門により、日本語の複合動詞を大きく語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分けている。

（1）A 類（語彙的複合動詞）：

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放す、飛び込む、
こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、語り明かす、聞き返す、
震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ...

B 類（統語的複合動詞）：

払い終える、話し終る、しゃべり続ける、食べ過ぎる、食べ損なう、助け合う、
動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見なれる...

影山（1993:75-76）

影山（1993）では、まずこの 2 種類の複合動詞はともに形態的緊密性を持っている一語であることについて論じている。語は形態的なまとまりを構成するから、その内部に統語的な要素を介入させることは許されない。（2）に示されているように、語彙的複合動詞と統語的複合動詞は「も」などのような統語要素の介入が許されないので、「語」であるということが分かる。また、形態的緊密性は（3）のように、＜等位構造における削除＞が許されないところにも見られる¹²。

（2）「も」の介入が許されない

A: *飛びも上がる、*泣きも叫ぶ、*歩きも回る

¹² 影山（1993:76-77）によると、＜等位構造における削除＞とは次のように等位接続構文において重出する表現を文末から順に削除するということである。

- （1） a. 兄は国立大学の法学部に**入り**、弟は私立大学の法学部に入った。
b. 兄は国立大学の**法学部に入り**、弟は私立大学の法学部に入った。

この削除規則は語という形態的なまとまりを尊重し、次に示されているように、「国立大学」という複合語の内部にまで立ち入って、共通部分を省略することができない。

- （2）*兄は国立大学**の法学部に入り**、弟は私立大学の法学部に入った。

B: *食べモ続ける、*しゃべりモまくる、*食べモかける

(3) <等位構造における削除>が許されない

A: *その夜、兄は神戸で飲み~~歩き~~、弟は大阪で食べ歩いた。

B: *ちょうど同じ時に、姉は本を読み~~終え~~、妹はレポートを書き終えた。

影山 (1993:76-77)

語彙的複合動詞と統語的複合動詞両方とも一つの「語」であるが、統語的に異なる性質を持っている。これについては、影山は以下のような 5 つの統語的操作でその区別を明確にしている。

(4) I. 複合動詞の V1 は、代用形「そうする」によって代用できるかどうか

- a. 語彙的複合動詞：遊び暮らす－*そうし暮らす、押し開ける－*そうし開ける
- b. 統語的複合動詞：走り続ける－そうし続ける、読み始める－そうし始める

II. 主語尊敬語「お～になる」による挿入ができるかどうか

- a. 語彙的複合動詞：
書き込む－*お書きになり込む、泣き叫ぶ－*お泣きになり叫ぶ
- b. 統語的複合動詞：
歌い始める－お歌いになり始める
しゃべり続ける－おしゃべりになり続ける

III. 複合動詞の V1 は、受身形にできるかどうか

- a. 語彙的複合動詞：書き込む－*書かれ込む、押し開ける－*押され開く
- b. 統語的複合動詞：呼ばれ始める、愛され続ける、殺されかける

IV. 複合動詞の V1 は、サ変動詞によって置換できるかどうか

- a. 語彙的複合動詞：貼り付ける－*接着し付ける、飛び越す－*ジャンプし越す
- b. 統語的複合動詞：見続ける－見物し続ける、調べ尽くす－調査し尽くす

V.複合動詞の V1 は、動詞重複を許すかどうか。

- a. 語彙的複合動詞：*探しに探し歩いた、*勝ちに勝ち抜いた
- b. 統語的複合動詞：走りに走り込んだ、鍛えに鍛え抜かれた身体

統語的複合動詞は深層表現では補文構造をなしており、V1 と V2 は別々の語であるため、(4) b のように、V1 だけを代用形「そうし」、尊敬語、受身文、サ変動詞で置き換えることができる。V1 と V2 は補文構造をなしているため、意味的に透明で生産性が高く、典型的な語よりもむしろ普通の文や句に近い性質を備えている。例えば、「読み始める、書き始める、走り始める、歩き始める、打ち始める、叩き始める、切り始める、…」のように、「～始める」は開始点を持っている動詞であれば、ほとんどは V1 に来る。その意味は「～することを始める」である。

一方、語彙的複合動詞は語彙部門で二つの動詞が結合したものであり、一語としてのまとまりが強く、意味の慣習化と語彙的な選択制限を備えている。語彙的複合動詞の意味の慣習化について、影山（1993）は以下のような例を取り上げて説明している。例えば、「飲み歩く」というのは慣習的に酒類に限定されていて、水やジュースを飲み歩くという場合、普通は使用されない。また、語彙的複合動詞は厳しい選択制限が課されており、生産性が低く、そのほとんどは辞書に登録されている。そして、統語的複合動詞における二つの動詞は補文関係をなしているのに対して、語彙的複合動詞における V1 と V2 の意味関係はいくつかもあり、意味が不透明である。なお、語彙的複合動詞の選択制限及び意味関係については後述する。

統語的複合動詞において、V1 は V2 の補文関係にあり、V2 は V1 を内項に持っているため、V1 の自他性は複合動詞全体に受け継がれるのが普通である。例えば、(5) のように、V1 は他動詞の場合、複合動詞全体も他動詞になる。V1 は自動詞の場合、複合動詞全体も自動詞になる。

- (5) a. 文章を書き始めた 太鼓を叩き始めた (他動詞＋始める→他動詞)
- b. 太郎が歩き始めた 太郎が走り始めた (自動詞＋始める→自動詞)

このように、統語的複合動詞の自他性は V2 の自他性とは関係がないため、自他交替現象とは無縁である。したがって、本章は典型的な<語>の特徴を持つ語彙的複合動詞のみを

扱う。

上述したように、語彙的複合動詞の意味が不透明であり、二つの動詞の意味関係は一枚岩ではなく、多様な意味関係を見せているため、V1 と V2 の意味関係によって語彙的複合動詞はまた幾つかの種類に分けられる。意味関係による分類は (6) の 5 つであるということはおおよそ共通の認識になっている (影山 1999, 由本 2005)。

(6) a. 手段 : V1 することによって、V2

切り倒す、踏み潰す、押し開ける、折り曲げる、切り分ける、むしり取る

b. 様態 : V1 しながら V2

尋ね歩く、転げ落ちる、遊び暮らす、忍び寄る、舞い上がる、語り明かす、持ち去る、探し回る

c. 原因 : V1 の結果、V2

歩き疲れる、抜け落ちる、溺れ死ぬ

d. 並列 : V1 かつ V2

泣き喚く、忌み嫌う、恋い慕う、慣れ親しむ

e. 補文関係 : V1 という行為/出来事を (が) V2

見逃す、死に急ぐ、聞き漏らす、晴れ渡る、使い果たす、呼び交わす

影山 (1999:195)

上記の 5 つのグループはパラフレーズによって意味の区別がつけられる。例えば、「切り倒す」は「切ることによって倒す」という手段の解釈になる。「尋ね歩く」は「尋ねながら歩く」という意味で、様態関係である。また、「歩き疲れる」というのは「歩いた結果、疲れる」という原因の意味を表している。「泣き喚く」では V1 と V2 はほぼ同じ意味を持つ類義語であるので、並列関係になる。補文関係というのは例えば、「見逃す」のように、強いてパラフレーズすると、「見ることを逃す」ということであり、V1 は V2 の補文関係にある。パラフレーズ以外に、これらのグループの区別として、V1 と V2 の時間的關係も挙げられる。影山 (1999:196) によると、上記 b 様態、d 並列、e 補文関係の 3 つのグループは、V1 と V2 の時間的關係はほぼ同時と考えられる。V1 と V2 が類義語の場合は並列であり、そうでない場合は様態か補文関係かである。補文関係は「V1 することを (が) V2」と解釈できる場合であり、様態は、そのような補文関係でないものである。手段と原

因のグループは、V1 が先行して、それより少し後に V2 が起こるという時間の前後関係が認められる。両者の区別としては、主語が意図的な動作主の場合は手段であり、そうでない場合は原因になる。

また、この 5 つの種類のうち、a 手段、b 様態、c 原因、d 並列類はほとんど「テ」形連接と言い換えられるが、「補文関係複合動詞」は他の四種類と違って、V1 と V2 は補文構造をなしている。そして、影山（1993）、由本（2005）に指摘されているように、補文関係複合動詞における V2 がしばしば補助動詞とみなされているもので、ある事柄の失敗、或いは徹底や習慣化など、V1 が表す事象全体にかかる意味を加えている。ほとんどの補文関係複合動詞において、V2 に意味変化が起こっていると考えられる。これについて、第 5 章で詳細に議論する。

補文関係複合動詞は他の 4 種類と異なることに着目して、影山（2012）は語彙的複合動詞を主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞に大別している。(6) の a,b,c,d は主題関係複合動詞であり、e 補文関係複合動詞はアスペクト複合動詞に属するという。影山（2012）によると、主題関係複合動詞では V1 も V2 も主語・目的語の主題関係（意味役割）を述べ、語彙範疇と語彙範疇と直接くっつく。アスペクト複合動詞では文の主題関係は基本的に V1 によって決まる。V2 は広い意味で語彙的アスペクトを表し、V1 が表す事象の展開について述べる。主題関係複合動詞では、通常 V1 と V2 は本義が活着しているのに対して、ほとんどのアスペクト複合動詞における V2 は語彙的意味が希薄化している。意味変化の有無という視点から考えれば、主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞という二分類はおおよそ本義が活着している語彙的複合動詞と意味変化が起きている語彙的複合動詞というように捉えられる。

本章では V1、V2 は本義が活着している語彙的複合動詞だけ考察することをお断りしておく。なお、意味変化が起きている語彙的複合動詞は第 5 章で議論する。ここまで、語彙的複合動詞とはどのようなものであるかは分かってきたが、次は語彙的複合動詞の語形成に関する先行研究を概観したい。

3.2.2 語彙的複合動詞の語形成制約

周知のように、語彙的複合動詞の語形成には一定の制限がある。先行研究では、複合動詞の語形成原則として、影山（1993）は「他動性調和の原則」、松本（1998）は「主語一致の原則」、由本（2005）は「非対格性優先の原則」を提案している。本節ではこれらの

語形成原則を検討する。

まずは「他動性調和の原則」について概観する。影山（1993,1999）は日本語の語彙的複合動詞は項構造レベルでの合成であり、同じタイプの項構造を持つ2つの動詞が結合するという「他動性調和の原則」を提案している。この原則によると、外項を持つ他動詞と非能格動詞が複合できるが、非対格動詞は外項を欠くために、非対格動詞同士しか複合できない。「他動性調和の原則」は（7）のような動詞と動詞の組み合わせの可能性が説明できる。

- （7） a. 他動詞＋他動詞：奪い取る、追い払う、引き抜く、射落とす
- b. 非能格＋非能格：言い寄る、飛び降りる、歩き疲れる
- c. 非対格＋非対格：滑り落ちる、立ち並ぶ、生い茂る
- d. 他動詞＋非能格：探し回る、待ち構える
- e. 非能格＋他動詞：泣きはらす、伏し拝む、笑い飛ばす
- f. 他動詞＋非対格：*洗い落ちる、*染めかわる、*倒し滑る
- g. 非能格＋非対格：*走り転ぶ、*跳び落ちる、*回り落ちる
- h. 非対格＋他動詞：*揺れ落とす、*売れとばす、*滑り削る
- i. 非対格＋非能格：*痛み泣く、*転び降りる

影山（1999:201）

影山（1999:201-202）によると、（7）aは外項と内項を持つ他動詞同士の組み合わせであり、bは外項を持つ非能格動詞同士の複合であり、cは内項を持つ非対格動詞同士からなるものであり、それぞれV1とV2の項構造の形が完全に一致しているので、複合動詞は成立する。また、他動詞と非能格動詞の組み合わせであるdとeも、同じ外項を持っているので、他動性調和の原則に合致している。f-iでは、非対格動詞は内項を持っており、内項を持っていない非能格動詞及び他動詞と組み合わせることができない。

このように、日本語の語彙的複合動詞の形成には、項構造レベルでの「他動性調和の原則」が働いているという。しかし、すべての語彙的複合動詞は「他動性調和の原則」に従うとは限らない。この原則に違反する例は多数観察される。例えば、「待ちくたびれる」、「読み疲れる」、「打ち上がる」「煮詰まる」などは「他動詞＋非対格」の組み合わせであるが、成立する。そして、「歩き疲れる」、「走りくたびれる」のような「非能格＋非対格」か

らなる複合動詞も存在する。これらの反例を考慮に入れて、影山の「他動性調和の原則」と異なる考え方が出てきた。次はそれについて検討する。

影山(1993,1999)の複合動詞が項構造で合成されるという考え方に対して、松本(1998)は複合動詞が意味構造における組み合わせであると論じている。松本(1998)は「他動性調和の原則」の問題点を指摘した上で、「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせは、動詞の意味構造における諸制約と、日本語複合動詞に適用されるある原則（主語一致の原則）によって制約されている」と主張し、他動性調和の原則が捉えようとした制約を捉え直そうとしている。松本は複合動詞を V1 と V2 の意味関係によって分類し、各タイプの意味上の制約を以下のように論じている。

(8) 語彙的複合動詞の意味上の制約（松本 1998）

a. V1 が V2 の手段を表すもの

押し倒す、たたき落とす、打ち上げる、押し出す、掃き集める、投げ飛ばす...

意味制約：

前項はすべて動作主的動詞であり、また、後項動詞は何らかの状態/位置変化の使役を表す動詞である。手段とは、使役者が、その使役を達成させるための一段階として行う具体的行為である。一般に動詞の意味構造が手段を表す下位意味構造を含む場合、上位の意味構造は使役行為を表し、手段の下位構造は同じ行為者の行為に限られる。したがって、手段複合動詞はすべていわゆる他動詞/非能格動詞同士の組み合わせとなる。

b. V1 が V2 の様態・付帯状況を表すもの

意志的+意志的：駆け登る、駆け降りる、舞い降りる、滑り降りる（様態+結果）

意志的+中立的：駆け上がる、飛び上がる、飛び出る、這い出る、歩き出る、

非意志的+非意志的：流れ落ちる、舞い落ちる、滑り落ちる

非意志的+中立的：流れ出る、浮き上がる、舞い上がる、吹きまわる

意味制約：

V1 が V2 で表されたプロセスに付随する様態・付帯状況を表す複合動詞である。V1 と V2 は同時進行するので、V1 が意志的であれば、V2 は意志的/中立的であり、V1 が非意志的であれば、V2 は非意志的/中立的である。

c. V1 が V2 の原因を表すもの

- a. 非動作主的＋非動作主的：降り積もる、おぼれ死ぬ、焼け死ぬ、抜け落ちる
- b. 動作主的＋非動作主的：泣きぬれる、泣き沈む、飲みつぶれる、食いつぶれる、働きくたびれる、読み疲れる、立ち疲れる
- c. 非動作主的＋動作主的：*疲れ座る、*転び叫ぶ、*白け帰る、*恐れ去る
- d. 動作主的＋動作主的：*聞き帰る、*見向かう、*見逃げる、*食べ叫ぶ

意味制約：

V2 が状態変化を表し、V1 がそれを引き起こす原因となる出来事を表す複合動詞である。V2 はある原因の結果として、意志判断を伴わない行為を表しており、V2 が非動作主的な動詞でなければならない。

d. V1 を意味的主要部とするものⅠ：比喩的様態

咲き誇る、踊り狂う、泣き狂う、咲き狂う、荒れ狂う、咲きこぼれる、思い乱れる...

意味制約：

V2 が V1 で表された事象の様態を表しており、＜あたかも V2 するかのように、V1 する＞という意味である。これにより、V2 の主語は実際に V2 で表された行為や状態が当てはまるものでなくても良い。したがって、「狂う」を V2 とする複合動詞の主語は実際に狂うことができないものでも良く、「踊る」（非能格動詞）とも「咲く」（非対格動詞）とも複合する。

e. V1 を意味的主要部とするものⅡ

言い差す、鳴りやむ、晴れ渡る、叱り付ける、静まり返る、撫で回す...

意味制約：

V1 は意味的主要部であり、V2 は特定の意味を V1 の意味構造の中に加える。V1 と V2 の組み合わせは意味的に決定されており、その制約いかんでは他動性調和の原則を無視した組み合わせが可能である。例えば、「強意の「つける」」は「照りつける」「にらみ付ける」「脅しつける」のように、非対格動詞/非能格/他動詞と複合できる。

f. V1 が V2 の背景的情報を表すもの

食べ残す、取り残す、拾い残す、積み残す、売れ残る、消え残る、溶け残る

取りこぼす、取り過ごす、釣り落とす、見落とす、見過ごす、見失う...

意味制約：

動詞の意味には、それが表す事象の背景的信息が含まれる場合がある。例えば、「残す」は、ある物体を誰かが無くしてしまうことが予想されるという背景の中で、そうしないで存在し続けさせることを表す。このような動詞を V2 とする複合動詞において、V2 が意味的主要部であり、V1 が V2 の背景を具体的に表している。このため、V1 は V2 の背景となる行為を表わす動詞でなければならない。例えば、「落とす」が「走る」などと複合しないのは、「走る」などが V2 の背景となる行為を表すと考えられないからである。

(松本 1998:51-67 をもとに作成)

以上のように、松本(1998)は複合動詞を意味関係によって、6つの種類に分けており、各種類の複合動詞の意味上の制約を提出している。意味上の制約に加えて、松本は形態統語的な制約「主語一致の原則」を提出している。「主語一致の原則」とは「二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者(通例、主語として実現する意味的項)動詞が同一物を指さなければならない。」(松本 1998:72)。これにより、「他動性調和の原則」に違反する(9)のような「非能格自動詞＋非対格自動詞」「他動詞＋非対格動詞」も説明できるようになった。

(9) a. 非能格自動詞＋非対格自動詞

歩き疲れる、遊び疲れる、泳ぎ疲れる、立ち疲れる、座り疲れる、しゃべり疲れる、鳴きくたびれる、走りくたびれる、泣きぬれる、泣き沈む

b. 他動詞＋非対格自動詞

読み疲れる、待ちくたびれる、飲みつぶれる、食いつぶれる、聞きほれる、見ほれる

(9)の複合動詞において、V1とV2が主語が一致しているため、成立する。例えば、「太郎は歩き疲れた」という例では、V1「歩く」の主語もV2「疲れる」の主語も同じ「太郎」であり、「主語一致の原則」に合致しているため、「歩き疲れる」という複合動詞は成立す

る。しかし、「打ち上がる」などのような「他動詞＋非能格自動詞」複合動詞は「主語一致の原則」にも違反している。例えば、「花火が打ち上がる」のように、「上がる」の主語は「花火」であるが、「打つ」の主語は「花火」ではない。

由本（2005）は松本（1998）と同じように、語彙的複合動詞は意味構造において複合されるものであり、意味関係によって複合動詞を分類した上で、各分類の意味構造上の制約を提案している。それぞれの種類に関して（10）のような意味論的制約を提示している。

（10）語彙的複合動詞の意味論的制約（由本 2005）：

（A） 並列関係

変項の同定が二つの LCS 内で同じ意味役割をもつものの間でのみ可能であり、また、最終的に単純な事象構造に再分析されるため、変項はすべて同定されねばならず、同じ関数で表される LCS を持つ動詞、さらには、アスペクト素性も同一である類義語の合成以外は容認されにくい。

（B） 付帯状況・様態

V1 は継続相として解釈できるものに限られる。

変項の同定は二つの LCS 内で同じ意味役割をもつものの間でのみ可能だが、同定されずに残された V1 の項が複合語の項として受け継がれることもありえる。ただし、それぞれの第一項（主語）は必ず同定される。

（C） 手段

意図的行為を表す動詞の組み合わせに限られる。それぞれの第一項（動作主）が必ず同定され、また、他の項についても、異なる意味役割をもつもの動詞でも、使役の連鎖が成立しやすいように、同定される必要がある。

（D） 因果関係

V2 は非意図的事象を表す非対格動詞に限られる。

それぞれの第一項は、意味役割の違いに関わらず必ず同定される。

（E） 補文関係

V2 は事象を項としてとる他動詞または非対格自動詞に限られる。項の同定は、V2 の項として V1 の LCS をまるごと埋め込むことで自動的に起こる。

由本（2005:130）

この意味論的制約のほかに、由本（2005）は「打ち上がる」のような例について、以下のような「非対格性優先の原則」を提案している。

「非対格性優先の原則」

「動詞＋動詞」の語彙的複合動詞において、[-acc]（非対格性）の格素性は、主要部・非主要部に関わらず、複合動詞に受け継がなければならない。

由本（2005:144）

すなわち、V1、V2 を問わずに、複合動詞の構成要素に非対格自動詞があれば、複合動詞全体も必ず非対格自動詞になる。これにより、「打ち上がる」などのような「他動詞＋非対格自動詞」タイプの複合動詞の存在は説明できるようになった。「他動詞＋非対格自動詞」タイプの複合動詞全体は V2 の非対格性を受け継ぎ、非対格自動詞になるという。しかし、どんな場合にこのような「他動詞＋非対格自動詞」の組み合わせが成立するのかについては言及していない。

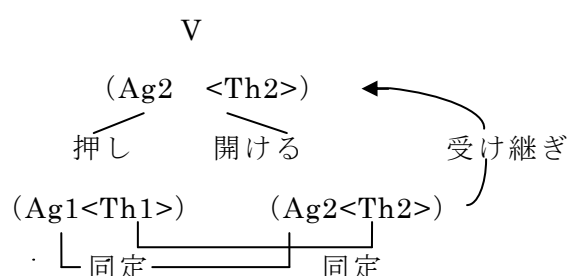
以上、3.2.2 節では、語彙的複合動詞の語形成の制限に関する先行研究を概観した。影山（1993）は語彙的複合動詞は項構造レベルで合成されるとし、V1 と V2 の項構造が同定されなければならないという「他動性調和の原則」が働いていると提案している。これに対して、松本（1998）と由本（2005）では、語彙的複合動詞は意味構造の合成であるとされ、二つの動詞の意味関係によってそれぞれ異なる意味的制約が関わっていると論じている。そして、語彙的複合動詞全般に成立する原則として、松本（1998）は「主語一致の原則」、由本（2005）は「非対格性優先の原則」を提出している。

次節では語彙的複合動詞の語形成モデルに関する先行研究を概観し、語彙的複合動詞はどのように一つの語をなしているかと論じられているのかということを見てみよう。

3.2.3 語彙的複合動詞の語形成モデル

3.2.2 節で紹介したように、影山（1993）は語彙的複合動詞は項構造レベルで合成され、V1 と V2 の項がそれぞれ同定されなければならないと論じている。例えば、「押し開ける」における項構造の同定は（11）のように示されている。（11）のように、V1「押す」と V2「開ける」の外項と内項がそれぞれ同定される。V2 が複合動詞の主要部であるため、V2 の項構造が複合動詞全体に転写される。

（11） ドアを押し開ける



影山（1993:106）

影山（1993:101-108）では複合動詞化が項構造において起こり、複合動詞全体の項構造は、部分をなす動詞の項構造の受け継ぎという形で説明されている。また、多くの場合、複合動詞の項構造はその主要部の動詞の項構造と一致すると主張している。3.2.2 節で紹介したように、影山では、この項構造の同定は動詞と動詞の組み合わせの可能性を決める（他動性調和の原則）と述べている。しかしながら、影山（1999:204）に述べられているように、日本語の複合動詞が他動性調和の原則という項構造の概念で規定されるとしても、この原則はあくまで 2 つの動詞の組み合わせパターンを決めるだけに過ぎず、個々の複合動詞が具体的にどのような意味になるのかは概念構造の問題になる。つまり、項構造での複合操作と連動して、語彙概念構造でも意味の組み立てが行われるはずである。影山は、「押し開ける」を例にとって、次のように 2 つの語彙概念構造の合成プロセスを示している。

（12） 2 つの語彙概念構造の合成

「開ける」: []_x CAUSE [BECOME [[]_y BE AT-[OPEN]_z]]

↑
x が y を「開いた状態」にする

「押す」: []_x ACT ON []_y

x が y (ドア) に働きかける (=押す)

合成 → [[]_x ACT ON []_y] CAUSE [BECOME [[]_y BE AT-[OPEN]_z]]

押し

開ける

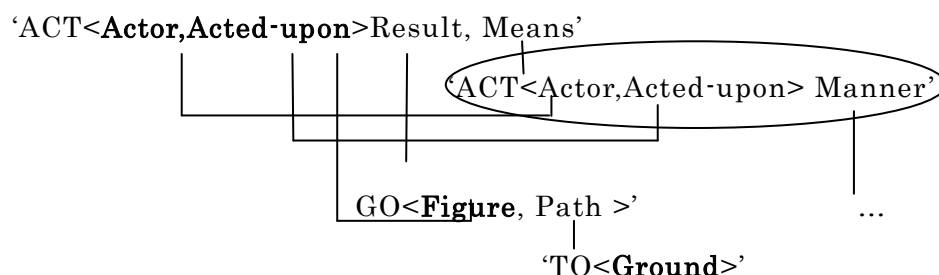
(影山 1999:211)

つまり、「開ける」の概念構造の使役者 (CAUSE の主語) の位置に「押す」の概念構造をそっくりはめ込めば、「押すという行為を手段として開けるという行為を行う」という意味が読み取れる (影山 1999:211)。以上のように、影山 (1999) は語彙的複合動詞における語彙概念構造の合成モデルを提示している。ただし、この語彙概念構造の合成モデルはただ複合動詞の意味はそうのように組み立てられていることを説明するものであり、複合動詞の語形成の可能性はやはり項構造レベルで決められるという。

影山 (1993) の項構造レベルでの合成という考えに対して、松本 (1998)、由本 (1996,2005) では複合動詞は意味構造レベルの合成と考え、意味構造レベルでの合成モデルを提示している。以下では、両氏の論述を紹介する。

松本 (1998) は語彙的複合動詞を意味関係によって分類した上で、語彙的複合動詞の意味構造を分析している。以下で手段複合動詞と様態・付帯状況複合動詞の合成モデルを紹介する。

(13) 手段複合動詞: 「叩き落す」

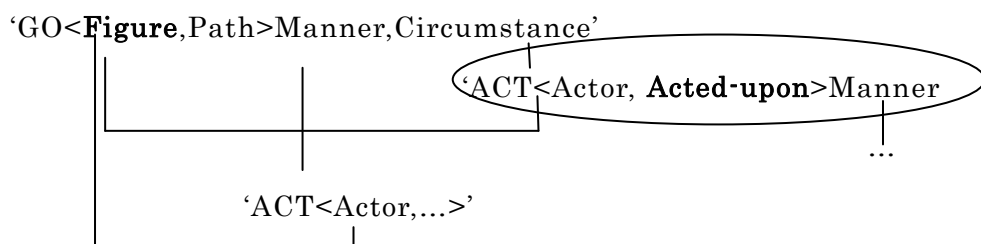


(松本 1998:68)

松本 (1998:68) は「叩き落す」を例として、手段複合動詞の意味構造を (13) のよう

に表している。なお、上段の意味構造は V1 の意味構造であり、下段の線で囲んだ部分が V1「叩く」の意味構造であり、V2「落とす」の Means を表している。この意味構造から項構造に写像が行われる際、Means を表す V1 の意味構造内の項は項構造に写像せず、文法的に表現されないとしている。つまり、(13) でボールド体で書かれた項のみが項構造に写像すると述べている。

(14) 様態・付帯状況複合動詞：「持ち帰る」



(松本 1998:71)

(14) は「持ち帰る」などのような様態・付帯状況複合動詞の意味構造である。上段にある意味構造は V2「帰る」の意味構造であり、下段の線で囲んだ部分が「持つ」の意味構造である。「持ち帰る」のような様態・付帯状況複合動詞の場合、上記した「叩き落す」のような手段複合動詞と違って、非主要部「持つ」の項も全体に受け継がれる。松本はこのことに着目して、複合的な意味構造から項構造への写像は次のように規定している。すなわち、一般に複合動詞の意味構造の下位構造内の項は特定の場合にしか項構造に写像しない。その写像が許されるケースの一つとして、GO（帰る）を述語とする意味構造に埋め込まれる付帯状況があると考えられる（松本 1998:70）。

このように、松本（1998）では、複合動詞は意味構造の複合であるとし、複合動詞の項構造は、二つの動詞の項構造から派生するのではなく、複合動詞の持つ複合的な意味構造からの写像によって規定すると論じている。そして、3.2.2 節ですでに紹介した松本に提出されている複合動詞の各分類の意味上の制約も複合動詞の意味構造から導くものとされている。

由本（2005）は松本（1998）と同じく、語彙的複合動詞を意味関係によって分類した上で、各種類の意味構造を（15）のように提示している。

(15) a. 並列関係：[[LCS1]AND [LCS2]] (t1=t2)

- b. 付帯状況・様態（持ち寄る、遊び暮らす、すすり泣く、はい寄る）

$$\left[\begin{array}{c} \text{[LCS2]} \\ \text{WHILE[LCS1]} \quad (t1=t2) \end{array} \right]$$

- c. 手段（切り倒す、吸い取る、泣き落とす）

$$\left[\begin{array}{c} \text{[LCS2]} \\ \text{BY[LCS1]} \quad (t1 \geq t2) \end{array} \right]$$

- d. 因果関係（遊びくたびれる、泣きぬれる、流れ着く）

$$\left[\begin{array}{c} \text{[LCS2]} \\ \text{FROM [LCS1]} \quad (t1 \geq t2) \end{array} \right]$$

- e. 補文関係：[LCS2...[LCS1]...]

（15）のように、由本（2005）は AND, WHILE, BY, FROM などの意味関数で V1 と V2 の語彙概念構造を結び付けている。そして、由本は複合的な LCS が単一の事象を表す LCS に再分析されるとし、例えば、「泣き叫ぶ」「蹴り上げる」を（16）のように分析している。

- （16） a. 泣き叫ぶ：

$$\begin{aligned} & [[x_i] \text{ CONTROL } [[y_i] \text{ CRY}] \text{ AND } [[x_i] \text{ CONTROL } [[y_i] \text{ SHOUT}]] \Rightarrow \\ & [[x_i] \text{ CONTROL } [[y_i] \text{ CRY AND SHOUT}]] \end{aligned}$$

（由本 2005:113）

- b. 蹴り上げる：

$$\begin{aligned} & \left[\begin{array}{c} [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [[y_i] \text{ BE } [\text{AT } [\text{UP}]]]]]] \\ \text{BY } [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON}[y_i]]] \end{array} \right] \Rightarrow \\ & [[x_i] \text{ CONTROL } [[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON}[y_i]]] \text{ CAUSE} \\ & [\text{BECOME } [[y_i] \text{ BE } [\text{AT } [\text{UP}]]]]] \end{aligned}$$

（由本 2005:124）

由本（2005:113）は（16）について、次のように説明している。「泣き叫ぶ」において、どちらも非能格動詞で、CONTROL 関数の第一項動詞と、その補部にあたる事象内の第一項動詞とがそれぞれ同定される。CONTROL 関数の項であった事象は融合し、単一の事象を表す LCS に再分析される。（16）b「蹴り上げる」という手段関係複合動詞では、手段

を表す LCS1 は BY で導かれる付加詞として表されているが、CAUSE の第一項の位置を占める下位事象として再分析される。操作としては、主要部の V2 の LCS2 に CAUSE 関数が含まれており、その第一項として使役者の代わりに LCS1 を挿入する。

3.2.3 節では語彙的複合動詞の語形成モデルに関する代表的な先行研究を概観し、語彙的複合動詞がどのような形で一つの語をなしているということはある程度分かってきた。すなわち、影山（1993）は語彙的複合動詞は項構造レベルで一つの語が合成されるという項構造の合成モデルを提示している。これに対して、松本（1998）と由本（2005）は語彙的複合動詞は二つの動詞の意味構造が合成され、単一の意味構造をなすという意味構造の合成レベルを提案している。

3.2.4 先行研究のまとめ

以上、日本語の語彙的複合動詞をめぐる代表的な先行研究を概観してきた。先行研究の検討により、本章最初にあげた〔1〕－〔4〕の諸点が明らかになったので、ここで整理しておくことにする。

〔1〕 日本語の複合動詞はどのようなものであるか

複合動詞はまず語形成部門によって語彙的複合動詞と統語的複合動詞に大別されている。語彙的複合動詞はまた二つの動詞の意味関係によって、並列、手段、様態・付帯状況、原因、補文関係に分けられる。

〔2〕 複合動詞の語形成制約をどのように論じているか

複合動詞の語形成制約について、大きく二つの考え方がある。一つは影山（1993）の項構造での制約であり、もう一つは、松本（1998）、由本（2005）の意味構造での制約である。影山（1993）では、語彙的複合動詞は項構造レベルで作られ、「他動性調和の原則」に制限されていると主張している。影山（1993）に対して、松本（1998）と由本（2005）は語彙的複合動詞は意味構造レベルで合成されると主張している。両氏とも語彙的複合動詞を意味関係によって分類した上で、各パターンの複合動詞の意味構造における制約を提案している。意味的制約に加えて、松本（1998）は「主語一致の原則」、由本（2005）は「非対格性優先の原則」を提出している。

〔3〕 複合動詞の意味構造をどのように論じているか

影山（1993）は語彙的複合動詞の語形成を項構造の合成とし、V1 と V2 の項が同定されえるという語形成モデルを提出している。また、V1 と V2 の意味の組み立てとして概念構

造の合成の仕方についても論じている。他方、松本（1998）と由本（2005）は語彙的複合動詞は意味構造レベルで合成されると主張し、2つの動詞の意味構造がどのように1つの意味構造になるのかについて述べている。松本（1998）及び由本（2005）は意味構造の表記が異なるが、両方とも語彙的複合動詞を意味関係によって分類した上で、各タイプの意味構造を提示している。

〔5〕 先行研究に残された問題点は何か

影山（1993,1996,1999）の一連の研究では、複合動詞を項構造レベルでの合成とし、項の同定により、動詞と動詞の組み合わせのパターンがいくつかに限られ、語彙的複合動詞の可能性が決まるとしている。一方、松本（1998）と由本（2005）は複合動詞を意味関係によって分類した上、分類ごとに語形成制約と事象構造を提出している。松本と由本の分析はV1とV2の意味関係に注目し、二つの動詞はある意味関係によって結ばれているという点が重要視されている。

これらの先行研究は詰まるところ、いずれも語彙的複合動詞の語形成をV1とV2の合成によって形成されるとしている。項構造、意味構造の違いはあっても、合成的プロセスによるという点では同じである。例えば、「切り倒す」のような適格の複合動詞について、影山（1993）では、「切る」も「倒す」も他動詞であり、同じ項構造を持っているため、「切り倒す」は成立すると説明している。これに対して、「*切り倒れる」などの複合動詞は他動詞と非対格自動詞の組み合わせであり、項構造のタイプが異なるため、成立しないと論じている。一方、松本（1998）、由本（2005）は「切り倒す」の成立と「*切り倒れる」の不成立を次のように説明している。「切り倒す」において、V1とV2の意味関係は手段である。手段関係複合動詞は動作主的な動詞（V1）と使役動詞（V2）の組み合わせでなければならない（松本 1998:53）。「切り倒す」は手段関係複合動詞の組み合わせの条件に合致しているので、成立する。「*切り倒れる」の不成立について、これは「切る」と「切れる」の主語が一致していないからであると論じている。しかし、「打ち上がる」「積み重なる」などの複合動詞は「他動性調和の原則」にも「主語一致の原則」にも違反しているので、このような合成的なアプローチはいずれも「打ち上がる」「積み重なる」のような複合動詞を例外扱いしている。

本稿では「切り倒す」「打ち上がる」などの複合動詞の成立及び「*切り倒れる」のような複合動詞の不成立をすべて語彙化された一語として認められるかどうかとして考える。先行研究では、複合動詞は単純動詞と区別して分析され、複合動詞も単純動詞も語彙化さ

れた一語である点は同じであることは無視されている。しかし、単純動詞も複合動詞も一語である以上、一語が表す可能な意味という点では共通しており、パラレルな事象構造を持っていると思われる。複合動詞の語形成も一語として表す可能な意味に制約されていると考えられる。語彙意味論では、可能な動詞の意味はどんなものかという問いが重要な問題として取り上げられ、一つの動詞が表す可能な事象構造について様々な研究がなされてきた。このため、本稿は語彙的複合動詞の語形成について、語彙意味論という理論的枠組みを利用し、語彙化のアプローチにより、複合動詞全体が表す「可能な動詞の意味」はどのようなものかという角度から考察する。後述するが、本稿では、日本語の単純動詞も複合動詞も「一語」として表す可能な意味は「様態」「結果」「様態+結果」という三つである。複合動詞の事象構造はその三つの意味を表す事象構造のいずれかであり、複合動詞の語形成はその事象構造に制約されており、V1 と V2 の意味関係もその事象構造から導き出される。

次節から語彙的複合動詞が一語であることを語彙化の角度から論じる。3.4 節で単純動詞が表す可能な意味について考察し、単純動詞が表す事象構造を提示する。その上で、複合動詞の一語としての事象構造を分析する。

3.3 語彙的複合動詞と語彙化

本節は語彙的複合動詞は一つのまとまった意味を表す語彙化された一語であることについて論じる。

3.3.1 語彙的複合動詞が語彙化された「一語」である

まず簡単ながら、「語彙化」とは何かということを明らかにしておく。Brinton&Traugott (2005) は「語彙化」という術語を以下のような二つの意味として使われているとしている。

The term LEXICALIZATION has been used for two very different phenomena. Synchronically it has been used for the coding of conceptual categories. Diachronically it has been used variously for "adoption into the lexicon" or "falling outside the productive rules of grammar."

Brinton&Traugott (2005:18)

このように、Brinton&Traugott (2005:18) は、語彙化という用語が大きく分けて共時的な意味と通時的な意味で使われるとしている。共時的な意味での語彙化は、ある状況が言語にどのようにコード化されるのかに関わるものである。一方、通時的な語彙化は、新しい表現が、レキシコンに定着する過程を指すものである。語彙意味論の枠組みは、「語彙化」を共時的意味で用いて、事象が一語にコード化されることを「語彙化」として捉えている。

英語などの言語において、日本語のような複合動詞はないため、「一語」は一つの語根しか持っていないと考えられる。一方、日本語の語彙的複合動詞は二つの動詞からなるものであるが、単純動詞と同じように、一つのまとまった意味を表す語彙化された「一語」とであるとされる。これについて説明する。

複合動詞が一つの「語」であるということは、影山 (1993) では形態的緊密性によって論じられている。3.2.1 節で論じたように、影山 (1993) は語であるかどうかを語の形態的緊密性という性質によって判断している。複合動詞はその内部に統語的な要素を導入させることは許されず、そして、＜等位構造における削除＞も許されないので、形態的なまとまりを構成し、一語としての資格を持つことを確かめた。そして、語彙的複合動詞は意味の慣習化と語彙的選択制限を備えており、典型的な「語」である。また、由本 (2005) は語彙的複合動詞の単一事象としての事象構造を提出していないが、複合動詞はもともと二つの動詞概念として存在していた LCS が単一の動詞概念として機能するように合成すると述べている。そして、動詞の意味構造が普遍的に制限されたいくつかの LCS のパターンに制限されているとすれば、複合動詞の形成も、その意味構造がそれらのうちのどれかと同じになるように、二つの動詞の LCS が合成されねばならないはずである。そうでなければ、それは単一の語としては認知され得ないと由本 (2005:110) は論じている。

本稿では、「テ形」接続との比較によって語彙的複合動詞が語彙化された一語であることを論証する。多くの語彙的複合動詞は、(17) に示されているように、二つの動詞を使ってそのまま「テ」形動詞に言い換えられる。

(17) 並列関係：泣き叫ぶ → 泣いて叫ぶ

付帯・様態：持ち歩く → 持って歩く

手段：焼け死ぬ → 焼けて死ぬ

原因：流れ着く → 流れて着く

語彙的複合動詞もテ形動詞も二つの動詞が結びつく形式である。しかし、語彙的複合動詞は V1 と V2 の意味関係は並列、手段、様態、原因などに制限されているのに対して、テ形連接では意味関係がより多様である。例えば、以下のようになる。

- (18) a. 継起 朝起きて顔を洗う (明鏡)
- b. 原因・理由 風をこじらせて寝込む (同上)
- c. 対比 罪を憎んで、人を憎まず。 (同上)
- d. 方法・手段 うちわを使って風を送る。 (同上)
- e. 付帯状況 黙って付いて行く (同上)
- f. 逆接 知っていて教えてくれない。 (同上)
- g. 起点 結婚して十年になる。
- h. 様態 あの人は老けて見える。
- i. 反復・継続 我慢して我慢して生きる (広辞苑)
- j. 判断の対象となる出来事 失敗して当然だ。 (明鏡)

先行研究では、語彙的複合動詞において、V1 と V2 の意味関係が制限されているということはおおよそ共通しているが、なぜその 5 つになっているのかについて言及していない。本稿は語彙的複合動詞の意味関係が制限されているのは語彙的複合動詞は語彙化された一語であり、一語としての意味構造がそのようにできているからと考えている。これについては後述する。

このように、語彙的複合動詞は語彙化された一語である。周知のように、「一語」が表す可能な意味構造は限られている (影山 1996, 1999, Rappaport Hovav & Levin 1998)。語彙的複合動詞は語彙化された一語である以上、一語としての意味構造に制限されるはずである。「一語」として表す可能な意味ということは「語彙化」理論でよく扱われている課題なので、次は「語彙化」に関する研究を援用し、一つの語が表す可能な意味と意味構造を明らかにしたい。

3.3.2 「語彙化」について

Brinton & Traugott (2005: 19) は共時的意味での「語彙化」について次の二つの考え方

があるとまとめている。一つは Talmy (1985,2000)、Jackendoff (1990,2002) など言語によって、複合概念構造が単一の語彙形式に融合するパターンが異なるという類型論的観点から論じる考え方である。もう一つの考え方は Rappaport Hovav & Levin (1998) の事象タイプを決定する事象スキーマ (event schema) と動詞特有の意味を表す「root」の結びつき方である。本稿では後者の考え方に従って語彙化について論じるが、この二つの考え方は相通じるところがあるので、Rappaport Hovav & Levin (1998) の研究を検討する前、まず Talmy (1985,2000) の研究を簡単に紹介する。

Talmy (1985) は移動動詞の語彙化の類型を提案している。移動に Motion (移動という概念)、Path (経路)、Figure (移動する物体)、Ground (基準物)、Manner or Cause (様態または原因) といった意味要素があると論じ、1つの動詞において、Motion がどのような意味要素と融合されるかによって世界の言語を3つの語彙化パターンに分けている。

- (19) a. 移動と様態または原因との融合
- b. 移動と経路の融合
- c. 移動と物体の融合

その中で、(19) c「移動と物体の融合」パターンはごく少数の言語しかないので、a,bはよく研究されている。例えば、aパターンであれば、(20) のような例がある。

(20) The rock rolled down the hill.

このような単一の動詞語根に語彙化された表現は複合節と言い換えられる。例えば、(20) の文は以下のように言い換えられる。(21) から分かるように、「roll」という移動動詞は「move」(移動) と「roll」(様態) という二つの要素が融合されている。

(21) The rock rolled down the hill =
 The rock moved down the hill, rolling.

次に、bパターンであれば、(22) のようになる。「渡る」は「移動」と「経路」が融合されている移動経路動詞である。

(22) 太郎は川を歩いて渡った。

Talmy (1985) によると、一つの言語は最も特徴的な語彙化パターンとして用いる。例えば、英語は移動様態動詞が多いのに対して、日本語は移動経路動詞が多い。そして、Talmy (1985) は「状態変化」が一つのイベントタイプとして言語において移動と平行していると論じている。経路は状態変化事象では、「変化」と平行している。これについては、小野 (2004) などにも指摘している。

Talmy (2000) では世界の言語が、経路は動詞にコード化されるタイプ (動詞フレーム) と、動詞以外の述語要素 (サテライト) にコード化されるタイプ (サテライトフレーム) の2つに分けられている。日本語は移動経路動詞が多いことから、動詞フレーム言語であるとされている。また、Talmy (2000) では「マクロイベント」という概念を提示している。マクロイベントとは、幾つかの言語で単節で表現できる単一イベントに概念統合できる複合イベントである。この定義からみれば、日本語の単純動詞も複合動詞も単節なので、マクロイベントを表す。マクロイベントには「移動」「状態変化」「時間的輪郭付け」「行為の相関付け」「実現」などのタイプがあり、動詞フレームかサテライトフレームという類型論的カテゴリーはマクロイベントが関与する五つのタイプのイベントすべてに当てはまると Talmy (2000) は論じている。これにより、すべての動詞は「様態」と「経路 (変化)」によって分析できるようになる。

Talmy (2000) の二分法に対して、動詞フレーム、サテライトフレーム以外に、「Equipollently-framed」タイプもあるという三分法を主張する研究もある (Slobin 2004)。「Equipollently-framed」言語では「様態」と「経路」は同じタイプの文法的要素で表現されている¹³。本稿ではこれについて議論しないが、このような三分法で考える場合、日本語の複合動詞は「Equipollently-framed」タイプに当てはまると考えられる¹⁴。

Talmyの研究をめぐって数多くの議論がなされてきたが、「様態」と「経路」(変化) が動詞の意味を考える上で最も重要な二つの要素であることは共通の認識になっている。

¹³ Beavers, John, Beth Levin, and Tham, Shiao Wei. (2010:4) では、「Equipollently-framed」について、次のように述べている。「… ‘Equipollently-framed languages’, encompassing languages in which path and manner are expressed by equivalent grammatical forms.」

¹⁴ 3.5 節で論じるが、日本語の複合動詞では「様態+結果 (経路)」のタイプは最も数が多い。

そして、移動事象と状態変化事象が統語的に平行しているという指摘はその後の研究でも広く認められている。本稿は言語類型論の角度から複合動詞の自他交替について論述するものではないが、Talmyの「様態」と「経路」から動詞の意味を考える点で本稿にとって非常に有益である。

「語彙化」について、もう一つの考え方は Rappaport Hovav & Levin (1998,2008,2010) の一連の研究である。本稿は Rappaport Hovav & Levin の研究に負うところが多いので、ここで詳しく検討する。

第2章ですでに少し紹介したが、Rappaport Hovav & Levin (1998,2008,2010) では、動詞の意味を構造的意味 (event schema) と、その動詞に個別の意味を表す「root」で構成すると述べている。そして、「root」と「event schema」の結びつき方の違いによって、動詞を (23) のように、大きく Result Verbs (結果動詞) と Manner Verbs (様態動詞) に分けている。それぞれの定義と例を (23) に示している。

(23) a. MANNER VERBS: specify a manner of carrying out an action.

cry, hit, pound, run, shout, shovel, smear, sweep, . . .

b. RESULT VERBS: specify the result of an event.

arrive, clean, come, cover, die, empty, fill, put, remove, . . .

(Levin&Rappaport Hovav2008:1)

Levin&Rappaport Hovav (2008) によると、「様態動詞」は行為の様態を指定する動詞であり、「結果動詞」は変化結果を指定する動詞である。例 (24) のように、「wipe」のような様態動詞は動作の様態が指定されているが、結果状態がどうなるかは不問に付されている。一方、「clean」のような結果動詞は結果状態が指定されているが、結果を引き起こす行為の様態は含意していない。

(24) a. I just wiped the table, but it's still dirty/sticky/wet.

b. I cleaned the dress by soaking it in hot water/pouring bleach over it/saying
“abracadabra”.

(Levin&Rappaport Hovav 2008:1)

そして、Levin&Rappaport Hovav は様態動詞は常に慣習的な結果を含んでいるが、その結果を語彙化していないと述べている。例えば、「wipe」という様態動詞は常に汚れを取り除くという結果を含めているが、その結果はキャンセルできる。例 (24) a がその例である。一方、結果動詞は常にある慣習的な様態と結びつくが、その様態を含意していない。例えば、「clean」という結果動詞は、ある特定の行為によって引き起こされると考えられる。しかし、(24) b のように、結果動詞に伴う様態は一つに特定されていない。

以上のように、Levin&Rappaport Hovav は動詞を大きく二つの種類に分けている。そして、この二つの種類しかないとも論じている。Levin&Rappaport Hovav によると、動詞の意味構造において root は ACT 述語を修飾し、manner root になるか ((25) a)、或いは、BECOME の項として result root になるか ((25) b)、どちらか 1 つしかない。動詞の意味構造に同時に manner root と result root を含むことができない ((25) c)。

- (25) a. [x ACT<ROOT>]→様態動詞
- b. [[x ACT]CAUSE[y BECOME<ROOT>]]→結果動詞
- c. * [x ACT<ROOT>] CAUSE[y BECOME<ROOT>]

これにより、Rappaport Hovav & Levin (2010) は次のような興味深い主張をしている。(26) に示されている様態と結果の相補性は、「可能な動詞の意味」を規定する強い仮説である。

(26) Manner/Result Complementarity

Manner and result meaning components are in complementary distribution: a verb lexicalizes only one.

(様態と結果の意味要素は相補的な分布を成す。すなわち、動詞は様態か結果のどちらか一つだけを語彙化する)

このように、Rappaport Hovav & Levin では、一つの動詞に様態か結果か、どちらか一つしか語彙化できないと主張している。しかし、本当にそうであろうか。例えば、日本語の場合、「太郎はねぎを刻んだ」では動作主(太郎)の「包丁など鋭利な道具で細かく切る」という特定の動作も含まれていれば、目的語(ねぎ)の「みじん切りになる」という変化

も含まれている。つまり、「刻む」という動詞は様態と結果両方が語彙化されていると考えられる。この点については、すでに Goldberg (2010)、Beavers and Knootz-Garborden (2012) などは英語などの例を取り上げ、「様態」と「結果」両方を含む動詞が存在すると論じており、Rappaport Hovav & Levin のこの仮説の反論を唱えている。またその一方で、そうした反例を取り込む修正案も提案されている (Husband2011)。次ではこれらの研究を簡単に紹介する。

Goldberg (2010) は「climb」、「scrawl」、「verbs of creation」、「verbs of cooking」など「様態」と「結果」両方が含まれる例を取り上げ、Rappaport Hovav & Levin の相補分布という制約は一語としての制約にならないと指摘している。

Beavers & Knootz-Garborden (2012) は (27) のような例を取り上げ、「様態」と「結果」両方の意味を語彙化する動詞があると論じている。

(27) ①殺害様態動詞 (Manner of Killing Verbs)

guillotine, decapitate, quarter, immolate, behead, ...
crucify, drown, hang, guillotine, electrocute

②料理様態動詞 (Manner of Cooking Verbs)

barbecue, blanch, braise, broil, fry, roast, toast,...

①殺害様態動詞はある種の行為によって殺すということを表す。例えば、「guillotine」は「ギロチンで首を落とす」という意味であり、特定の手段も指定されれば、「死ぬ」という結果状態も語彙化されている。②料理様態動詞は、ある特定の調理法で、ある材料を調理された状態へ変化させるということを表す。例えば、「barbecue」は「じか火で丸焼きにする」という意味であり、調理の様態と変化結果を表している。

Beavers&Knootz-Garborden は様態と結果を認定するテストを設けて、以上の (27) のような動詞は両方のテストが通るので、両方を含むと判断している。「様態動詞」の判断テストは「selectional restrictions」(主語の選択制限)、「Denial of Action」(動作の否定)、「Complexity of Action」(動作の複雑性) という三つが設定されている。また、「変化動詞」については、「Denial of Result」(結果の否定)、「Object Deletion」(目的語の省略)、「Restricted Resultatives」(結果構文の制限) という三つの判断テストが設けられている。

本稿では、3.4 節でこれらの判断テストを参考に、日本語における「様態」「結果」について考察するが、ここでは、これらの判断テストについて詳述しない。

Husband (2011) も様態と結果両方の意味が語彙化されている動詞を認めているが、Goldberg (2010)、Beavers & Knootz-Garborden (2012) と違って、この二つの意味は、語彙的には等価ではなく、異なる意味論的特性を持っている述べている。そして、(28) のような主張を提出している。

(28) The manner component is an assertiton, the result component is a
presupposition.

(様態は「断定」であり、結果は「前提」である。)

Husband (2011:5)

Husband は (28) について、(29) (30) のような例を取り上げて説明している。

- (29) a. King Louis XVI wasn't guillotined. He was strangled to death.
b. #King Louis XVI wasn't guillotined. He remained King of France for year.
(30) a. Shane didn't poach the egg. He fried the egg.
b. #Shane didn't poach the egg. He didn't cook it.

(29) a から分かるように、「guillotine」の様態（ギロチンで首を切る）が否定できる。これに対して、b に示されているように、「guillotine」の結果「死ぬ」がキャンセルできない。この二つの例から分かるように、「guillotine」という殺害様態動詞では、「death」という結果は「前提」である。(30) 「poach」という料理様態動詞も同じように、「cook」という結果は「前提」となる。

これらの議論により、Husband (2011) は Rappaport Hovav & Levin の様態・結果の相補分布の仮説を以下のように修正している。

(31) Manner/Result Complementarity:

Manner and result meaning components are in complementary distribution with respect to a kind of meaning: A verb can assert only one.

Husband の修正案から窺えるように、動詞は様態か結果のどちらか1つしか断定できないが、両方とも語彙化されている。Husband のこの主張は以下のように理解してもいいと思われる。すなわち、殺害様態動詞は殺害動詞の下位概念であるため、「殺害」という結果は当然「前提」となると考えられる。

以上のような議論から分かるように、「様態」「結果」両方が語彙化される動詞は存在している¹⁵。3.4.1 節で考察するが、日本語にも「様態・結果」動詞が存在するため、本稿は「様態・結果」動詞の存在を認める立場をとる。

3.3.3 「一語」が表す可能な意味と意味構造

前節では、語彙化の理論について、Rappaport Hovav & Levin (1998,2008,2010) 及びそれをめぐる研究を紹介した。本稿ではこれらの考え方にしたがって、一語が表す可能な意味は「様態」「結果」「様態・結果」の三つであると認める。次はそれぞれの動詞の LCS について考えてみよう。「様態動詞」と「結果動詞」の LCS はすでに明らかにされているが、問題は「様態・結果動詞」の LCS はどのようなになっているのかということである。

Beavers & Knootz-Garborden (2012) は様態・結果動詞を結果構文と対照して、「again」と共起する際の意味の解釈の差異という判断テストによって、「様態・結果」動詞は「様態」と「結果」という二つの意味要素を含んでいるが、その二つの意味要素は一つの root に融合されていると主張している。(32) a のような結果構文は動詞と結果述語は別々の root を持っているため、「again」と共起する際、「again」は結果述語「flat」だけをカバーすることができるという。これは (32) b のような事象構造で表記されている。

(32) a. Mary has made a sheet of metal that is flat, but it later accidentally became bent. Fortunately, John hammered the metal flat again.

b. [[x ACT<hammering>]CAUSE[y BECOME BE AT< flat>]]

これに対して、様態・結果動詞と「again」と共起する際、「again」は「様態」と「結果」

¹⁵ 「様態」と「結果」両方が語彙化される動詞は Talmy (1985,2000) などの言語類型論の角度から考えれば、「Equipollently-framed」タイプに当てはまると考えられる。

両方をカバーしており、「結果」だけをカバーすることができない。これにより、Beavers & Knootz-Garborden は様態・結果動詞では、「様態」と「結果」は一つの「root」に融合されているので、その事象構造は (32) b のように表すことができないという結論を出している。しかし、構文の場合、「結果述語」だけをカバーすることが可能になるが、様態・結果動詞は語彙化された一語であり、「again」はその意味要素の一部分「変化」だけをカバーすることが無論できないと思われる。このため、「again」と共起する際の解釈によって、「様態」と「結果」が一つの root に融合されるという説は成り立たないと思われる。そして、仮に Beavers & Knootz-Garborden の考えが正しいとしたら、その考え方にしたがって、様態結果動詞の LCS を書くと、(33) のようになる。

(33) [[x ACT<MANNER+STATE>]CAUSE[y BECOME BE AT <manner+state>]]

しかし、このように書くと、Husband (2011) に提案されている「様態」と「結果」は等価ではなく、「結果」は「前提」であるという点は捉えられない。そこで、本稿では、Husband の主張を考慮に入れ、様態・結果動詞の LCS を (34) のように示す。

(34) [[x ACT<MANNER>]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

ただし、この LCS では、「state」は前提であるので、<state>という「root」は<MANNER>より先に決められる。例えば、「guillotine, decapitate, quarter, immolate, behead」などの殺害様態動詞の LCS を書く場合、(35) のように、「death」という結果はすでに決まっている。すなわち、これらの殺害様態動詞は「kill」の下位概念である。その後、個別の意味として、<MANNER>が来る。

(35) [[x ACT<MANNER>]CAUSE[y BECOME BE AT <death>]]

(36) a. [[x ACT<gulloting>]CAUSE[y BECOME BE AT <death>]]

b. [[x ACT<decapitating>]CAUSE[y BECOME BE AT <death>]]

c. [[x ACT<quartering>]CAUSE[y BECOME BE AT <death>]]

...

以上の議論をまとめると、語彙化された一語が表す可能な意味である「様態」「結果」「様態・結果」のそれぞれの LCS は (37) のようにまとめられる。

- (37) a. [x ACT<MANNER>]→様態動詞
b. [[x ACT]CAUSE[y BECOME AT <state>]]→結果動詞
c. [[x ACT<MANNER>]CAUSE[y BECOME AT <state>]]→様態・結果動詞

第2章で述べたように、動詞はアスペクトによって、状態、活動、到達、達成という四つに分けられている。また、事象タイプによって、大きく状態 (state)、過程 (process)、変化 (transition) という三つのタイプに分類できる。Rappaport Hovav & Levin (1998:104) によると、様態動詞と結果動詞は異なる語彙的アスペクトを持っており、様態動詞は活動動詞、結果動詞は到達か達成動詞に相当すると考えられる。到達と達成は事象タイプでは同じ変化 (transition) に属しているので、事象タイプから見れば、様態動詞は過程タイプであり、結果動詞は変化タイプであると考えられる。そして、Pustejovsky (1995) の表記に従えば、様態・結果動詞は様態を指定する上位事象と結果を指定する下位事象両方を含むので、上位事象は「process」、下位事象は「state」と示す。(37) に動詞の自他性及び事象タイプの情報も入れると、(38) のようになる。なお、結果他動詞も様態・結果動詞も process と state という二つの下位事象を持っているが、様態結果動詞における process 事象では、「manner」が指定されている点で結果他動詞と区別できる。このため、(38) に示されているように、結果他動詞の process 事象に「-manner」、様態・結果事象における process 事象に「+manner」を付け加えて示している。

(38) ①.様態動詞：

- a. LCS:[x ACT<MANNER>]or[x MOVE <MANNER>]
EVENTSTR=E1=e (x) :process

b. LCS:[x ACT<MANNER>ON y]
EVENTSTR=E1=e (x,y) :process

②.結果動詞：

- a. LCS:[y BECOME BE AT <state>]or[x MOVE [path z]]

EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition

- b. LCS:[x ACT]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner)

E2=e2 (y) : state

③.様態・結果動詞¹⁶ :

- a. LCS: [[x ACT<MANNER>]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=e2 (y) : state

- b. LCS:[y MOVE<MANNER> [path z]]

EVENTSTR=E1=e1 (y) :process (+Manner)

E2=e2 (y) : state

これまで、3.3 節で語彙化の基本的な考えを紹介し、一語が表す可能な意味と事象構造を明らかにした。Levin&Rappaport Hovav (1998)、Goldberg (2010)、Beavers&Knoontz-Garborden (2012)などはすべて英語の動詞について論じているが、本稿はそれらの研究を参考に、日本語の単純動詞を分類し、それぞれのタイプの事象構造を提示し、日本語の「可能な動詞の意味」を考察する。その上で、日本語の語彙的複合動詞の事象構造を分析する。

3.4 日本語単純動詞の事象構造

語彙的複合動詞は単純動詞と同じように語彙化された一語であるため、一語と認識されるために、一語としての事象構造を持たなければならない。つまり、語彙的複合動詞は単純動詞と平行な事象構造を持っていると考えられる。語彙的複合動詞の事象構造を考

¹⁶ (40) ③ b は移動事象の様態・結果動詞である。Goldberg2010, Beavers and Knoontz-Garborden2012, Husband2011などは主に他動詞としての様態・結果動詞について論じている。英語には、「climb」、「scale」のような様態・結果自動詞も観察されているが、議論の焦点になっていない。後述するが、日本語には様態・結果自動詞は見当たらないが、複合動詞の場合は見られるため、ここで様態結果動詞の議論に基づいて、その事象構造を書いておく。

察する前、まず単純動詞の事象構造を明らかにする。本節は語彙化の理論を援用し、日本語の単純動詞の語彙化タイプと事象構造を提示する。まずは日本語における「様態」と「結果」の認定について分析を行う。

3.4.1 「様態」と「結果」について

Rapaport Hovav & Levin は様態動詞か結果動詞かを分類するための判断テストとして、動詞が生起可能な構文形式の違いを挙げた。例えば、目的語省略 (object deletion)¹⁷、下位範疇化されていない目的語と共起できるかどうか¹⁸などである。3.3.2 節で紹介したように、Beavers&Knoontz-Garborden (2012) は Rapaport Hovav & Levin の判断テストに手を加え、様態動詞、結果動詞それぞれの判断方法を提案している。Rapaport Hovav & Levin と Beavers&Knoontz-Garborden はいずれも英語の動詞についての判断テストを設定しているので、そのまま日本語の判断テストとして使用できない。しかし、Rapaport Hovav & Levin のテストは英語の特有な統語現象を扱うものが多いのに対して、Beavers&Knoontz-Garborden は言語一般的な現象を利用して判断するテストが多いため、日本語における「様態」と「変化」の判断方法は、おおいに Beavers&Knoontz-Garborden (2012) の判断テストを参考にしている。なお、Beavers&Knoontz-Garborden の判断テストについては、それぞれのテストを利用する際に簡単に説明する。以下では、事象を移動事象と状態変化事象に分けて考察し、日本語における「様態」と「結果」について、以下のような判断テストを設定する。

①キャンセル文

¹⁷ Rapaport Hovav & Levin (1998:102)によると、英語では、様態動詞は目的語が省略できるが、結果動詞は目的語省略が許されない。例えば、次の例 a では「sweep」は様態動詞であり、目的語は省略できる。しかし、b の「break」という結果動詞は目的語を省略すると非文になる。

a. Leslie swept (the floor) . b. * Kelly broke.

¹⁸ Rapaport Hovav & Levin (1998:103)は「Co-occurrence with non-subcategorized objects」という判断基準を提出している。様態動詞は下位範疇化されていない目的語と共起して結果構文を形成できるのに対して、結果動詞はそれが容認されない。例えば、

a. Cinderella scrubbed her fingers to the bone.
b. *The clumsy child broke his knuckles to the bone.

これにより、例文 a の scrub は様態動詞であり、b は結果動詞であると判断できる。

A. 「様態」の判断

「～したが、筋肉は全然動かなかった。」（不可→様態）

Beavers&Knoontz-Garborden (2012) は様態動詞の判断について、「but didn't move a muscle」という判断テストを提出している。本稿もそれに従い、「～したが、筋肉は全然動かなかった」という判断テストを用いた。ただし、Beavers&Knoontz-Garborden に述べられているように、この判断テストは最も典型的な様態、すなわち、人は身体部位を動かして動作を行う場合に適用される。「様態動詞」は「様態」が指定されている動詞なので、その様態がキャンセルできない。従って、身体部位の動きを否定する節と共起できない。これに対して、「結果動詞」は「様態」が指定されず、主語の直接的な行為でもよければ、無生物、自然力でもよい。

- (39) a. *太郎は泳いだが、筋肉は動かなかった。→様態
b. *太郎は笑ったが、筋肉は動かなかった。→様態
c. *太郎はドアを蹴ったが、筋肉は動かなかった。→様態
d. *彼はねぎを刻んだが、筋肉が全然動かなかった。→様態
d. 太郎はガラス窓を壊したが、筋肉は動かなかった。→結果

(39) に示されているように、「泳ぐ」「笑う」「蹴る」「刻む」といった動詞は「筋肉は動かなかった」という否定節とは共起できないので、「様態」を含んでいると判断できる。これに対して、「壊す」は「筋肉が全然動かなかった」と共起できるので、「様態」を含んでいないと考えられる。

B. 「結果」の判断：

「～したが、何の変化もない。」（状態変化事象）（不可→結果）

「～したが、まだもとの位置にいる。」（移動事象）（不可→結果）

Beavers&Knoontz-Garborden (2012) は結果動詞について、「～, but nothing is different about it」という判断テストを設定している。「結果動詞」は変化結果が含意されているので、その変化を否定することができない。このため、ここで、変化結果のキャン

セル文を判断テストとして設けた。なお、状態変化事象の場合は「何の変化もない」というテストを使用するが、移動事象の場合は、対象物自身の変化ではなく、位置の変化が起こるので、「まだもとの位置にいる」というテストを設けた。

- (40) a. *太郎はガラスを壊したが、ガラスに何の変化もない。→結果
b. *太郎は岸に戻ったが、まだ元に位置にいる。→結果
c. *彼はねぎを刻んだが、ねぎには何の変化もない。不可→結果
d. 太郎はテーブルを拭いたが、テーブルに何の変化もない。→様態
e. 太郎は走ったが、まだ元の位置にいる。→様態

(40) a のように、「壊す」文では、対象物「ガラス」の変化を否定する文と共起できないため、変化結果が語彙的に含意されていると判断できる。b では、「戻る」は移動動詞であり、「まだ元の位置にいる」と共起できないので、位置の変化が含まれていると分かる。これに対して、d と e は、変化結果はキャンセルできるので、変化結果が指定されていないと判断できる。ここで、注意してほしいのは、c の「刻む」は変化結果の否定文と共起できないことから、変化結果が含まれているということが判断できる。上述した (39) d から分かるように、「刻む」の様態も否定できない。これにより、「刻む」という動詞は「様態」と「結果」両方が指定されている「様態・結果動詞」であることと認める。

②主語の選択制限

A. 「様態」の判断：主語への選択制限が厳しい

Beavers&Knoontz-Garborden によると、様態動詞は「様態」が指定されているので、その特定の行為を行う参加者も制限されている。このため、様態動詞文になる主語は限られ、選択制限を受けており、通常、自然力や無生物は主語にならない。ただし、無生物の中で、道具や機械などは人が操作するものであると考えられるため、様態動詞文の主語にもなる。例えば、(41) a では、「泳ぐ」の主語は生物に限られ、道具や自然力などは主語になれない。b では、「刻む」は普通人は何らかの道具を用いてやる動作であり、自然の力はねぎを刻むことはありえないと考えられるので、特定の様態が含まれていると判断できる。

(41) a. 人・動物/ * 道具/ * 自然力が泳ぐ。→様態

b. 人/包丁/*自然力がねぎを刻む。→様態

B.「結果」の判断：主語への選択制限がより緩い

様態動詞に対して、(42) に示されているように、「壊す」などのような結果動詞は様態が指定されておらず、人間でも道具でも自然力でも主語になる。

(42) a. 人/道具/自然力は窓ガラスを壊す。→結果

b. 人/道具/自然力は風船を割る。→結果

③結果構文（着点表現）に適合するかどうか

A.「様態」の判断：結果構文（着点表現）に適合しない

多くの先行研究（上野・影山 2001、田中・松本 1997 など）によると、日本語の様態の移動動詞が「二格」の着点句を取れない。これは、「二格」は結果がすでに動詞によって焦点化されていることを要求するためであると田中・松本（1997:186）は主張している。他方、結果が指定されている移動経路動詞は「二格」と共起できる。これと平行して、日本語の結果構文では、動詞が何らかの変化の結果を含意することが要求されている。従って、「結果構文」に適合できるかどうか「結果動詞」の判断テストの一つになる。例えば、(43) a では、移動動詞「泳ぐ」「漂う」「這う」は「岸に」という着点句を取れないので、変化結果が含意されていない移動様態動詞と判断できる。b の「叩く」は結果構文に適合できないということから、変化結果が含まれていない様態動詞と判断できる。

(43) a. *太郎は岸に泳いだ/漂った/這った。→様態

b. *太郎は鉄を平らに叩いた。→様態

B.「結果」の判断：結果構文（着点表現）に適合する

(44) a のように、移動事象の場合、「着点」と共起できる。b では、「割る」は「結果構文」に適合できるため、変化結果が含意されている結果動詞と認める。c では、「刻む」は「結果構文」に適合できるということから、「刻む」は「変化結果」が含まれているということが分かる。

- (44) a. 太郎は岸に戻った/降りた。→結果
b. 太郎は皿を粉々に割った。→結果
c. 彼はねぎを千切りに刻んだ。→結果

以上は日本語における「様態」と「結果」に関する判断テストについての説明である。どのテストも絶対的なものではなく、おそらく反例が出てくると思われるが、判断の目安としてはこれで十分だと考えられる。注意してほしいのはこれらの判断テストによって、日本語にも「様態・結果動詞」があるということが判断できた。上では「刻む」を例として、各テストを利用して判断したが、ここでそれらの判断テストを(45)のようにまとめる。

- (45) 彼はねぎを刻んだ。
- a. 様態の否定：*彼はねぎを刻んだが、筋肉が全然動かなかった。→様態
b. 主語の選択制限：人/?道具/*自然力がねぎを刻んだ。→様態
c. 変化結果の否定：*彼はねぎを刻んだが、ねぎには何の変化もない。→結果
d. 結果構文：彼はねぎを千切りに刻んだ。→結果

a は様態を判断するテストであり、a 文から「刻む」という動詞は様態が指定されているということが判断できる。b の「主語の選択制限」も分かるように、「刻む」は普通、人が行う特定の行為と思われるので、様態が指定されることが判断できる。c と d から、「刻む」は変化結果を含意していると判断できる。このように、「刻む」は「様態」と「変化」両方の意味を語彙化していることになる。

次節では、これらの判断テストを用いて日本語の動詞を「様態」と「結果」によって分類する。

3.4.2 事象タイプと事象構造

3.4.1 節のような判断テストに基づいて、日本語の単純動詞をまず大きく様態動詞、結果動詞、様態・結果動詞に分け、そして、移動事象か状態変化事象か、自動詞か他動詞かという要素を考慮に入れ、詳しく表 3-1 のようにタイプ分けしている。そして、Rappaport Hovav & Levin (2010)、松本(1997)、影山(1996)などを参考に、それぞれの LCS

と事象構造も提示している。

表 3-1：事象タイプと事象構造

語彙化 タイプ		事象構造	語例
様態	行為様態	LCS:[x ACT<MANNER>] EVENTSTR=E1=e (x) :process (+Manner)	笑う、叫ぶ、遊ぶ、 働く、座る、寝る...
	移動様態	意志的： [[x ACT<MANNER>]CAUSE[x MOVE]] 非意志的： [y MOVE<MANNER>] EVENTSTR=E1=e (x/y) :process (+Manner)	歩く、走る、駆ける、 滑る、流れる
	働きかけ	LCS: [x ACT<MANNER>ON y] EVENTSTR=E1=e (x,y) :process (+Manner)	蹴る、叩く、殴る、 掃く、押す、踏む...
結果	状態変化	LCS:[y BECOME BE AT<state>] EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition	壊れる、潰れる、切 れる、開く、潰れる
	移動経路	意志的： [[x ACT]CAUSE[x MOVE _[path z]]] 非意志的： [y MOVE _[path z]] EVENTSTR=E1=e (x/y) :transition	落ちる、上がる 帰る、戻る、上がる
	使役変化・ 移動	LCS: [[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner) E2=e2 (y) :state	壊す、切る、開ける、 下げる、上げる、降 ろす、沈める、戻す
様態・ 結果		LCS: [[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE[y BECOME AT <state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2 (x,y) :state	切る、刻む、塗る、 吊る、煮る、刈る、 研ぐ、縛る、盛る、 巻く

表 3-1 について、以下の 3 点を説明する。一つは移動動詞の LCS の表記の仕方についてである。移動動詞の LCS はこれまでただ「MOVE」という意味述語で示されているが、後述するが、移動動詞を V2 とする複合動詞には意志性が関わっているため、その意志性を示すために、ここでは、移動動詞を意志的なものと非意志的なものに分けて、それぞれ

の LCS を表示している。「歩く」などのような移動様態動詞及び「戻る」「帰る」などの移動経路動詞は、動作主体によって遂行される一定の運動が自らの移動を引き起こしている。すなわち、再帰的出来事と捉えられる。このため、影山・由本（1997）、影山（2002）を参考に、(46) a のように、意志的移動動詞を再帰的使役移動の LCS で表す。ただし、(46) a では[CAUSE]という意味述語は使役変化動詞の LCS における上位事象と下位事象を結びつける[CAUSE]とは異なり、あくまでも意志性を表すために用いるものであり、再帰的な単一事象を表している。非意志的移動様態動詞と非意志的移動経路動詞は (46) b のように、これまで書いた LCS そのままである。なお、2.2 節で触れたように、LCS における x は動詞の外項、y は内項と対応している。基本的に外項は動作主を表しており、意志的なものであり、内項は非意志的であると考えられるため、(46) に示されるように、意志的移動動詞の LCS の変項を[x]、非意志的移動動詞の LCS の変項を[y]で表記されている。

(46) ①移動様態動詞

- a. 意志的移動様態動詞 LCS: [[x ACT<MANNER>]CAUSE[x MOVE]]
- b. 非意志的移動様態動詞 LCS: [y MOVE<MANNER>]

②移動経路動詞

- a. 意志的移動経路動詞 LCS: [[x ACT]CAUSE[x MOVE[_{path} z]]]
- b. 非意志的移動経路動詞 LCS: [y MOVE[_{path} z]]

次は動詞のタイプと補語名詞の関係について簡単に説明する。補語名詞によって、同じ動詞は異なるタイプになることがある。例えば、「切る」は補語名詞によって、「結果動詞」と「様態結果動詞」という二つの可能性がある。「電線を切る」の場合、主語の選択制限がないので（大雪で/太郎は電線を切る）、結果動詞と認められる。これに対して、「ケーキを切る」の場合は通常、「人は道具でケーキを切る」のように、主語への選択制限が課されている。つまり、様態が指定されている。また、「*ケーキを切ったが、ケーキに何の変化もない」というように、変化の否定節と共起できないので、変化結果も含意されている。このため、「ケーキを切る」における「切る」は「様態・結果動詞」と容認する。このように、動詞の語彙化タイプを考える場合、補語名詞の性質を合わせて考える必要がある。

最後に、日本語におけるこの三つのタイプの動詞の数量的分布について説明したい。本稿は『日本語基本動詞用法辞典』により、「様態動詞」「結果動詞」「様態・結果動詞」の量

的分布を調べた。『日本語基本動詞用法辞典』には動詞 711 語が記載されているが、その中から「サ変動詞」「状態動詞」などを除いて 509 語になる。その中で結果動詞は 330 個ぐらいであり、様態動詞 170 ぐらいであり、様態・結果動詞は 10 語ぐらいしかない。この統計によると、日本語は動詞フレーム言語と言われているように、結果動詞は様態動詞より数がずっと多い¹⁹。その一方で、様態結果動詞は一番数が少ない。

以上、日本語の単純動詞が表す可能な意味は「様態」、「結果」、「様態+結果」という三つであることを論じ、それぞれの事象構造を提示した。では、語彙的複合動詞の事象構造はどのようなになっているのであろう。

3.5 語彙的複合動詞の語彙化タイプと事象構造

語彙的複合動詞は単純動詞と平行な事象構造を持っていると考えられるが、問題は二つの動詞からなる複合動詞はどのように単一事象としての事象構造に融合されているかということである。本節は複合動詞の語形成の動機付けについての分析を交えながら、語彙的複合動詞の語彙化タイプと事象構造を究明する。

3.5.1 語彙的複合動詞の語彙化

語彙的複合動詞は単純動詞と同じように、単一事象を表す「一語」であるが、単純動詞は語根が 1 つであるのに対して、複合動詞は語根が 2 つある。では、二つの語根はどのように融合して、一つのまとまった事象を表すようになっているのであろう。

今までの議論から分かるように、「一語」が表す最大の意味は「様態+結果」である。日本語の単純動詞において、結果動詞の数が一番多く、様態動詞はその次であり、様態・結果動詞の数は非常に少ない。繰り返しになるが、様態動詞は様態が指定されているが、変化結果は指定されていない。一方、結果動詞は変化結果が指定されているが、様態が空白である。このように、ほとんどの動詞の意味構造に空白があると考えられる。このため、複合動詞語彙化の動機付けが生じてきた。それは単純動詞の表す事象の空白部分を埋める

¹⁹ 本稿では 711 語しか調査していないが、陳（2013）では、『分類語彙表増補改訂版』の 2982 語を調査対象として単純動詞のタイプを考察している。陳は様態動詞、結果動詞という分け方ではなく、動詞を「活動動詞」「使役他動詞」「活動自動詞」「使役自動詞」「変化動詞」「状態動詞」「軽動詞」「自他同形」のように分類している。その中で使役他動詞と変化動詞は本稿でいう結果動詞とほぼ対応している。陳によると、使役他動詞は 1176 語であり、変化動詞は 885 語であり、合わせて 2061 語である。陳の調査からも分かるように、日本語の単純動詞において、結果動詞は圧倒的に多い。

ということである。日本語の単純動詞において、結果動詞の数が圧倒的に多いということを考えると、日本語の複合動詞は結果動詞に「様態」という意味要素を付加するものが多いと予測できる²⁰。この動機付けにより、二つの語根の意味構造の融合の仕方も分かってくる。すなわち、ベースとなった動詞の表す事象の空白部分をもう一つの動詞が補充するという融合の仕方である。そして、ベースとなった動詞のほとんどは結果動詞である。形式化した LCS で表すと、(47) のようになる。

(47) a. 結果動詞：[[x ACT_{<空白>} ON y] CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]



b. 様態動詞： [x ACT_{<MANNER>} ON y]

c. →様態・結果動詞：

[[x ACT_{<MANNER>} ON y] CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

(47) に示されているように、結果動詞は上位事象では様態が指定されておらず、空白になっている。そこで、様態が指定されている動詞はその空白を埋めるため、空白の部分へ挿入する。これにより、様態も結果も指定される複合動詞が出てきた。その LCS は (47) c のようになる。複合動詞の LCS は様態・結果動詞の LCS と同様に、様態が指定される上位事象と結果が指定される下位事象を持つ複合事象を持っている。また、語彙的複合動詞の項構造について、本稿は V1 と V2 の同じ意味述語の項が一つに統一され、統語構造に投射すると考えている。項構造と事象構造の情報も入れて、複合動詞の構造を次のように示す。(48) に示されているように、V1 の LCS は V2 の上位事象へ挿入すると同時に、同じ意味述語の項 x、y も一つに統一され、複合動詞の項として統語構造に具現される。

(48) V2: [[x ACT_{<空白>} ON y] CAUSE[y BECOME AT <state>]]



V1: [x ACT_{<MANNER>} ON y]

→ LCS: [[x ACT_{<MANNER>} ON y] CAUSE[y BECOME AT <state>]]

²⁰ これについて、影山（1999:211）は複合動詞では、動作を表す V1 と変化を表す V2 の組み合わせが多い（石井 1983）というのは、結局、2 つの動詞を合成して出来上がった語彙概念構造の組立が＜行為－変化－結果＞という行為連鎖の雛形に適合するからに他ならないと述べている。

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=e2 (y) :state

では、語彙的複合動詞には、実際にどのような語彙化タイプがあるか見てみよう。『複合動詞レキシコン』というデータベースから 1272 語²¹を抽出し、「様態動詞」「結果動詞」により、複合動詞の語彙化パターンを調査した。その結果は表 3-2 にまとめた。

表 3-2²²：語彙的複合動詞の語彙化タイプ（1272 語）

語彙化タイプ	様態+様態	結果+結果	様態+結果	結果+様態
語数	47	167	1058	0?

この表から分かるように、語彙的複合動詞の語彙化タイプは予測通り、「様態+結果」タイプは最も多い²³。数はそれほど多くないが、「様態+様態」「結果+結果」タイプも収集された。後で詳述するが、これらのタイプもやはり一語としての事象構造をなしている。「結果+様態」タイプは見当たらない。これはこのタイプは「下位事象+上位事象」という構造を持つため、一語としての事象構造にならないからであると考えられる。

では、次節から語彙的複合動詞が具体的にどのように単一事象を表す事象構造をなすのかについて、具体例を挙げながら詳しく示していく。まずは数が最も多い「様態+結果」タイプから考察してみよう。

3.5.2 「様態+結果」タイプ

3.5.1 節で論じたように、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞の融合の仕方は、V2

²¹ 『複合動詞レキシコン』には 2700 語の語彙的複合動詞が記載されているが、ここでは、pV（接頭辞化したもの）166 語、Vs（補助動詞化したもの）830 語、V（一語化したもの）109 語と明記されているものを全て除外している。また、Vs と明記されていないが、「～込む」「～かかる」「～合わせる」などのような V2 が方向を表すものも筆者の判断では Vs になるので、除外している。すなわち、V1 も V2 も単純動詞としての本義が生きている場合のみを考察対象とする。意味変化が起こった場合の語彙的複合動詞の事象構造などについては第 5 章に譲る。

²² この表に出た数字はあくまでも傾向を示すものであり、絶対的な数値ではないことを断っておく。

²³ 「巻き入れる」「巻き上げる」などのような「様態・結果+結果」タイプもあるが、「一義的経路の制約」により、これは最終的に「様態+結果」タイプと同様になる。このため、これらの例はすべて「様態+結果」タイプに数えた。

結果動詞の LCS をベースとして、V1 様態動詞の LCS は V2 の上位事象へ挿入するという
ことである。このため、(49) のように、V2 結果動詞の事象タイプによって、使役変化/
移動動詞、状態変化動詞、移動経路動詞に分けて、それぞれどういう V1 と融合するかを
考察する。

(49) 「様態＋結果」タイプの複合動詞

- I. V2 が使役変化/移動動詞
- II. V2 が状態変化動詞
- III. V2 が移動経路動詞

まずは V2 が使役変化/移動動詞の場合、次のような複合動詞がある。

I. V2 が使役変化/移動動詞の場合：

a. 行為様態自動詞＋使役変化動詞：

住み荒らす、泣きはらす、乗り潰す、乗り慣らす、乗り古す...

b. 働きかけ動詞＋使役変化/移動動詞：

打ち上げる、蹴り上げる、投げ上げる、押し上げる、引き上げる、持ち上げる、
摘み上げる、引き降ろす、取り落とす、吊り下げる、打ち落とす、投げ返す、
打ち返す、投げ入れる、叩き壊す、殴り倒す、蹴り崩す、押し開ける、叩き壊
す、洗い流す、叩き落す、押し出す...

c. 様態・結果動詞＋使役変化/移動動詞：

切り落とす、切り崩す、切り倒す、編み入れる、巻き上げる...

このタイプの複合動詞では、V2 は使役変化/移動動詞である。使役変化/移動動詞は様態
が指定されておらず、変化結果が指定されている他動詞である。様態の部分空白なので、
V1 はその空白を埋める役割を果たしている。このため、V1 には様態を表す様態動詞が要
求されている。収集したデータから分かるように、V1 になる動詞は行為様態動詞、働きか
け動詞と様態・結果動詞である。

まずは「働きかけ動詞＋使役変化/移動動詞」について説明する。このタイプは語彙的複
合動詞において数が最も多い。これは語彙的複合動詞の動機付けから予測した通りである。

その事象構造は前節の（48）に示されている通りである。ここで「叩き壊す」を例としてその事象構造について改めて説明する。

（50） 作業員は壁をハンマーで叩き壊した。 (『複合動詞レキシコン』)

LCS: 「壊す」 [x ACT <空白>ON y]CAUSE[y BECOME BE AT <broken>]]



「叩く」 [x ACT<HITTING>ON y]

→[x ACT <HITTING>ON y]CAUSE[y BECOME BE AT <broken>]]

|
作業員

|
壁

|
壁

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=e2 (y) :state

ベースとなるのは V2「壊す」の LCS であり、その上位事象では、様態「root」は空白である。そこに、V1 の「root」を入れる。同じ意味述語の項<x,y>は統一され、それぞれ文の主語、目的語として実現されている。

次は「行為様態動詞＋使役変化動詞」タイプについて説明する。このタイプの実例は収集されたが、その数はさほど多くない。V1 になる行為様態自動詞は働きかけ動詞と違い、主語自らの行為を表しており、その行為により他の何かを変化させることは考えにくいいため、使役変化動詞の「Manner」を指定しにくく、生産性が低いと考えられる。しかし、「行為様態＋使役変化/移動」タイプの複合動詞は「様態＋結果」という基本的な構造に合っているため、文脈によっては、一つの事象を表す意味的な条件がそろえば、語彙的複合動詞として成り立つと考えられる。収集した例のほとんどは複合動詞の主体と客体が所有関係を持っているものである。例えば、「彼女は顔を泣き腫らしていた」という例では、「泣く」は様態自動詞であるが、「泣く」の主語は「彼女」であり、「腫らす」の目的語は「顔」であり、「彼女」と「顔」は全体・部分の関係をなしている。これがゆえに、「彼女が泣く」ということと「彼女の顔を腫らす」ということと一つの事象に成りやすいと考えられる。「泣く」という自動詞は客体に働きかけるという意味を持っていないが、主体「彼女」は「泣く」という行為を通して、客体「顔」に「腫れた」という変化を引き起こすという点では、「叩き壊す」などのような複合動詞とは同じである。「泣き腫らす」の事象構造を書くと、次のようになる。なお、便宜上、「顔」は「彼女」の一部分であることを「⊆」で記

(51) 彼女は顔を泣き腫らしていた。 (『複合動詞レキシコン』)

「泣く」 [x ACT_{<CRYING>}]

EVENTSTR=E1=e1 (x) :process (+Manner)

$$E2=e2 \quad (y) :state \quad (y \in x)$$

(52) 彼は枝をノコギリで切り落とした。(『複合動詞レキシコン』)

「切る」 [[x ACT_{<cutting>} ON y] CAUSE[y BECOME AT_{<depart>}]]

²⁵ 第4章、第5章で論じるが、「様態・結果+使役変化/移動」タイプでは、V1の結果とV2の結果が一致している場合、V1の結果は後退せずに済む。

→[[x ACT <cutting>ON y]CAUSE[y BECOME AT <down>]]
 | | |
 彼 枝 枝

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=e2 (x,y) :state

以上論じたように、V2 が使役変化/移動動詞の場合、V1 は働きかけ動詞でも、様態自動詞でも、様態・結果動詞でも、V1 は V2 が表す使役事象を達成させるために行う具体的な行為であるため、V1 と V2 の意味関係は手段関係になる。そして、複合動詞全体は様態と結果両方が指定される様態・結果動詞となる。次は V2 が状態変化動詞の場合について分析する。

II. V2 が状態変化動詞の場合

- a. 行為様態＋状態変化：遊び疲れる、歩き疲れる、泣きつかれる
- b. 働きかけ＋状態変化：話し疲れる、待ちくたびれる

このタイプの複合動詞において、V2 になる「疲れる」「くたびれる」などは主体状態変化動詞であり、V1 は同じ主体が行う行為である。上述した V2 が使役変化/移動動詞の場合、V1 が V2 の空白になっている様態の部分埋め、容易に単一事象としての事象構造を成す。しかし、II の複合動詞は「様態+結果」という語彙化タイプであるが、V2 が状態変化動詞であり、下位事象しか持っておらず、その LCS には「CAUSE」がないはずである。では、「様態」と「結果」はどのように一つの event schema に融合されるのであろうか。これらの例をつぶさに観察すると、V2 になる状態変化動詞は「疲れる」、「くたびれる」などに限られているという特徴が見えてくる。「疲れる」「くたびれる」は「倒れる、壊れる」などの状態変化動詞とは違って、主語は人間であり、普通は外的原因が必要だと考えられる²⁶。これを LCS で表すと、下記のようなになる。

(53) LCS:[]CAUSE [x BECOME BE AT <state>]]

²⁶ 影山 (2002a:36) でも「歩き疲れる」について似たような分析を行っている。「疲れる」という出来事が発生するためには何らかの原因が必要であるから、それ自体の語彙概念構造に「原因」となる項を含んでいると仮定することができるという。また、Hidaka(2011:60) は「*健は自ら疲れた」という例を取り上げ、「疲れる」は外的原因が必要であることを指摘している。

(網掛けは、その部分は背景にあるということを表す)

V1はその背景にある原因を明示化し、「疲れる」という状態を引き起こす主体自身の行為を表すものに限られる。「待つ」「話す」は本稿の分類により、働きかけ動詞に属するが、これらの動詞は動作主が対象に何らかの影響を与えることを表すより、主体自身の状態変化を表す表現である。「遊び疲れる」を例としてこのタイプの事象構造を下記のように示す。

(54) に示されているのは、「子供たちが『遊ぶ』ことによって、『疲れる』という状態変化が起こった」という意味である。意味関係からみれば、V1とV2の原因になる。

(54) 子供たちは遊び疲れた。(『複合動詞レキシコン』)

LCS: 「疲れる」 [] CAUSE [x BECOME BE AT <tired>]]



「遊ぶ」 [x ACT<PLAYING>]

→ [x ACT<PLAYING>] CAUSE [x BECOME BE AT <tired>]]

|
子供たち

|
子供たち

EVENTSTR=E1=e1 (x) :process (+Manner)

E2=e2 (x) :state

Ⅲ. V2が移動経路動詞の場合

a. 移動様態+移動経路

駆け上がる、飛び上がる、飛び出る、這い出る、歩き出る

流れ落ちる、舞い落ちる、滑り落ちる、流れ出る、浮き上がる、舞い上がる

b. 行為様態/働きかけ+移動経路

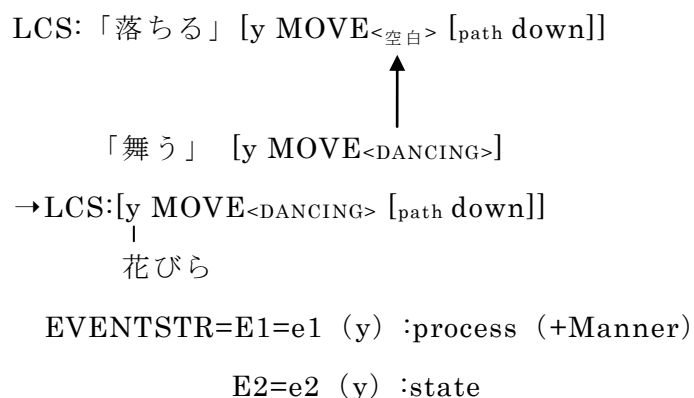
触れ回る、持ち去る、運び去る、持ち回る、持ち帰る、連れ帰る、持ち寄る

これらの例において、V2は移動経路動詞であり、「経路」を語彙化しているが、「様態」を指定していない。V1は様態動詞であり、移動の様態を指定する。もっと詳しく観察すると、「駆け上がる」などは「意志的動詞+意志的動詞」であり、「流れ落ちる」は「非意志的動詞+非意志的動詞」である。b「行為様態/働きかけ+移動経路」の場合、V1とV2はともに意志的動詞である。Ⅲに取り上げられている複合動詞はこれまで様態・付帯状況複合

動詞と呼ばれているものであり、V1 と V2 の意志性は統一しなければならないとされている（松本 1998）。

Ⅲ a 「駆け上がる」「流れ落ちる」などの複合動詞は、「移動様態動詞」と「移動経路動詞」が一つに融合され、移動事象の「様態」と「経路」両方を表す移動動詞になる。「舞い落ちる」を取り上げてその事象構造を（55）のように示す。

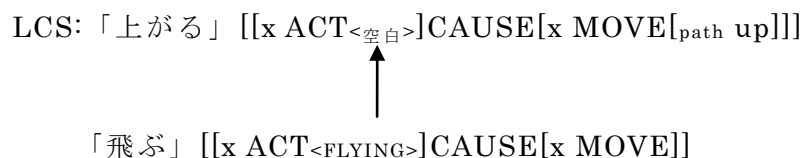
（55）花びらが一枚ひらひらと舞い落ちた。（『複合動詞レキシコン』）



（55）における「舞い落ちる」では、「落ちる」は非意志的移動経路動詞であり、「舞う」は非意志的移動様態動詞である。「舞う」は「落ちる」の様態を補充し、複合動詞全体は「様態」も「経路」も指定する非意志的移動動詞になっている。

「意志的移動様態動詞＋意志的移動経路動詞」の例として、「飛び上がる」を取り上げてその LCS を次のように表す²⁷。

（56）彼は思いっきり飛び上がった。（『複合動詞レキシコン』）



²⁷ 「上がる」などの動詞は意志性の面では中立的であり、「彼が上がった」のように意志的な場合もあれば、「物価が上がった」のように非意志的な場合もある。本稿では意志性について詳しく論じないが、個別の複合動詞における意志性は基本的に文の主語によって判断する。例えば（56）では、主語は人間であるため、通常、文における動詞は意志的であると考えられる。

→LCS: [[x ACT<FLYING>]CAUSE[x MOVE[_{path} up]]]
 | |
 彼 彼

EVENTSTR=E1=e1 (x) :process (+Manner)

E2=e2 (x) :state

(56) では、「飛び上がる」における「上がる」は意志的移動経路動詞であり、その LCS は「移動主体『彼』が自身の意志によって上へ移動する」という意味を表している。「飛ぶ」の LCS は「移動主体『彼』が自分の意志によって飛ぶ」ということを表している。「飛ぶ」が「上がる」の様態を指定することによって、「飛び上がる」は「様態」と「経路」両方が指定されている意志的移動動詞になる。

Ⅲb の複合動詞において、V2 は意志的な移動経路動詞であり、V1 は移動様態動詞ではなく、行為様態動詞あるいは働きかけ動詞である。V1 は移動自体の様態を修飾するのではなく、どのような状況で移動するというを表す。V2 の<MANNER>は V1 の移動に付随するというを[BE WITH]で示す。例えば、「持ち回る」の事象構造を次のように表すことができる。(57) に示されている「持ち回る」の LCS は「x は y を持った状態で回る」という意味を表している。複合動詞全体は様態と結果両方が指定されている。

(57) (人が) 大金を持ち回るのは危険だ。 (『複合動詞レキシコン』)

LCS: 回る [[x ACT<空白>]CAUSE[x MOVE[_{path} around]]]



持つ[x ACT<HOLDING>ON y] (t1=t2)

→ LCS: [[x ACT<BE WITH HOLDING y>] CAUSE[x MOVE[_{path} around]]]

 | |
 人 大金

EVENTSTR=E1=e1 (x) :process (+Manner)

E2=e2 (x) :state

以上、語彙的複合動詞の中で、一番数が多い「様態・結果」タイプについて考察した。まとめると、このタイプの複合動詞はいずれも V1 が V2 の表す事象の様態を補充しており、複合動詞全体は様態と結果両方が指定されている複合事象を持っている。そして、V2 の意味構造により、V1 は手段、様態、原因のいずれかになる。

3.5.3 「様態+様態」タイプ

『複合動詞レキシコン』というデータベースから、「様態+様態」タイプの複合動詞はわずか 47 語くらい収集された。その中の多くは V1 と V2 は意味が似ており、並列関係をなしている。以下、「様態+様態」タイプの複合動詞について、(58) のように、V1 と V2 の意味が似ているかどうかによって、二つのグループに分けて分析する。

(58) 「様態+様態」タイプの複合動詞

- I. V1、V2 の意味が似ている場合
- II. V1、V2 の意味が異なる場合

では、次はそれぞれのグループの複合動詞を考察していく。

I. V1、V2 の意味が似ている場合（同じ事象構造、同じ LCS を持っている）

- a. 移動様態+移動様態：飛び跳ねる、駆け走る
- b. 行為様態+行為様態：泣き喚く、咽び泣く
- c. 働きかけ+働きかけ：写し描く、褒め称える

このタイプの複合動詞は同じ事象タイプを有しているだけではなく、意味が似ているので、LCS も似ている。このため、V1 と V2 の同じ LCS は一つに統一されている。これらの複合動詞の事象構造を以下のように示す。

(59) 移動様態+移動様態：

LCS: [[x ACT<MANNER1>]CAUSE[x MOVE]]
+ [[x ACT<MANNER2>]CAUSE[x MOVE]] (MANNER1=MANNER2)
→[[x ACT<MANNER>]CAUSE[x MOVE]]
EVENTSTR=E1=e1 (x) :process
行為様態+行為様態
LCS:[x ACT<MANNER>1]+[x ACT<MANNER2>] (MANNER1=MANNER2)
→[x ACT<MANNER>]

EVENTSTR=E1=e1 (x) :process

働きかけ+働きかけ：

LCS:[x ACT<MANNER1>ON y]+[x ACT<MANNER2>ON y] (MANNER1=MANNER2)

→[x ACT<MANNER>ON y]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

(59) に示されているように、同じ事象タイプ、同じ意味を持っている二つの動詞が合成して複合動詞になっても、事象タイプ及び意味は単独動詞と同じようになっている。

由本(2005)によると、並列関係複合動詞は二つの動詞の意味的、統語的特徴にかなり高い類似性が要求され、合成の条件が特に厳しいため、生産性が高くないのである。本稿で論じられている語彙化の動機付けから考えると、この種の複合動詞の生産性が低いのは同じ意味的特徴を持っている二つの動詞は互いに情報を付加することができないからだと考えられる。ただし、同じ要素が繰り返し使用するのを通して、複合動詞全体の表す事象が一層強調される。

II. V1、V2の意味が異なる場合

- a. 行為様態+行為様態：遊び暮らす、泣き暮らす、すすり泣く、忍び泣く
- b. 行為様態/働きかけ+移動様態：持ち歩く、連れ歩く、飲み歩く、練り歩く

このタイプでは、V2は様態動詞であり、V1はその様態をさらに詳しく指定する様態動詞である。ここで注意してほしいのは、V2が移動様態動詞の場合、V2になるのは「歩く」だけということである。「歩く」は移動様態動詞であるが、「持ち歩く」などにおいて、「歩く」は「あちこちへ移動する」という意味を表しており、様態性が弱いと思われる。また、V2が行為様態動詞の場合でも、V2になるのは「暮らす」「泣く」などといった限られた動詞であり、いずれも様態性が弱いように思われる。動機付けから考えると、V2の様態性が弱い場合こそ、その様態をより詳しく指定する様態動詞が必要になる。

V2は様態性が弱い動詞であり、V1はその様態を詳しく指定し、複合動詞全体は上位事象だけを持つ様態動詞になる。この事象構造を示すと、以下(60)(61)のようになる。なお、V1がV2の様態を修飾することは[BE WITH]で示されている。

(60) 私は大学 6 年間は遊び暮らした。 (『複合動詞レキシコン』)

LCS: 「暮らす」 [xACT<LIVING>]



[x ACT<PLAYING>]

→[x ACT<LIVING WITH PLAYING >]

EVENTSTR=E1=e1 (x) :process

(61) USB メモリーを持ち歩くのは止めたほうがいい。 (『複合動詞レキシコン』)

LCS: 「歩く」 [[x ACT<WALKING>]CAUSE[x MOVE]]



「持つ」 [x ACT<HOLDING> ON y]

→[[x ACT<WALKING BE WITH HOLDING y>]CAUSE[x MOVE]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

3.5.4 「結果+結果」タイプ

「結果+結果」タイプの語彙的複合動詞も (62) のように、V1 と V2 の意味が似ている場合とそうではない場合という二つに分けて考察する。まずは次の例を見てみよう。

(62) 「結果+結果」タイプの複合動詞

I. V1 と V2 の意味が似ている場合

II. V1、V2 の意味が異なる場合

では、まず I. V1 と V2 の意味が似ている場合の複合動詞を見てみよう。

I. V1 と V2 の意味が似ている場合

- a. 状態変化+状態変化：折れ曲がる
- b. 移動経路+移動経路：通り抜ける、過ぎ去る
- c. 使役変化+使役変化：折り曲げる、積み重ねる

これらの複合動詞では、V1 と V2 の事象タイプ及び LCS がそれぞれ同じなので、並列

関係複合動詞になる。同じ意味述語と項が統一され、一つの LCS になる。それぞれの事象構造は以下のように示すことができる。

(63) a. 状態変化+状態変化

LCS:[y BECOME BE AT z1]] + [y BECOME BE AT z2]] (z1=z2)

→ [y BECOME BE AT z]

EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition

b. 移動経路+移動経路

LCS:[y MOVE [path z1]] + [y MOVE [path z2]] (z1=z2)

→[y MOVE [path z]]

EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition

c. 使役変化+使役変化

LCS:[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT z1]]

+ [[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT z2]] (z1=z2)

→[[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT z]]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

E2=e2 (y) :state

何 (2010:182) では並列関係複合動詞の V1 と V2 になる動詞は変化結果を表さない動詞であり、位置的や状態的な変化を表す動詞は並列関係複合動詞の V1 と V2 にはふさわしいものではないと述べているが、本稿では、同じ変化結果を持っている「折れ曲がる」「折り曲がる」などの複合動詞は並列関係複合動詞として捉える。とりわけ「折り曲げる」「積み重ねる」のような二つの使役変化動詞からなる複合動詞は今まで手段複合動詞に分類されているが、「折る」と「曲げる」は両方とも変化結果しか指定していないことと意味が似ていることから、本稿では、この二つの複合動詞は並列関係複合動詞として捉える。第 4 章では改めてこれについて議論する。

II. V1 と V2 の意味が異なる場合

a. 状態変化+状態変化：焼け焦げる、凍え死ぬ、焼け死ぬ

b. 状態変化+移動経路：崩れ落ちる、溢れ落ちる、零れ落ちる

このタイプは V1 も V2 も変化を表す自動詞であり、両方とも「変化結果」が含まれている。これは Goldberg (1995) の「一義的経路の制約」に違反するため、成立しないはずである。では、なぜこのような複合動詞が成立するのであろう。松本(1998)、由本(2005)はただこれらの動詞を原因複合動詞と名づけ、V2 が非動作主的な動詞でなければならないと論じているだけであり、なぜ V1 も V2 も変化を表しているのに、一つの複合動詞になるのかについて言及していない。本稿では、Ⅱに取り上げられている「結果+結果」タイプの複合動詞はいずれも V2 は V1 に含まれている結果を更に指定するものであると捉える。

「焼け焦げる」「凍え死ぬ」などの「状態変化+状態変化」タイプの複合動詞は、V2 が V1 の表す状態変化の延長線にあり、V1 の変化結果の補足として継ぎたされていると考えられる。また、「零れ落ちる」「崩れ落ちる」といった複合動詞は見たところでは「状態変化+移動経路(位置変化)」タイプであるが、V1 は移動経路動詞に近い性質を持っており、移動経路が含まれている。V2 は V1 に含まれている結果を明確化する役割を果たしていると思われる。これらの複合動詞はいずれも特別な事象を表すので、生産性が非常に少ないと考えられる。これについては次のように簡単に説明する。

「焼け焦げる、焼け死ぬ」において、V1「焼ける」は状態変化動詞であるが、(64) (65) から分かるように、「焼ける」は程度性、段階性を持っている状態変化動詞であると考えられる。

(64) 完全/少しに焼けた/ちょうどよく焼けた/焼けすぎた。

(65) 焼ける:真っ赤に焼ける→真っ黒に焼ける→灰になる (陳 2009:89)

このように、「焼ける」は段階性があり、いくつかの結果が生起する可能性があるので、V2 はその変化結果を明確化する。ちょうど「様態+様態」タイプにおいて、V1 は V2 の様態を詳しく指定するのと同じように、「結果+結果」タイプにおいて、V2 は V1 の変化結果を詳しく指定する。そして、複合動詞全体の結果は V2 の表す結果と一致している。例えば、(66) から窺えるように、「焼け死ぬ」という複合動詞に含まれている結果は V2 「死ぬ」の結果と一致している。

(66) (i) a. 鳥は黒く焼けた。 b. 鳥は死んだ。

(ii) a. *鳥は黒く焼け死んだ。 b. 鳥は焼け死んだ。

(67) LCS: V1 [y BECOME BE AT<z1>]
V2 [y BECOME BE AT<z2>] z2 ∈ z1
→ [y BECOME BE AT<z2>]
EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition

(68) (i) a. 大きな石が粉々に崩れた。
b. 大きな石が道路に落ちた。
(ii) a. *大きな岩が粉々に崩れ落ちた。
b. 大きな岩が道路に崩れ落ちた。

(69) 大きな岩が道路に崩れ落ちた。(『複合動詞レキシコン』)

LCS: 崩れる [[y BECOME BE AT<broken and down>]
 落ちる [y BECOME BE AT down]]

→[y BECOME BE AT <down>]]

EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition

70

以上は語彙的複合動詞の事象構造を語彙化タイプごとに提示した²⁹。それを表 3-3 にまとめる。

表 3-3：語彙的複合動詞の事象構造

語彙化 タイプ	事象タイプ	事象構造	例
様 態 + 結 果	様態 + 結果	[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE[yBECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2 (y) :state	叩き壊す
		[x ACT<MANNER>]CAUSE [x BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x) :process (+Manner) E2=e2 (x) :state	遊び疲れる
		[y MOVE<MANNER> [path z]] [[x ACT<MANNER>]CAUSE[x MOVE [path z]]] EVENTSTR=E1=e1 (x/y) :process (+Manner) E2=e2 (x/y) :state	流れ落ちる 持ち回る
様 態 + 様 態	様態	[x ACT<MANNER>] EVENTSTR=E1=e1 (x) :process [[x ACT< MANNER>]CAUSE[X MOVE]] EVENTSTR=E1=e1 (x) :process	泣き喚く 遊び暮らす 飛び跳ねる 持ち歩く
結 果 + 結 果	結果	[y BECOME BE AT <state>] EVENTSTR=E1=e2 (y) :transition [[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process E2=e2 (y) :state	焼け焦げる 折れ曲がる 折り曲げる

語彙的複合動詞は単純動詞の欠けている情報を付加するために生じたものであるが、中

²⁹ 統語構造を十分に分析した上で事象構造を提示すべきであるが、本稿では語彙的複合動詞の語彙化を考察したいため、「様態」と「結果」がどのように融合されているのかということに注目して、事象構造を提示している。統語構造との対応が十分に捉えきれていないように思われるが、当面の問題についてはこれが充分である。

には「様態」をより詳しく指定する「様態+様態」タイプもあれば、「結果」を更に指定する「結果+結果」タイプもある。語彙的複合動詞の表す意味情報が豊富になったが、基本的な事象構造は単純動詞と同じである。なお、ここで示した事象構造はすべての語彙的複合動詞を満足に記述できるものとはいえないが、本稿は語彙的複合動詞の基本的タイプに議論を絞っているので、当面の問題についてはこれで充分である。

3.5.5 語彙化のアプローチのメリット

本稿は「一語」が表す可能な意味ということを出発点として、語彙化のアプローチにより、語彙的複合動詞の語彙化パターンを考察し、単純動詞と平行な事象構造を提示した。語彙的複合動詞の意味関係、語形成制約はすべて語彙的複合動詞の事象構造から導き出されるものと考えている。以下では本稿で用いられる語彙化のアプローチのメリットを述べる。

(1) 語形成モデル：語彙的複合動詞の単一事象としての事象構造を提示した。

影山（1993）などでは、語彙的複合動詞は項構造の同定により合成されるとして、項構造の合成モデルを提示している。松本（1998）は語彙的複合動詞の意味構造を提示しているが、それはやはり項構造と意味役割の合成による分析である。由本（2005）は[BY][FROM]などの意味述語を利用し、V1とV2の意味関係に焦点を置く意味構造を提示している。これらの先行研究はいずれも語彙的複合動詞の一語としての事象構造を提示していない。

本稿は「語彙化」の角度から、単純動詞を「様態」「結果」「様態・結果」という三つの語彙化タイプにまとめた上、語彙的複合動詞の語彙化タイプについて考察した。その結果、語彙的複合動詞は「様態+結果」「様態+様態→様態」「結果+結果→結果」という三つの語彙化タイプがあり、その事象構造は単純動詞と同じになる（表 3-3 を参照されたい）。

(2) V1とV2の意味関係は複合動詞の事象構造から自然に導き出される。

影山（1993,1999）、松本（1996,1998）、由本（2005）などの先行研究はいずれも複合動詞をV1とV2の意味関係によって、手段、様態、原因など5つに下位分類した上、分類ごとに複合動詞の意味的特徴と統語的性質を論じている。しかし、なぜそのような意味関係になるのかについては全く触れていない。本稿では、どの解釈になるかは、複合動詞

の事象構造から導き出されるものであり、意味関係による分類はあまり意味がないと考えている。これを表 3-4 のようにまとめる。

「様態+結果」タイプの場合、V1 は V2 の様態を指定するが、V2 が使役動詞か、状態変化動詞か、位置変化動詞かにより、V1 と V2 の意味関係は「手段」「原因」「様態」のいずれかになる。「様態+様態」タイプの場合、V1 は V2 の様態を詳しく指定するので、V1 と V2 の意味関係は「様態」関係になる。また、V1 と V2 が似た LCS を持つ場合、並列関係複合動詞になる。「結果+結果」タイプの場合、「焼け焦げる」などは、V1 は V2 の状態・位置変化を引き起こす出来事であるとも考えられるので、V1 と V2 の意味関係は「原因」になる。V1 と V2 が似た LCS を持つ場合、並列関係複合動詞になる。

表 3-4: 語彙的複合動詞の意味関係

語彙化タイプ	V2	事象構造	意味関係
様態+結果	使役変化	V2: [[x ACT _{<>} ON y] CAUSE [y BECOME BE AT <state>]] ↑ V1: [x ACT _{<MANNER>} ON y]	手段
	状態変化	V2: [↑] CAUSE [x BECOME BE AT <state>]] ↑ V1: [x ACT _{<MANNER>}]	原因
	移動経路	V2: [x MOVE _{<>} FROM/Toward/To z] ↑ V1: [x MOVE _{<MANNER>}]	様態
様態+様態	行為様態 移動様態	V2: [x ACT _{<MANNER2>}] ↑ V1: [x ACT _{<MANNER1>}]	様態 並列
結果+結果	状態変化 移動経路 使役変化・ 移動	V1 [[y BECOME BE AT <z1>] V2 [[y BECOME BE AT <z2>]	原因 並列

(3) 語彙的複合動詞の語形成は単一事象としての事象構造に制約されている。

先行研究では、語彙的複合動詞の語形成に課されている原則として、「他動性調和」「主語一致」「非対格性優先の原則」などが提案されている。本稿は複合動詞の項構造も意味関係も事象構造から導き出されるものであるため、これらの原則は複合動詞の適切な事象構

造をなす際の副産物であり、語彙的複合動詞が一つの事象として成り立つかどうかというところに還元できると考えている。

「**単一事象としての事象構造の制約**」を以下のようにまとめる。

①語彙的複合動詞は一つの語なので、V1 と V2 は主語が一致している。

②一語が表す可能な事象構造に制約されている：

語彙的複合動詞は表 2-3 にまとめられている事象構造に制約されている。

可能な事象構造：上位事象（様態）＋下位事象（結果）→様態＋結果

上位事象（様態）＋上位事象（様態）→様態

下位事象（結果）＋下位事象（結果）→結果

以下、この制約を用いて先行研究で提案されている原則を捉え直してみたい。

まずは「他動性調和の原則」について考える。確かに、多くの複合動詞は他動詞調和の原則に一致しているが、これは大多数の複合動詞は「働きかけ＋使役変化/移動」タイプなので、項構造を見れば、「他動詞＋他動詞」になるからである。そして、「様態＋様態」「結果＋結果」タイプの語彙的複合動詞を項構造から見れば、それぞれ「非能格動詞＋非能格動詞」「他動詞＋非能格動詞」、と「非対格動詞＋非対格動詞」の組み合わせになり、「他動性調和の原則」にも合致している。このように、「他動性調和の原則」は多くの複合動詞に適用されるのは複合動詞の事象構造はそうようにできているためであると考えられる。そして、以下のような「他動性調和の原則」によって成立しないとされている語彙的複合動詞も本稿が提示する制約で説明できる。

- (70) f. 他動詞＋非対格：*洗い落ちる、*染めかわる、*倒し滑る
- g. 非能格＋非対格：*走り転ぶ、*跳び落ちる、*回り落ちる
- h. 非対格＋他動詞：*揺れ落とす、*売れとばす、*滑り削る
- i. 非対格＋非能格：*痛み泣く、*転び降りる

(影山 1999:201)

本稿は語彙的複合動詞の事象構造及びその制約から (70) のような例の不成立について、以下のように解釈する。まず「他動詞＋非対格動詞」は不成立とされているが、「待ちくた

びれる」「読み疲れる」が存在するように、「他動詞+非対格動詞」が不成立という考えは間違っている。この点については、すでに松本（1998）、由本（2005）などに指摘されている。影山（1999）が取り上げた例「*洗い落ちる」は確かに成立しないが、これについて、本稿は「*洗い落ちる」は以下の点により、単一事象としての事象構造をなしていないためと考えている。まず、「*洗い落ちる」では、「洗う」と「落ちる」は主語が一致していない。そして、「落ちる」は無意志的な移動経路動詞なので、その移動経路の様態を修飾する無意志的な移動様態動詞（「様態+結果」タイプ）、あるいはその無意志的に位置変化を引き起こす出来事を表す動詞（「結果+結果」タイプ）が V1 に来る。いずれにしても、「洗う」のような「働きかけ動詞」が V1 になるわけがない。第 5 章で議論するが、「打ち上がる」など、V1 と V2 は主語が一致していないのに、成立する例もある。それはそれらの動詞は自他交替できるからである。それに対して、「*洗い落ちる」は「洗い落とす」と自他交替できない。なお、語彙的複合動詞の自他交替について、第 4 章で詳しく議論する。

g「非能格+非対格」は存在しないとされているが、「歩き疲れる」があるように、「非能格+非対格」複合動詞は実際に成立する。影山が取り上げている「*走り転ぶ」など非成立の複合動詞について以下のように説明する。これらの動詞は、移動事象を表す動詞である。「*走り転ぶ」などは「移動様態+移動経路」の語彙化タイプである。この場合、V1 と V2 はそれぞれ一つの移動事象の「様態」と「経路」を現すので、意志性が一致しなくてはならない。しかし、「*走り転ぶ」という複合動詞は V1「非能格」は意志的であり、V2 非対格は非意志的であり、意志性が一致していないため、複合動詞が成立しない。

h「非対格+他動詞」における「非対格動詞」は下位事象を表しているので、「*非対格+他動詞」は「下位事象+上位事象」になる。これまでの議論から分かるように、下位事象が上位事象から先に来ることができないということから、「*非対格+他動詞」の不成立を説明できる。i.「非対格+非能格」も「下位事象+上位事象」になるので、成立しない。

このように、「他動性調和の原則」で説明できる複合動詞も説明できない複合動詞も本稿のアプローチで説明できた。次に松本（1998）の「主語一致の原則」と意味論的制約について考えてみたい。語彙的複合動詞は語彙化された一語になり、形態的緊密性が強いいため、V1 と V2 の主語が一致するのは当然のことだと思われる。また、松本（1998）の各種類に関する意味上の制約が捉えられないものも本稿の提出した単一事象としての制約からも解釈できる。例えば、「V1 は様態・付帯状況を表すもの」について、これは意味関係は様態であるため、同時進行しなければならない。このため、(71) に示されているように、

V1 と V2 の意志性が統一しなければならないと分析している。

(71) 意志的+意志的：駆け登る、駆け降りる、舞い降りる、滑り降りる（様態+結果）

意志的+中立的：駆け上がる、飛び上がる、飛び出る、這い出る、歩き出る

非意志的+非意志的：流れ落ちる、舞い落ちる、滑り落ちる

非意志的+中立的：流れ出る、浮き上がる、舞い上がる、吹きまわる

松本（1998:53）

これらの例はすべて「様態」と「経路」の両方を表す一つの移動事象なので、V1 と V2 の意志性の統一は当然のことである。意志性の統一は単一事象としての事象構造の統語的な表れの一つである。松本（1998）の論述では、V1 はすべて様態動詞であり、V2 はすべて結果動詞という点は無視されている。意志性が統一しているとしても、「*回り降りる」などのような「移動経路+移動経路」は成立しない。これはやはり一語の表す意味が「様態+結果」に制限されているためだと考えられる。

3.6 まとめ

先行研究では、語彙的複合動詞を一語であるとしているものの、単純動詞と同じ語彙化の角度からの分析を行っていない。ほとんどの先行研究は合成的アプローチから、動詞と動詞の組み合わせパターンにより、語彙的複合動詞の語形成の原則を論じている。

本章は語彙化の角度から、「様態」と「結果」という意味要素により、語彙的複合動詞は単純動詞と平行な事象構造を持っているということを論じた。その結果を表 3-5 のようにまとめている。そして、語彙的複合動詞の語形成は単一事象としての事象構造に制約されていることを主張した。

表 3-5：語彙的複合動詞と単純動詞の関係

LCV	単純動詞
「様態+結果」→	様態・結果動詞
[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] (叩き壊す) 刻む	
[x ACT<MANNER>]CAUSE [x BECOME BE AT<z >]] (歩き疲れる)	再帰動詞
[[x MOVE<MANNER>] CAUSE[x MOVE [path z]]] (駆け上がる)	(climb)
「様態+様態」→	様態動詞
[x ACT<MANNER> ON y]	
「結果+結果」→	結果動詞
[y BECOME BE AT<state>]	
[[[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]]	

「叩き壊す」などのような「様態・結果」タイプの語彙的複合動詞は「刻む」などの「様態・結果」動詞と同じ事象構造を持っている。「歩き疲れる」は主体自身の行為は主体自身の変化を引き起こすという点で単純動詞の再帰動詞³⁰と似ている。「駆け上がる」のような様態・結果移動詞に対応する日本語はないようであるが、英語の「climb」などが当てはまる³¹。

「様態+様態」タイプ及び「結果+結果」タイプの複合動詞はいずれも特別な事象を表すものであり、数が少ない。「様態+様態」タイプの複合動詞において、V2 は様態性が弱い動詞のほうが多く、V1 は V2 の様態を詳しく指定し、全体としては様態動詞になる。「結果+結果」タイプの語彙的複合動詞について、「焼け焦げる」「崩れ落ちる」などいずれも V2 が V1 の変化結果を指定し、複合動詞全体は結果しか指定されていない結果動詞になる。

ただし、ここで提示した語彙化タイプはすべて V1、V2 が単独動詞としての本義が生きている場合である。複合動詞において、V1 あるいは V2 の意味が抽象化する現象がよく観察される。先行研究で呼ばれている補文関係複合動詞のほとんどは V2 に意味変化が起こ

³⁰ 「再帰動詞」は動作の作用が動作を行う自身に返ってくる動作を表す動詞である（「日本語文法大辞典(2001:272)」。例えば、「花子は着物を着る」「太郎は靴を脱ぐ」などでは、動作主の働きかけが常に動作主自身に及んでおり、動作主自身の状態変化を引き起こす。また、仁田(1982)によると、再帰動詞は主体から発せられた状態変化を引き起こす運動が主体自身に戻ってくることによって、結局主体自身の状態変化を招くことになる。

³¹ Goldberg(2010)によると、「climb」は「よじ登る」という意味であり、様態と経路両方を含めている。

っており、この意味変化により、語彙的複合動詞の事象構造が変わると考えられる。これについて、第 5 章で詳しく論じる。

本章では語彙的複合動詞を単純動詞と平行な事象構造を持っていることについて論じたが、第 2 章で紹介したように、語彙意味論の基本的な考えは「動詞の意味がその統語的ふるまいを決定する」ということである。これにより、語彙的複合動詞は単純動詞と似た統語的なふるまいを行うと考えられる。このことから本稿の研究目的である「語彙的複合動詞の自他交替」という交替現象も、単純動詞と同様に考えられると予測できる。次章からは自他交替についての議論を展開していく。

第 4 章 語彙的複合動詞の事象構造と自他交替

4.1 はじめに

第 3 章で、V1、V2 の本義が生きている語彙的複合動詞の語彙化タイプ及び事象構造を明らかにした。本章では、第 3 章で明らかにされた語彙的複合動詞の事象構造に基づき、語彙的複合動詞の自他交替について議論を展開する。本稿は語彙的複合動詞は語彙化された一語であるので、その自他交替も単純動詞と同じメカニズムが働いていることを主張し、事象構造から自他交替の要因を探る。

本章の構成は以下のようになっている。4.2 節では語彙的複合動詞の自他交替に関する先行研究を批判的に概観し、語彙的複合動詞は単純動詞と同じ自他交替の要因が働いているという本稿の考えを提示する。4.3 節で、単純動詞の自他交替について分析し、分析結果から、単純動詞は起因事象と結果事象という使役事象を持っており、結果事象が焦点化される場合、自他交替が成立するということを主張する。4.4 節では、語彙的複合動詞の自他交替について「結果事象の焦点化」をもとに分析を行う。4.5 節では本章のまとめを記す。

4.2 先行研究

複合動詞の自他交替については、影山（1993）では「打ち上がる」や「積み重なる」などのような「他動詞＋非対格動詞」は「他動性調和の原則」の例外であり、「打ち上げる」「積み重ねる」からの逆形成として分析している。しかし、どのような場合そのような逆形成が生じるのかについて論じていない。松本（1998）は語彙的複合動詞の語形成について、「主語一致の原則」を提出し、「打ち上がる」のような「主語不一致型複合動詞」を他動詞からの自動詞化と述べているが、具体的な分析はなされていない。このように、語彙的複合動詞の自他交替について、影山（1993）、松本（1998）などでは言及されているものの、理論的メカニズムについてはあまり詳しく論じられていない。

最近になり、朱（2009）、陳（2010）、日高（2012）らによって、理論的分析が行われるようになった。そこで、本稿ではまず朱（2009）、陳（2010）、日高（2012）の分析を概観し、それぞれ複合動詞の自他交替についてどのような主張をしているのかをみる。そ

して、第 1 章で設定した三つの問題³²はまだ解決されていないことを示す。

4.2.1 朱 (2009) : V1、V2 の実質的な意味の有無

朱 (2009) は主に「上げる」「上がる」を V2 とする語彙的複合動詞を取り上げ、「他動詞+非対格自動詞」が「他動詞+他動詞」から派生されやすい場合と派生されにくい場合について論じており、複合動詞の自他交替は V1、V2 の実質的な意味を持っているかどうかに関与すると主張している。朱は下記 (1) (2) のような例を取り上げてこれについて説明している。

- (1) a. ボールを放り上げる—*ボールが放り上がる
- b. 子供を抱き上げる—*子供が抱き上がる
- (2) a. 円を切り上げる—円が切り上がる
- b. 大会を盛り上げる—大会が盛り上がる

朱 (2009:92-93)

(1) a、b における「放り上げる」「抱き上げる」が自他交替できないのに対して、(2) a、b では、「切り上げる」「盛り上げる」は自他交替が成立する。この原因について、朱は V1 が実質的な意味を有しているかどうかに関与すると論じている。朱は斎藤 (1989) ³³ を参考にし、(1) (2) の複合動詞の V1、V2 が実質的な意味を持っているかどうかについて、以下のように判断している。

³² 第 1 章では a なぜほとんどの複合動詞は自他交替できないのか、b なぜ一部の複合動詞は自他交替できるのか、c なぜ自他交替できる単純動詞が多いのに対して、自他交替できる複合動詞が少ないのかという三つの問題を設定している。

³³ 斎藤 (1989) は V1、V2 が実質的な意味を保持しているかどうかという観点から、複合動詞を次の 4 種類に分類している。

- a. V1, V2 双方が実質的な意味を保持しているもの
例：木を切り倒した→木を [○切っ/○倒し] た
- b. V1 のみが実質的な意味を保持しているもの
例：本を読み返した→本を [○読ん/*返し] た
- c. V2 のみが実質的な意味を保持しているもの
例：人を公平に取り扱う→人を公平に [*取る/○扱う]
- d. 意味的に V1、V2 に分解できないもの
例：彼女は落ち着かなかった→彼女は [*落ち/*着か] なかった

斎藤 (1989:63-64)

- (3) a. ボールを放り上げる—a.ボールを放る b.ボールを上げる
 b. 子供を抱き上げる—a.子供を抱く b.子供を上げる
 (4) a. 円を切り上げる—a.*円を切る b.円を上げる
 b. 予定を繰り上げる—a.*予定を繰る b.*予定を上げる

朱 (2009:92-93)

(3) では、V1 は実質的な意味を持っており、(1) のように自他対応できない。これに対して、(4) では、V1 は実質的な意味を持っておらず、(2) に示されているように自他対応できる。これにより、朱 (2009) は複合動詞において V1 が実質的な意味を持っていない場合、「他動詞+非対格動詞」は派生されやすいという結論を得た。しかし、次の例のように、V1 は実質的な意味を持っているが、自他交替できない例もあれば、自他交替できる例もあるという。

- (5) a. 本を積み上げる—*本が積み上がる
 b. 本を積み上げる—a.本を積む b.本を上げる
 (6) a. 実績を積み上げる—実績が積み上がる
 b. 実績を積み上げる—a.実績を積む b.実績を上げる

朱 (2009:95)

これについて、朱 (2009) は「積む」の意味は複数あり、名詞補語により、物理的な意味を表したり、抽象的な意味を表したりすることができる³⁴と述べ、(6) のような抽象的な意味を表す場合、「積み上げる」は自他対応が可能であると説明している。

また、V1 は抽象的な意味を表す場合でも、V2 の意味的特徴によって自他対応の振舞が異なると指摘されている。(7) (8) に示されているように、「積み上げる」と「追い上げる」両方とも V1 は抽象的な意味を表すのに、「積み上げる」は自他対応できるのに対して、「追い上げる」は自他対応できない。これは (8) の「追い上げる」では、V2「上げる」

³⁴ 朱 (2009:96) によると、視覚的に捉えられるような、具体的な行為或いは動作を表す場合は物理的な意味と称されている。「石を積む」のように、動詞の対象物は「石」などのような具体的なもので、その行為は視覚的に捉えられる。これに対して、視覚的に捉えられないような、具体的な行為或いは動作を表さない場合は抽象的な意味と称されている。「経験を積む」のように、動詞の対象物は「経験」などのような抽象的なもので、その行為は視覚的に捉えられない。

は実質的な意味を持っていないためであると朱（2009）は主張している。

- (7) a. 実績を積み上げる—実績が積み上がる
b. 実績を積み上げる—実績を積む 実績を上げる
- (8) a. グーグル利用者がヤフーを追い上げる。—*追いあがる
b. ヤフーを追い上げる—ヤフーを追う *ヤフーを上げる。

朱（2009:99）

朱（2009）は以上の議論を（9）のようにまとめている。

(9) 「他動詞+非対格自動詞」型の派生について

- 1) 不規則な複合動詞が派生されやすいのは、①複合動詞の V2 が実質的な意味を持つか持たないかわらず、V1 が実質的な意味を持たない場合、②V1 が抽象的な意味を持ち、V2 が実質的な意味を持つ場合である。
- 2) 不規則な複合動詞が派生されにくいのは、①複合動詞の V2 が実質的な意味を持つか持たないかわらず、V1 が物理的な意味を持つ場合、②V1 が抽象的な意味を持ち、V2 が実質的な意味を持たない場合である。

朱（2009:99）

朱（2009）におけるV1、V2が実質的な意味を持っているかどうかという角度から複合動詞の自他交替についての研究は大変示唆的であり、後述するが、本稿でも複合動詞の自他交替はV1、V2における意味変化と密接に関わっていると主張している。とはいえ、次の問題点がある。一つは、実例をきちんと検討していないところである。例えば、朱（2009）では、「実績を積み上げる」と「本を積み上げる」と対照して、前者が自他交替できるのに対して、後者が自他交替できないのは、前者ではV1「積む」は抽象的な意味を表しており、後者は物理的な意味を表しているからだという。しかし、例（4）「本を積み上げる」は自他交替できないとされているが、複合動詞用例データベースやgoogleなどの検索エンジンで検索すると、「本が積み上がる」の例は多く確認できた。また、「積む」が物理的な意味を表す他の「積み上げる」の例も収集された。

- (10) a. 事務所には至るところに本が積みあがっている。
 b. 読みかけの本が積みあがる。
 c. 壁には美少女アニメのポスターやカレンダー、雑誌や漫画本が積みあがる。
 d. 旅に出かけると、その関連の本が山のように枕元に積みあがるのが常。
 『複合動詞用例データベース』
 e. 鉄板が積み上がっている。(『複合動詞レキシコン』)

(10) から分かるように、「積み上げる」における「積む」は物理的な意味を表す場合でも「積み上がる」と自他交替できる。したがって、「積み上げる」のような複合動詞の自他交替の要因をV1の意味の抽象化に求めることができないと思われる。このようなV1もV2も実質的な意味を持っており、自他交替できる複合動詞は他に「吊り下げる—吊り下がる」「貼り付ける—貼り付く」「巻き付ける—巻きつく」などがある。このように、実例をきちんと吟味せずに導かれた結論は、信憑性に欠けるのではないであろうか。

二つ目の問題点は、朱は複合動詞の自他交替は構成要素の意味変化とかかわっているという現象を提示しているだけであり、それについての理論的な分析をなされていないというところである。例えば、なぜV1は実質的な意味を持っていない場合、自他交替できるのかについて理論的な分析はなされていない。理論的な分析はほとんど行われていないので、本稿で設定した三つの「なぜ」は解決されていない。

4.2.2 陳（2010）：「結果一致性の仮説」

陳（2010）は朱（2009）と全く異なる視点から自他交替現象を分析している。陳は自他交替する語彙的複合動詞の多くの例を観察した上で、2つの動詞要素が複合する際、概念構造で結果性が照合され、結果が一致する場合のみ、複合動詞が初めて自他交替能力を持ちえると主張している。以下、これについて検討する。

陳はまず例を通してこれについて説明している。例えば、(11)のように「吊り下げる—吊り下がる」という複合動詞は着点を表す二格名詞を要求する。このタイプの複合動詞の他動詞形は(12)のように、「モノを場所に V1+モノを場所に V2」に分けられ、すなわちV1とV2が同じ着点を取っていると述べている。

- (11) 天井には 100 を超す風鈴が吊り下がる。

(12) 吊り下げる：「風鈴を天井に吊る」＋「風鈴を天井に下げる」

陳（2010:40）

また、「打ち上げる—打ち上がる」では、「打つ」は「上方・空・宇宙に発射する」という使役位置変化を表し、「上げる」も「上方」へという位置変化を意味しているので、つまり V1 と V2 が同じ「上方へ」という位置変化を結果に取っている。「結びつける—結びつく」においても、「結ぶ」は人や事柄に関係づけるという意味であり、「つける」の付け先も同じ人・事柄を指すため、V1 と V2 が同じ抽象的な着点を取っている。

陳（2010）は以上のような分析を踏まえ、「結果一致性の仮説」を提案している。「結果一致性の仮説」とは「V1 と V2 の結果の意味が一致する場合のみ、複合動詞に自他交替の可能性がある³⁵（陳 2010:43）」ということである。さらに、陳は結果一致性の仮説における LCS と項構造の連結関係も提示し、自他交替現象を理論的に分析している。例えば、陳は「吊り下がる」の LCS を次のように提示している。

(13) 太郎が風鈴を天井に吊り下げる→風鈴が天井に吊り下がる

LCS2: $[[x_i \text{ ACT ON } y_i] \text{ CAUSE } [y_i \text{ BECOME } [y_i \text{ BE AT } z_k]]]$

LCS2: $[[x_i \text{ ACT ON } y_i] \text{ CAUSE } [y_i \text{ BECOME } [y_i \text{ BE AT } z_k]]]$

↓ ↓ ↓
 項構造：∅ <MANNER:無・弱指定> y_i 「風鈴」 z_k 「天井」

（網掛けは LCS の抑制を表す）

陳（2010:44）

陳の分析によると、「吊り下げる」では、V1「吊る」はどんな方法を使っても最終的に対象物を着点に付着させてぶら下げればいい。すなわち、「吊る」の動作様態が無指定か弱指定で、外項が抑制されうる能力を備えているということである。複合動詞が自動詞化するとき、V2 と V1 の外項動作主が抑制され、項構造への連結資格を失い、結果的に複合動詞は内項しか持たない非対格自動詞になる。陳では明記されていないが、「吊る」と「下げ

³⁵ 陳（2010:43）によると、ここでいう結果とは、何かの状態変化か位置変化を表す動詞事象において、その変化の結果として変化主体が有する状態、もしくは存在する位置のことを指す。

る」は同じ結果 z_k を持っていることにより、「吊る」の「結果」は後退せず、複合動詞に参与することが保証されている。

それに対して、「切り落とすー*切り落ちる」などのような複合動詞は V1 の外項が抑制されても、V1 と V2 の「結果」が一致しないので、自他交替できないという。「切り落とす」では、V1 と V2 の取る結果が違うので、「一義的経路の制約」により、V1 の表す結果が後退し、複合動詞全体の取れる結果は V2 の「下方」だけである。LCS で以下のように示されている。

(14) 太郎が枝を切り落とす

LCS2: $[[x_i \text{ ACT ON } y_i] \text{CAUSE}[y_i \text{ BECOME}[y_i \text{ BE AT-下方}]]]$

LCS1: $[[x_i \text{ ACT ON } y_i] \text{CAUSE}[y_i \text{ BECOME}[y_i \text{ BE AT-切断}]]]$

項構造: x_i 太郎

y_i 枝

下方

陳 (2010:45)

「切り倒す」が自動詞化するとき、V2 外項の抑制とともに、V1 の外項も抑制されるので、V1 のどの項も複合動詞の項構造に参与できず、非文になる。これを次の LCS で示している。

(15) *枝を切り落ちる

LCS2: $[[x_i \text{ ACT ON } y_i] \text{CAUSE}[y_i \text{ BECOME}[y_i \text{ BE AT-}z_k]]]$

LCS1: $[[x_i \text{ ACT ON } y_i] \text{CAUSE}[y_i \text{ BECOME}[y_i \text{ BE AT-}z_k]]]$

項構造: \emptyset

y_i 枝

下方

陳 (2010:45)

以上は陳の研究の概観であるが、陳の研究では、朱 (2009) が説明できない「吊り下げる」なども説明できるようになった。そして、陳は本稿が設定した問題 a (ほとんどの複合動詞が自他交替できない原因)、問題 b (一部の複合動詞の自他交替できる原因) に答えている。すなわち、ほとんどの複合動詞は自他交替できないのは、V1 と V2 の結果が一致しないからである。また一部の複合動詞は自他交替できるのは、V1 と V2 の結果が一致し

ているからである。しかし、動詞の結果をどこまで認めるのかという根本的な問題が残されている。例えば、「打ち上げる－打ち上がる」という例について、陳は、「打つ」は「上方・空に発射する」ということを意味し、「上げる」の「上方へ」という結果と一致していると述べている。しかし、そもそも「打つ」は活動動詞であり、もともと結果を含意していない。さらに、「花火を打ち上げる」という例において、「打つ」は本来の意味から「勢いよく」といった副詞的な意味に転義していると考えられる。いずれにしても、「打つ」は「結果」を持っているとは考えにくい。ため、「上げる」と「結果一致」をなしているという分析には同意できない。つまり、陳では V1 に結果が含まれていない複合動詞を説明できない。そして、陳は複合動詞の自他交替を単純動詞と同じ角度から論じておらず、本稿で設定した問題 c（複合動詞と単純動詞の自他交替のふるまいの違いの原因）について言及していない。

4.2.3 日高（2012）：「反使役化」「脱使役化」

朱（2009）と陳（2010）は単純動詞の自他交替を言及せずに複合動詞の自他交替について分析しているが、日高（2012）は、複合動詞の自他交替を単純動詞と同様に分析し、単独動詞の自他交替に適用される「反使役化」と「脱使役化」の考え方が語彙的複合動詞にも適用できることを主張している。

「反使役化」と「脱使役化」については、4.3 節で改めて論じるが、日高を検討するために、ここでも簡単に説明しておく。まず「反使役化」について見てみたい。「反使役化」とは、他動詞の使役構造における動作主を目的語と同一視するというものである。つまり、自動詞になった場合、意味構造上独立した動作主が存在しなくなり、目的語の性質によって変化が起こるかのように認識できる。このため、自動詞のほうは「ひとりでに」や「勝手に」といった副詞と共起できる。日高（2012）によると、反使役化によって形成される複合自動詞には次のようなものがある。

（16）反使役化によって形成される複合自動詞

（債務が）積みあがる、（地面/雰囲気）盛り上がる、（溶岩が）吹き上がる、（値段が）吊り上がる、（フィルムが）巻き上がる、（選手が）入れ替わる、（借金が）積み重なる、（紙が）貼り付く、（思い出が）焼きつく、（蔓が）巻きつく

日高（2012:119）

日高はこれらの複合動詞は（17）のように、「ひとりでに」「勝手に」「自ら」といった自発の意味を修飾する副詞と共起できるので、単独動詞と同じ「反使役化」が適用されると述べている。

- （17） a. 債務が {ひとりでに/勝手に} 積みあがった。
b. 地面/雰囲気が {ひとりでに/勝手に} 盛り上がった。
c. 張り紙の裾が {ひとりでに/勝手に} 巻き上がった。
d. 選手が {自ら/勝手に} 入れ替わった。
e. 風に舞った紙が {ひとりでに/勝手に} 額に貼りついた。
f. その光景が {ひとりでに/勝手に} 目に焼き付いた。
g. 蔓が柱に {ひとりでに/勝手に} 巻きついた。

日高（2012:120）

また、単純動詞と同様に、同じ動詞でも補語名詞によって、自らの性質によって変化が起きない場合は自他交替できないと述べている。例えば、（17）では、「債務」や「雰囲気」などは自ら増えたり良くなったりする性質を持っているから、それぞれ「債務が積み上がる」「雰囲気が盛り上がる」といえる。一方、同じ複合動詞でも（18）のように、自ら変化する性質を持っていない名詞の場合、自他交替できない。

- （18） a. *店の入り口に塩が盛り上がった。（*塩が {ひとりでに/勝手に} 盛り上がった。）
cf.店の入り口に塩を盛り上げた。
b. ?*電池が入れ替わった。（*電池が {ひとりでに/勝手に} 入れ替わった。）
cf.電池を入れ替えた。
c. *努力が積み重なった。（*努力が {ひとりでに/勝手に} 積み重なった。）
cf.努力を積み重ねた。

日高（2012:120）

次に「脱使役化」について見てみよう。「脱使役化」とは、動作主の存在を非焦点化することである。「脱使役化」によって形成される複合自動詞には次（19）のようなものが

あると指摘されている。

(19) 「脱使役化」によって形成される複合自動詞

吊り上がる、吸い上がる、汲みあがる、持ち上がる、吊り下がる、折り曲がる、
捻じ曲がる

日高 (2012:121)

「脱使役化」の場合、反使役化と異なり、これらの複合自動詞は対象に「自らそうなる性質」がないため、「ひとりでに」「勝手に」といった副詞による修飾を許さない。

- (20) a. *荷物が {ひとりでに/勝手に} 吊り上がった。
b. *水が {ひとりでに/勝手に} 吸い上がった。
c. *大きな石が {ひとりでに/勝手に} 持ち上がった。
d. ?*針金が {ひとりでに/勝手に} 折り曲がった。

日高 (2012:121)

(20) に取り上げられている例は「自らそうなる性質」を持っていないが、動作主の存在を非焦点化しやすいと論じられている。その証拠に、これらの動詞は通常機械等が直接的な行為を行うため、「道具主語」を取りやすいという。「道具や機械が直接的な行為を行い、人間はむしろ間接的に関与するとみなされる場合は脱使役化しやすい」と日高 (2012) は述べている。(21) のように、「吊り上げる」や「吸い上げる」は、通常機械などが直接的な行為を行うため「道具主語」を取りやすく、このような複合動詞は脱使役化が起こるという。

- (21) a. クレーンが荷物を吊り上げる。
b. ポンプが水を吸い上げる。

日高 (2012:121)

日高は、語彙的複合動詞の自他交替を単純動詞の自他交替と同じように考える点で、本稿の主旨と一致している。しかし、日高の考察は、ただ判断テストで複合自動詞の意味的

な性質について説明しているのみで、一体どのような語構造を持っている複合他動詞は反使役化、脱使役化を起こすかについては論じていない。そして、複合動詞と単純動詞の自他交替における振る舞いの相違（数の差）及びその原因について言及していない。

また、日高に取り上げられている例も信憑性にかけていると思われる。例えば、日高では例（18）は不成立とされているが、『複合動詞用例データベース』で検索すると、(22) のような例が確認できる。

(22) a. 電池が入れ替わった。

b. そんな地道な努力が積み重なることで、平凡な仕事が凄みを増し...

『複合動詞用例データベース』

日高によると、「電池」や「努力」は「自らそうなる性質」は持っていないため、反使役化が起こらない。しかし、(22) の例から分かるように、実際に、「電池が入れ替わる」「努力が積み重なる」が言える。この事実から、「入れ替わる」「積み重なる」などは反使役化では説明できず、日高の主張を検討すべきであると思われる。

4.2.4 先行研究のまとめと本稿の立場

上では朱（2009）、陳（2010）、日高（2012）の研究を検討した。まとめると、下記のようなになる。朱は V1、V2 の意味変化の有無から考察しているが、朱の分析は「積み上げる」「吊り下げる」など V1 が実質的な意味を持っているような複合動詞の自他交替をうまく説明できない。そして、理論的な分析はなされていない。陳は V1、V2 の「結果の一致性」によって理論的な説明を行っているが、「結果」の認定に問題があり、「打ち上がる」のような V1 に結果が含まれていない複合動詞の自他交替を説明できない。日高は複合動詞の自他交替を単純動詞と同じような「反使役化」と「脱使役化」が働いていると論じているが、「努力が積み重なる」などのような複合動詞を説明できない。また、どのような語構造を持つ複合動詞は自他交替するかについて言及していない。以上のように、先行研究では複合動詞の自他交替のメカニズムについてまだ解明していないと考えられる。そして、本稿の第 1 章で設定した三つの問題はいずれも解決されていない。

本稿では、語彙意味論のアプローチから、事象構造によって複合動詞の自他交替について分析する。語彙意味論では、動詞の統語的なふるまいの原因をその意味に探るアプロー

チを取っており、単純動詞の自他交替を動詞の事象構造によって説明している。本稿では複合動詞の自他交替の成立も不成立もすべて事象構造からその原因を探る。第3章ではすでに体系的に複合動詞の事象構造を提示しているので、本稿の問題設定 a（ほとんどの複合動詞の自他交替の不成立の原因）及び問題設定 b（一部の複合動詞の自他交替の成立の原因）は容易に解決できるであろう。

また、第3章で語彙的複合動詞は語彙化された一語であり、単純動詞と平行な事象構造を持っていると論じた。平行な事象構造を持っている語彙的複合動詞と単純動詞は自他交替の面でも似た分析ができると考えられる。複合動詞の自他交替を単純動詞と同じ事象構造の角度から分析すれば、複合動詞と単純動詞における自他交替現象を同じ立場から対照して議論することができ、本稿の第1章で設定した問題 c（複合動詞と単純動詞の自他交替の異なるふるまいの原因）の解決が期待できる。先行研究では、唯一日高（2012）は語彙的複合動詞の自他交替を単純動詞と同じような観点で論じている。しかし、4.2.3節で述べたように、日高はただ複合自動詞の性質を単純自動詞と同じように考察しており、自他交替がどのようなメカニズムによって起こるのかを解明してはいない。

本稿では一語が表す事象構造に注目し、複合動詞は単純動詞と同じような事象構造を持っており、その自他交替に単純動詞の自他交替と同じメカニズムが働いていると考えている。そこで、次節では単純動詞の自他交替のメカニズムを明らかにしたい。

4.3 単純動詞の自他交替

4.3.1 先行研究の概観

自他交替に関する研究において、自動詞が基本とする分析（Lakoff 1970、丸田 1998 等）、他動詞が基本とする分析（Levin & Rappaport Hovav 1995、影山 1996、小野 2005 等）、或いは派生の方向を考えず、自動詞と他動詞を一つの動詞と見なす（Jackendoff 1990）という異なる分析がある。本稿は自他交替を他動詞からの自動詞化として捉え、以下では、他動詞が基本とする代表的な先行研究を概観する。

Levin and Rappaport Hovav（1995）は自他交替を起こす動詞は他動詞を基本として、使役主の存在量子化³⁶（existential quantification）によって、他動詞から自動詞を導く

³⁶ 存在量子化というのは、 x を不特定の存在にするという意味である。意味的には、中心出来事が不定の外的原因によって引き起こされ、それがあたかも「自発的」に生じたかのような解釈をもたらす。（丸田 1998:75）

(23) a. 他動詞 break: [[x DO-SOMETHING]CAUSE[y BECOME BROKEN]]
 | |
 b. Linking rules: x <y>

(24) a. 自動詞 break: [[x DO-SOMETHING]CAUSE[y BECOME BROKEN]]
 |
 b. Linking rules: c <y>

91

論じている。

- (26) a. The rabbits destroyed the garden.
b. *The garden destroyed.
- (27) a. The nurse sterilized the instruments.
b. *The instruments sterilized.

(Levin&Rappaport Hovav 1995:95)

影山（1996）は、Levin&Rappaport Hovav（1995）と同様に自他交替動詞に他動詞の LCS を基盤として、他動詞に対応する自動詞ではもともとの使役主が独立した地位を失い、文の要素として具現化しなくなるとしている。しかし、他動詞の LCS から自動詞の LCS を導く使役主項の抑圧を、変化対象と使役主の同定過程、すなわち一種の再帰化過程とみなしている。影山（1996）は自他交替を形式的に下記のように示している。

- (28) 概念構造における反使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]

→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z] (影山 1996:145)

影山（1996:145）によると、(28) では、使役主 (x) が変化対象 (y) と同定され、意味的に束縛される。この操作を反使役化と名づける。束縛をうけた使役主は対象物と同一物であることが意味構造で保証されるから、統語構造には現れない。

また、影山は変化対象物の性質「内在的コントロール」という観点から反使役化の意味的・認知的条件を論じている。反使役化が成立するためには、変化対象そのものが使役主として働く資格ないし性質という「内在的コントロール」を持っていなければならないという。同じ動詞でも、変化対象物の性質によって、反使役化が適用したりしなかったりする。例えば、(29) を見てみよう。

- (29) a. The storm broke the window. The window broke.
b. He broke his promise. *His promise broke.

影山（1996:160）

「break」は(29) a、b 文では、自他交替のふるまいが異なる。これは「窓」はそれ自体の物理的な性質によって壊れるが、「約束」は自ら壊れる力を持たないと認識されるためであると影山は説明している。

小野(2000,2005)は Levin&Rappaport Hovav(1995)、影山(1996)などの研究を踏まえ、自他交替の意味的・認知的条件について、Levin&Rappaport Hovav の「起因事象の指定」及び影山の「内在的コントロール」と呼ぶ変化対象物の性質を「結果事象への使役主の関与」のしかたとして再定義している。小野(2000)では事象構造と語彙概念構造を結び付けて、動詞の事象構造に補語名詞の事象構造を合成させ、自他交替する使役動詞を(30)、非交替使役動詞の事象構造を(31)のように示している。

(30) 事象構造 : e1 (x,y)、e2 (y)

LCS: [[x ACT]CAUSE[y BECOME<STATE>]

(31) 事象構造 : e1 (x,y)、e2 (x,y)

LCS: [[x ACT]CAUSE[y BECOME<STATE>]

小野(2000:22)

ここで、e1 は起因事象、e2 は結果事象をそれぞれ表している。x は使役主であり、y は変化対象物である。e1 (x,y) は、因果連鎖の始点である使役主 x から被動者 y への力の伝播が起因事象において起こるという意味である。e2 (y) は結果事象に被動者項 y だけ関わり、y が変化するという意味である。e2 (x,y) は、結果事象 y が変化することに使役主項 x が関与するという意味である。すなわち、自他交替動詞の場合は、使役事象がなくとも、結果事象が起こるが、自他交替しない動詞の場合、使役事象なしには結果事象が起こらない。

4.3.2 先行研究のまとめ

ここで概観してきた先行研究の主張および問題点をまとめ、本稿の立場を明確にする。先行研究から自他交替について、下記のような 2 点に分かる。

(a) 自他交替できる動詞の意味構造

先行研究で、一般に広く受けられている自他交替する動詞の意味構造は次のようなもの

である。

(32) 自他交替する動詞の意味構造：

他動詞：[[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT<STATE>]

起因事象

結果事象

自動詞：[y BECOME BE AT<STATE>]

結果事象

自他交替する他動詞のほうは、使役主 *x* が対象物 *y* に働きかけ、そのことが対象物 *y* が結果状態<STATE>に至る変化を引き起こす。自動詞は *y* が変化することを表す。このように、使役を表す他動詞は起動（変化結果）を表す自動詞と交替するので、使役起動交替とも呼ばれている。

(b) 自他交替の意味的条件

自他交替の意味的・認知的条件について、Levin&Rappaport Hovav (1995) は「起因事象の指定・無指定」、影山 (1996) は変化対象物の「内在的コントロール」、小野 (2005) は「結果事象への使役主の関与」などそれぞれ異なる視点から説明しているが、論旨はほぼ同じである。これについて説明すると、次のようになる。起因事象が指定されている (Levin&Rappaport Hovav 1995) というにより、使役主を変化対象物と同一視することができなくなる。すなわち、対象物の変化プロセスに独立した使役主が外から力を加える必要がある。これは使役主が結果事象へ関与しているということである (小野 2000,2005)。使役主の必然性はまた変化対象物の内在的コントロール性と繋がっている (影山 1996)。

しかし、これらの先行研究の議論は、単純動詞に基づく論述であり、複合動詞及び英語の結果構文の現象を見れば、自他交替の一般的な制約にならない。松本 (2000b) は (33) のような例を取り上げ、使役事象の手段が指定されているものの、自他交替が成立すると指摘している。

(33) a. The wind blew the napkin off the table.

b. The napkin blew off the table.

(松本 2000b:177)

松本によると、(33)において、「blow off」は、使役が空気の移動によって行われるという指定を持つが、その情報を含んだまま反使役化させることができる。このように、行為を表す動詞が不変化詞や結果句を伴う場合、使役事象の指定があっても反使役化が許されることがあると指摘している。また、日本語では、使役事象の手段の指定を含む他動詞が反使役化することは、「巻きつける－巻きつく」「炊き上げる－炊き上がる」などのように V1 によって使役の手段が表されている複合動詞では明らかであると述べている。ただし、松本はただ例を取り上げ、英語と日本語における反使役化の例外という現象を指摘しているが、それについての理論的な分析をなされていない。本稿では手段の指定を含む自他交替を考慮に入れて、自他交替の意味的条件を「結果事象の焦点化」と再定義する。これについて、次節で詳しく述べる。

4.3.3 結果事象の焦点化

松本（2000）に指摘された英語の結果構文と日本語の複合動詞は自他交替できる以上、自他交替できる単純動詞と何か共通点を持っているはずだと考えられる。では、松本（2000）に指摘された自他交替の現象と単純動詞の自他交替の現象とどういう関連があるか考えてみよう。例（33）はいわゆる「結果構文」である。影山（1996）は結果構文について、以下のような論述がある。

英語の結果構文は、このように、本来は継続活動であるものに強制的に完了アスペクトを付け加えた構文である。そうすると、意味的な焦点は完了結果の部分に注がれる。（中略）

英語では単純な働きかけ動詞は中間態構文に生じないが、結果述語をつけると中間態になることができる（例（114）参照）。

(114) a. *Gold hammers easily.

Gold hammers flat easily.

b. *This counter wipes quickly.

This counter wipes dry quickly.

中間態構文は、通常、状態変化の使役動詞に適用するので (Hale& Keyser1987)、働きかけ動詞単独には当てはまらないものの、結果述語を置くことで変化結果に焦点が移り、そのため中間態が可能になる。これがさらに進めば、他動詞に反使役化が適用して能格構文が生まれる (例 (115) 参照)。

(115) b. Victor couldn't **pull free**. ひっぱって抜ける

影山 (1996:264-265)

影山 (1996) の論述から分かるように、英語の結果構文では、変化結果が焦点化されるようになり、中間態と反使役化が可能になる。すなわち、英語の結果構文では、使役の手段は指定されているが、変化結果が焦点化されているので、自他交替も可能になる。

また、早津 (1995 : 179) は日本語の他動詞は、対応する自動詞があるか否かという点で「有対他動詞」と「無対他動詞」という二つの類に分けられると述べ、有対他動詞と無対他動詞をそれぞれ、「働きかけの結果の状態に注目する動詞」と「働きかけの過程に注目する動詞」と特徴づけている。

本稿は影山 (1996)、早津 (1995) からヒントをもらい、自他交替の意味的条件を「結果事象の焦点化」と再定義する。単純動詞の場合、「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っている使役事象では、起因事象が指定されない (Levin&Rappaport Hovav 1995)、或いは使役主が結果事象に関与しない (小野 2000,2005) ということは、結果事象が焦点化されるということになる。後述するが、複合動詞の場合、使役の手段が指定されても、結果事象が焦点化されることもある。このため、本稿は松本 (2000) に指摘された反使役化の例外という現象を考慮に入れて、自他交替する動詞の意味的条件の本質を「結果事象の焦点化」として捉える。すなわち、使役の手段が指定されても、結果事象が焦点化される場合、自他交替が可能になる。

「結果事象の焦点化」という考えは認知文法の考えとも軌を一にする。例えば、中村 (2000) は自他交替と認知プロセスについて、touch 系、kick 系、break 系、cut 系動詞の認知ベースのどの部分がプロファイル³⁷されているかによって、自他交替のふるまいが

³⁷ プロファイルは認知文法の用語であり、「認知のドメインのなかの焦点化されている部分」という意味である (山梨 2000:20)。本稿でいう焦点化とほとんど同じことを言っているが、本稿では認知文法の角度ではなく、語彙意味論の中で焦点化について論じる。

異なると論じている。これについて、中村は (34) のような図で説明している³⁸。

(34) a. X touched y. *Y touched.



b. X kicked y. *Y kicked.



c. X broke y. Y broke.



d. X cut y. *Y cut.



中村 (2000:86)

中村によると、(34) a、b では、touch 系動詞、kick 系動詞は変化の部分をプロファイルしない。このような動詞は自他交替しない。また、d では、cut 形動詞は変化の部分のみならず、使役の働きかけの部分もプロファイルされており、自他交替しない。一方、c の break 系動詞のように、使役構造を認知ベースとして、変化部のみがプロファイル可能であれば、その動詞は自他交替する。このように、「結果事象の焦点化」から自他交替についての分析の合理性は認知文法からも裏付けられる。

では、次は事象の焦点化とはどういうことかについて説明する。「焦点化」(focusing) という概念は主に認知言語学で論じられ、上述した「プロファイル」という用語は「焦点化」と同じ意味を指している。本稿では、このような認知的な漠然とした定義ではなく、語彙意味論の枠組みで事象の焦点化について論じる。本稿で用いられている「事象の焦点化」という概念は Pustejovsky (1995) の「Event headedness」(主辞) を参考にしてい

³⁸ この図で、あるものが別のものに力を加えるところを左端の円から右の円への二重線の矢印で示し、力を受けるものが被る変化を波線の矢印で示し、変化後の状態を四角で示している。

る。Pustejovsky は「Event headedness」について、以下のような論述がある。

Event headedness provides a way of indicating a type of foregrounding and backgrounding of event arguments. An event structure provides a configuration where events are not only ordered by temporal precedence, but also by relative prominence. One instance of prominence for an event, *e*, is provided by the HEAD marker, annotated as *e**. The conventional role of a head in a syntactic representation is to indicate prominence and distinction. Informally, the head is defined as the most prominent subevent in the event structure of a predicate, which contributes to the focus of the interpretation.

Pustejovsky (1995:72)

Pustejovsky は事象構造において、各下位事象は時間的に順序づけられているだけでなく、「卓立性」の差もあると述べ、最も卓立性が高い下位事象は「主辞」と呼ばれている。そして、主辞は意味上の焦点になっている。「主辞」という概念は大変重要なように思われるが、Pustejovsky はどのような場合に事象に「主辞」を指定するのかについて言及していない。Kudo (2010) は、Pustejovsky の事象の主辞 (event headedness) について、次のような定義を新たに与えている。

(35) Event Head Assignment³⁹:

A subevent of a predicate must be headed, indicated by *e**, if and only if

- (i) it involves a constant; or
- (ii) its manner/instrument/theme is lexically specified;

(Kudo 2010: 84)

(35)「主辞」の定義から分かるように、Kudo は「主辞」を「root」の指定と捉えている。(i) の「constant」は「root」と同じことを指している。(ii) manner 等の指定は

³⁹ (35) の (i) (ii) 以外に、Kudo (2010) は (iii) it is semantically or pragmatically focused. という場合も主辞になると述べている。(iii) は複合動詞に適用すると考えられる。これについては後述する。

すなわち **manner** を修飾する「**root**」が指定されるということである。例えば、使役変化動詞の場合、「変化結果」は必ず指定されるので、「変化結果」は「主辞」として指定されると論じられている。Kudo は「**break**」の事象の主辞を以下のように示している。(36) は「**break**」のクオリア構造⁴⁰を表記するものであり、上段にあるのは「**break**」の結果事象であり、下段にあるのは起因事象である。その中で、結果事象は主辞になっている。

(36) Break

QUALIA=FORMAL=be (e2*,y,broken)

AGENTIVE=act (e1,x)

(Kudo 2010: 85)

本稿は Kudo の考えと一致しているが、もっと分かりやすい用語「事象の焦点」を使用する。本稿では単純動詞の場合、「**root**」が指定されている事象が焦点になると考えている。

第 3 章では、動詞の表す事象タイプは「様態」「結果」「様態・結果」という三つがあると論じたが、事象タイプは焦点化という角度から考えることもできる。事象全体のどの部分に焦点を置くかによって、異なる言語表現を用い、異なる事象タイプになると考えられる。事象の「焦点化」ということを以下のように理解している。

外部世界は、さまざまな事態から成り立っている。人間はこの事態を、ある基本的な認識のパターンに基づいて理解している。この基本的な認識のパターンは「行為－変化－結果」という行為連鎖である。我々は普通、この行為連鎖のある部分に重点を置きながら、その事象を認識する。焦点が当たったその部分は「焦点化」されると考えられる。異なる部分が焦点化されるかによって、異なる動詞になる。例えば、太郎が石でガラスを叩いて、ガラスが壊れたということを想定してみよう。この出来事はおそらく次 (37) のような 4 つの文で表すことができる。

(37) a. 太郎はガラスを叩いた。

b. 太郎はガラスを壊した。

⁴⁰ クオリア構造 (qualia structure) は Pustejovsky (1995) に提出された概念であり、語の百科辞典的な意味を表すものである。構成役割、形式役割、目的役割、主体役割から構成されている。クオリア構造の表記法は学者によって異なり、統一した使われ方はまだない。

- c. ガラスが壊れた。
- d. 太郎はガラスを叩き壊した。

太郎がガラスにどのように働きかけるのかということに焦点を置くと、a のように表すことができるが、そのガラスがどうなったのか分からない。このように、「叩く」は様態が焦点になっているので、様態動詞になる。b は太郎はガラスに働きかけ、ガラスが壊れた状態にするということに焦点を当てている。太郎がどのような手段でガラスを壊すのか不明である。b は結果が焦点になっているが、使役主も認知スコープに入れているため、結果動詞（他動詞）になる。c は太郎の角度ではなく、太郎の働きかけを受けた側ガラス野角度から、ガラスの状態変化を表す。c は結果が焦点になっている結果自動詞である。d は「叩き壊す」という複合動詞で太郎の用いた手段とガラスの変化結果両方を表すことができる。(37) で b と c はいわゆる自他交替現象であり、d は複合動詞が用いられている。このように、「root」の指定と事象の焦点化は同じように捉えられる。

複合動詞の場合も基本的に事象の焦点化を「root」の指定と捉えてよいように思われるが、語根 2 つあるので、他の可能性もあると思われる。斎藤（1992）は複合動詞における V2 の接辞性を論じる際、V2 は V1 に含まれている意味要素を繰り返すことにより、その意味要素に力点が置かれていると述べている。同じ語を繰り返すことによって強調をもたらす反復法という修辞技法と同様に、複合動詞において、同じ意味要素が繰り返し用いられることにより、その意味要素が強調され、焦点になると考えられる。このため、本稿では複合動詞における事象の焦点化を「root」の指定と捉える以外に、事象が強調される場合も焦点化と捉える。

複合動詞の事象の焦点化については第 5 章で詳しく論じるが、ここでは、「結果事象の焦点化」を理解するためにひとつ例を取り上げて簡単に説明しておきたい。第 3 章で論じたように、「様態・結果+結果」タイプの複合動詞は全体的に「様態」と「結果」両方が指定され、つまり、「root」は「様態」と「結果」という二つである。通常、このような複合動詞は様態も結果も焦点になっているが、「巻き付ける」のような V1 に含まれる結果と V2 の結果と一致する場合、結果が焦点化されると主張したい。これについて、もう少し詳しく論じると、「巻く」は「様態・結果動詞」であり、すでに「付ける」の意味を含んでおり、「つける」は「巻く」に含まれている「結果」の意味の複製に過ぎない。このため、「巻きつける」では、「巻く」は複合動詞の意味的な中心になり、「付ける」は「巻く」に含ま

れている「結果」の意味を再度入れることにより、「結果事象」は強調されるようになる。この場合、「結果事象」が焦点化されると捉える。なお、これについて、第 5 章でより詳しい議論を展開する。

まとめると、本稿では、基本的に事象の焦点化を「root」の指定と捉える。ただし、複合動詞の場合、「様態・結果+結果」タイプは「root」は「様態」と「結果」という二つであるが、「結果」が繰り返し用いられることにより、焦点化されるようになることがある。では、次節では「結果事象の焦点化」の角度から単純動詞の自他交替について分析を行う。

4.3.4 単純動詞の自他交替

第 3 章の 3.4.2 節では単純動詞の「様態」と「結果」による分類を行った。この分類には自動詞と他動詞の両方を含んでいるが、本節は他動詞の自動詞化について考察するため、ここでは他動詞のみを取り出して分析する。他動詞には (38) のようなものがある。

(38) 1) 働きかけ動詞（様態他動詞）：

押す、打つ、叩く、殴る、引く、揉む、蹴る、噛む、搔く...

LCS: [x ACT<MANNER>on y]

EVENTSTR=E1=e (x,y) :process

2) 使役変化/移動動詞（結果他動詞）：

上げる、開ける、温める、切る、倒す、壊す、潰す、落とす、降ろす、返す...

LCS:[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT z]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-MANNER)

E2=e2 (y) :state

3) 様態・結果動詞：

刻む、彫る、塗る、吊る、煮る、刈る、吸う、研ぐ、縛る、盛る、結う...

LCS:[x ACT<MANNER> on y]CAUSE[[y BECOME BE AT z]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process(+MANNER)

E2=e2 (y) :state

上記の分類を「事象の焦点化」から考えると、「様態他動詞」は「様態」が指定されているので、「起因事象」が焦点化されるということになる。「使役変化動詞」は「起因事象」と「結果事象」両方は認知のスコープにあるが、変化結果だけが指定されるので、「結果事象」が焦点化されている。そして、「様態・結果動詞」は「様態」も「結果」も指定され、「起因事象」と「結果事象」両方が焦点になる。焦点に関する情報を事象構造に入れると、(39) のようになる。

(39) 1) 働きかけ動詞（様態他動詞）：

押す、打つ、叩く、殴る、引く、揉む、蹴る、噛む、搔く...

LCS: [x ACT<MANNER>on y]

EVENTSTR=E1=e* (x,y) :process

2) 使役変化/移動動詞（結果他動詞）：

上げる、開ける、温める、切る、倒す、壊す、潰す、落とす、降ろす、返す...

LCS:[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT z]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

E2=e2* (y) :state

3) 様態・結果動詞：

刻む、彫る、塗る、吊る、煮る、刈る、吸う、研ぐ、縛る、盛る、結う ...

LCS:[x ACT<MANNER> on y]CAUSE[y BECOME BE AT z]

EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process

E2=e2* (y) :state

(e*はその事象に焦点があることを示す。)

以上のように、他動詞は三種類に分けられている。4.3.2 節で述べたように、使役起動交替を起こす他動詞は起因事象（上位事象）と結果事象（下位事象）という複合事象を持っている動詞に限られる。このことから、結果他動詞と様態・結果他動詞はこの条件を満たしていると言える。しかし、結果他動詞は変化結果に焦点を置く動詞であるのに対して、様態結果動詞は様態も変化結果も指定されており、両方とも焦点になる。先行研究では自

他交替の意味的条件を「起因事象の無指定」としたり、「使役主が結果事象への不関与」としたりしているが、それはすなわち変化結果が指定され、焦点化されるということになる。事象構造で表すと、(40) のようになる。

(40) LCS:[x ACT on y]CAUSE[y BECOME AT z]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

E2=e2* (y) :state

このように、本稿で「結果他動詞」と呼ばれている他動詞は自他交替を起こすことができると考える。事象の捉え方から考えれば、結果他動詞では、変化結果は焦点化されているため、その部分だけ取り出されて表現することができる。すなわち、自動詞に派生できる。例えば、下記のような自他交替の例である。

(41) 開ける－開く、温める－温まる、切る－切れる、倒す－倒れる、壊す－壊れる
落とす－落ちる、上げる－上がる、降ろす－降りる、返す－返る...

一方、様態・結果他動詞は起因事象と結果事象という複合事象を持っているが、様態も結果も指定されているため、変化結果だけを取り出して表現することができない。

以上、「結果事象の焦点化」という角度から、使役起動交替の意味的条件を再分析してみた。これまでの議論を受けて、本稿は単純動詞の自他交替のメカニズムを以下のように考える。起因事象と結果事象の両方を持つ使役変化他動詞は、起因事象（手段・様態）が指定されておらず、結果事象が焦点化されている場合、自他交替が成立する。一方、起因事象（手段・様態）も結果事象も焦点化される場合、自他交替が成立しない。

本稿のこれまでの分析は、「結果事象の焦点化」は、単に先行研究と異なる視点から自他交替を観察しているだけであり、結局「起因事象の無指定」などの先行研究と同様の主張をしているため、とりわけ新しいことは何もないように思われるかもしれない。しかし、目を語彙的複合動詞の自他交替に転じれば、「結果事象の焦点化」こそ自他交替の本質であるということが分かる。これについて、第 5 章で詳述するが、この観点を支持するところだけ少し触れる。松本（2000）に指摘されたように、語彙的複合動詞では、使役手段が指定されているものの、自他交替できる例がある。それは、語彙的複合動詞において、何ら

かの操作により、手段が指定されながら、語彙的複合動詞の結果事象が焦点化される場合である。すなわち、動詞の自他交替にとって、起因事象の指定かどうかより、結果事象の焦点化がもっと重要である。以下 4.4 節で「結果事象の焦点化」から、語彙的複合動詞の自他交替を考察する。

4.4 語彙的複合動詞の自他交替

第 3 章で、語彙的複合動詞の語彙化タイプを考察し、単一事象としての事象構造を提示した。本節でまず第 3 章で論じられた語彙的複合動詞の語構造と事象構造を簡単にまとめ、その上で、語彙的複合動詞の自他交替について議論する。先行研究で指摘されてきたように、ほとんどの複合動詞は自他交替できない。このため、まず自他交替しない語彙的複合動詞について分析する。

4.4.1 自他交替しない語彙的複合動詞

語彙的複合動詞の語彙化タイプは「様態＋結果」「様態＋様態」「結果＋結果」という 3 つある。ここでは、事象の焦点化の情報を入れて、語彙的複合動詞を簡単にまとめる。まずは「様態＋結果」タイプの語彙的複合動詞の事象構造を (42) のように表す。

(42) 「様態＋結果」

a. 叩き壊す : $[[x \text{ ACT}_{\langle \text{MANNER} \rangle} \text{ on } y] \text{CAUSE}[y \text{ BECOME BE AT}_{\langle \text{state} \rangle}]]$

$\text{EVENTSTR} = \text{E1} = \text{e1}^* (x, y) : \text{process } (+\text{Manner})$

$\text{E2} = \text{e2}^* (x, y) : \text{state}$

b. 歩き疲れる : $[x \text{ ACT}_{\langle \text{MANNER} \rangle}] \text{CAUSE} [x \text{ BECOME BE AT}_{\langle \text{state} \rangle}]$

$\text{EVENTSTR} = \text{E1} = \text{e1}^* (x) : \text{process } (+\text{Manner})$

$\text{E2} = \text{e2}^* (x) : \text{state}$

c. 駆け上がる、流れ落ちる、呼びまわる :

$[x \text{ MOVE}_{\langle \text{MANNER} \rangle} [\text{path } z]]]$

$\text{EVENTSTR} = \text{E1} = \text{e1}^* (x) : \text{process } (+\text{Manner})$

$\text{E2} = \text{e2}^* (x) : \text{state}$

(42) a の複合動詞は起因事象と結果事象を含む使役事象であり、主体がある特定の手

段で客体に働きかけ、その客体を変化させるという意味を持っており、単純動詞の「様態・結果」動詞と平行している。例えば、「太郎はガラスを叩き壊す」という文の意味は「太郎はガラスを叩いて、それによって、ガラスを壊す」である。このタイプの複合動詞は様態も変化結果も指定され、両方とも焦点になると考えられる。

(42) b のタイプの語彙的複合動詞は他には「待ちくたびれる、読み疲れる、遊び疲れる」などがある。いずれの複合動詞も起因事象と結果事象を含んでいるが、主体自身が行う行為によって主体自身の変化を引き起こす。例えば、「彼は歩き疲れた」という文の意味は「彼は歩いて、その結果彼は疲れた」である。このタイプの複合動詞も上位事象と下位事象と両方が焦点化されている。

(42) c は移動の様態と経路を一つの複合動詞に融合するタイプである。移動主体はある様態で、ある方向へ移動するという意味である。これも「様態」と「結果」両方が焦点化されている。

「様態＋様態」タイプの語彙的複合動詞は(43)のように、複合動詞全体は上位事象しか持っていない様態動詞になる。唯一の上位事象は無論複合動詞全体が表す事象の焦点になっている。また、(44)のように、「結果＋結果」タイプの複合動詞において、V1 も V2 も結果自動詞の場合、複合動詞全体も変化結果しか指定されていない結果自動詞になる。V1 も V2 も結果他動詞の場合はまれであるが、V1 と V2 が同じ LCS を持つ並列関係複合動詞がある。いずれも結果事象が焦点になっている。

(43) 「様態＋様態」

写し描く : [x MOVE<MANNER>on y]

持ち歩く : [x MOVE<MANNER>on y]

EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process

(44) 「結果＋結果」

折れ曲がる : [y BECOME BE AT<state>]

折り曲げる : [[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

E2=e2* (y) :state

焼け焦げる : [y BECOME BE AT<state>]]

$$\text{EVENTSTR}=\text{E1}=\text{e2}^* (\text{y}) : \text{transition}$$

以上では語彙的複合動詞の各タイプの事象構造を再考察した。では、次に語彙的複合動詞の自他交替について考えてみよう。第3章で論じられたように、語彙的複合動詞は語彙的緊密性があり、全体としては一つの述語であり、意味としても一まとまりの概念を表している。このように、語彙的複合動詞は統語上単一の動詞として振舞うため、単純動詞と同じような事象構造を持っており、自他交替の能力を備えていると考えられる。ここで、単純動詞の自他交替の意味的条件を想起してほしい。その条件とは以下のような二つである。

- (1) 他動詞のほうは起因事象と結果事象という複合事象を持つ動詞である。
- (2) 結果事象が焦点化されている。

以上の二つの条件を満たす場合、他動詞は自他交替を起こすことができる。では、語彙的複合動詞の自他交替の話を戻そう。「様態＋様態」タイプの語彙的複合動詞は起因事象しか持っておらず、「結果＋結果」タイプのほとんど（「折り曲げる」タイプ以外）は結果事象しか持っていないので、自他交替の条件を備えていない。「起因事象＋結果事象」を持つ動詞は「叩き壊す」類と「折り曲げる」類である。そして、「叩き壊す」類は語彙的複合動詞の大多数を占めている⁴¹。このため、「叩き壊す」タイプの複合動詞の自他交替できない原因を究明すれば、ほとんどの複合動詞が自他交替できないという問題は解明できると思われる。では、なぜ「叩き壊す」タイプの語彙的複合動詞は自他交替できないのであろうか。繰り返しになるが、「叩き壊す」の意味構造は以下のようなになる。

(45) [[x ACT<HITTING> on y]CAUSE[y BECOME BE AT<BROKEN>]]

EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner)

E2=e2* (y) :state

(45) のように、「叩き壊す」という複合動詞は「起因事象」＋「結果事象」を持ってお

⁴¹ 第3章では論じたが、「働きかけ+使役変化/移動動詞」タイプの語彙的複合動詞は最も数が多い。

り、そして、起因事象も結果事象も指定されているため、自他交替できない。このように、ほとんどの複合動詞では、V2 の手段・様態が V1 によって指定されているので、結果事象だけが焦点化されることができず、自他交替が成立しないわけである。

以上、単純動詞の自他交替で見た「結果事象の焦点化」というメカニズムは、自他交替できない語彙的複合動詞にも適用できることを示した。

4.4.2 自他交替する語彙的複合動詞

本節は語彙的複合動詞の自他交替する原因を探りたい。まず、自他交替する複合動詞の例を再観察してみよう。自他交替できる複合動詞の例を先行研究や辞書から収集したところ、以下 (46) のような用例が確認できた。

(46) 自他交替できる複合動詞の用例

当てはめる—当てはまる、入れ替える—入れ替わる、打ち上げる—打ち上がる、
覆いかぶせる—覆い被さる、折り重ねる—折り重なる、折り曲げる—折り曲がる、
刻み付ける—刻みつく、切り替える—切り替わる、繰り上げる—繰り上がる、
繰り下げる—繰り下がる、吸いつける—吸いつく、付け加える—付け加わる、
積み上げる—積み上がる、積み重ねる—積み重なる、吊り下げる—吊り下がる、
貼り付ける—貼り付く、巻きつける—巻き付く、引きちぎる—引きちぎれる、
盛り上げる—盛り上がる、巻きつける—巻きつく、織り上げる—織り上がる、
編み上げる—編み上がる、売り切る—売り切れる、煮詰める—煮詰まる...

一体どのような要因により、これらの語彙的複合動詞が自他交替できるのであろう。本稿はこれらの語彙的複合動詞が自他交替できる要因を「結果事象の焦点化」に起因すると主張したいが、それについて議論する前、他の可能性があるかどうか考えてみたい。方法としては、これらの自他交替できる複合動詞の共通点を見つけ、その共通点から自他交替のメカニズムを明らかにする。では、これらの自他交替する語彙的複合動詞における V1、V2 にどのような共通点があるのかを見てみたい。集めた用例を見る限り、二つのことが分かる。

- 1) V2 は使役変化/移動動詞である。

2) V1 に共通点が見られない。

これらの複合動詞において、V2 はすべて使役変化/移動動詞である。もちろん複合動詞が自他交替をなすには、まず V2 は自他交替できる動詞でなければならない。しかし、すべて自他交替できる動詞を V2 とする複合動詞が自他交替できるわけではない。前節で論じたように、複合動詞の大多数を占める「叩き壊す」タイプは自他交替できない。また、V1 になるのは「打つ」「繰る」「持つ」「突く」のような様態他動詞もあれば、「吊る」「貼る」「刻む」といった様態・結果他動詞もあれば、「折る」「切る」など使役変化動詞もある。これらの自他交替できる複合動詞では、V1 に共通しているところはないように思える。

このように、V1 と V2 を個別に考えると、自他交替の分析に決定的となりうる共通点はないようである。そこで、本稿の原点に立ち戻って、問題を考えよう。第二章で論じた事象タイプと語彙的複合動詞の事象構造を想起してほしい。

まず (46) に取り上げられている自他交替できる複合動詞他動詞の語彙化タイプを整理してみよう。

(47) a. 「様態+結果」:

打ち上げる、繰り上げる、繰り下げる、持ち上げる、引きちぎる、
入れ替える、折り重ねる、切り替える、刻み付ける、吸い付ける、
吸い上げる、吊り下げる、貼り付ける、巻き付ける、盛り上げる、
編み上げる、売り切る、煮詰める...

b. 「結果+結果」:

当てはめる、折り曲げる、積み重ねる、付け加える、折り重ねる...

(47) のように、a グループと b グループの複合動詞は異なる語彙化タイプに分類されながら、自他交替できるという点で共通している。小野 (2005) は「意味的に近似している動詞は、統語上も共通している性質を持っている」と述べている。これを翻って考えれば、統語的に近似しているふるまいを行うなら、意味構造も似ているといえるであろう。もしこれらの複合動詞の事象構造が共通しているところがあれば、それが自他交替の原因になると思われる。では、以上の自他交替できる複合動詞の事象構造を見てみよう。

(48) a. 「様態＋結果」:

LCS:[[x ACT<MANNER> on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]

EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner)

E2=e2* (x,y) :state

b. 「結果＋結果」:

LCS:[[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

E2=e2* (y) :state

もし (47) a、b の複合動詞の事象構造が (48) であれば、「様態＋結果」タイプと「結果＋結果」タイプの語彙的複合動詞の事象構造は起因事象と結果事象という使役事象を持っているというところが共通している。しかし、前者は起因事象で様態が指定されているが、後者では起因事象で様態が焦点になっていないというところに根本的な違いがある。では、なぜ見たところでは異なる事象構造を持っている二つのグループの複合動詞は自他交替できるのであろう。以下、もう少し詳しくこの二つのタイプの語彙的複合動詞の自他交替について考察してみよう。まずは「結果＋結果」タイプの複合動詞の自他交替について分析してみたい。(49)～(51)はこのタイプと思われる複合動詞の自他交替の実例である。

(49) a. 箱を積み重ねる (広辞苑)

b. 複数の箱が積み重なっている場合は、まとめて動かすことができる。

(<http://www.forest.impress.co.jp/docs/review/20120306515742.html>)

(50) a. まだ開発途中なので、もう少し機能を付け加えるし、...

b. 機能が新しく付け加わる。(複合動詞用例データベース)

(51) a. 生物でもない砂に、まるで生命がやどっているかのような言葉を当てはめることから...

b. まさに痴女という言葉が当てはまる女優さんです。

(複合動詞用例データベース)

通常、結果動詞は上位事象が指定されていないので、V1にならない。しかし、「積み重

ねる」「付け加える」などの語彙的複合動詞において、V1 は結果動詞でありながら、複合動詞は成立する。これは V1 と V2 の LCS が同じであり、並列関係になるからである。このタイプの語彙的複合動詞の自他交替について、「積み重ねる」を例として説明する。まずは「積む」と「重ねる」は「結果動詞」ということをテストで判断する。

- (52) a. 「変化の否定」：*石を積んだ/重ねたが、石は動かなかった。
 b. 「主語の制限」：太郎は/風は/クレーンで石を積んだ/重ねた。
 c. 結果構文：石を高く積んだ/重ねた。

(52) のテストから分かるように、「積む」「重ねる」は如何なる手段を使っても位置変化を起こせばよい。そして、結果構文にも適合できる。すなわち、「積む」「重ねる」の動作様態が無指定であり、結果が指定されているということになる。そして、辞書で「積む」と「重ねる」の意味を調べてみると、以下のようになる。

- (53) 積む：同質の物をその上その上へとうずたかく重ねおく。
 重ねる：物の上に更に同じような物を載せる。

(広辞苑)

辞書の定義から分かるように、「積む」と「重ねる」の意味は類似している。

以上分析したように、「積む」と「重ねる」は両方とも結果が指定されており、そして意味（結果）が重なっている。「積み重ねる」の事象構造を (54) のように示す⁴²。

- (54) a. 積む：[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT<STACKED>]]
 EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process
 E2=e2* (y) :state
 重ねる：[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT<STACKED>]]
 EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process
 E2=e2* (y) :state

⁴² 「積み重ねる」のような「結果+結果」タイプの並列関係複合動詞については、第 3 章でも論じた。

b. 積み重ねる :

[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT <STACKED>]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

E2=e2* (y) : state

(54) のように、「積む」も「重ねる」も結果だけ指定されている使役変化動詞であり、そして、その「結果」が類似しているのて、同じ LCS を持っている。複合動詞「積み重ねる」では、同じ LCS は一つに統一され、複合動詞全体も結果だけ指定されている使役変化動詞になる。このため、自他交替が可能になると考えられる。

次は「様態+結果」タイプの複合動詞について考える。4.4.1 節で論じたように、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞は基本的に自他交替できない。なぜなら、これらの複合動詞は「起因事象」と「結果事象」を両方指定する事象構造を持っているからである。では、なぜ (47) a に取り上げられている「様態+結果」複合動詞は自他交替できるのであろうか。(47) a の複合動詞はまた V1 の事象タイプによって 2 つのタイプに下位分類できる。

(55) ①「様態+結果」タイプ

(花火を) 打ち上げる、(チャンネルを) 切り替える、繰り上げる、繰り下げる...

②「様態・結果+結果」タイプ :

貼り付ける、巻き付ける、刻み付ける、吊り下げる

編み上げる－編み上がる、売り切る－売り切れる、煮詰める－煮詰まる...

自他交替できないはずのこれらの複合動詞はどういう要因によって自他交替できるようになったのであろう。これらの複合動詞にはどのような共通点があるのであろうか。下記 (56) がこれを解く鍵となりそうである。

(56) a. ボールを打ち上げた。－*ボールが打ち上がった。

b. 花火を打ち上げた。－花火が打ち上がった。

(56) の複合動詞では、同じ「打つ」を V1 に取っているにもかかわらず、自他交替のふりまいが異なる。これはなぜであろうか。影山 (1993) によると、(56) b の「花火を打

ち上げる」において、「打つ」は「勢いよく」といった副詞的な意味合いに転義していると解釈される。すなわち、「打つ」という動詞の語彙的意味が希薄化していると考えられる⁴³。しかし、V1 の語彙的意味の抽象化と自他交替の関係について、影山（1993）は言及していない。「打つ」は本来「上げる」の手段を指定しているが、意味が希薄化したことにより、その手段の指定がなくなると考えられるので、自他交替できると考えられる。

次の「様態・結果＋結果」タイプの語彙的複合動詞も、基本的に自他交替できない。V1 は「様態」と「結果」両方を指定している動詞であるが、Goldberg（1995）の「一義的経路の制約」により、V1 が表す変化結果は V2 と一致しない場合、V1 は「結果」が後退され、「様態」だけを表すことになる。しかし、「編み上げる」などの語彙的複合動詞において、V2 は語彙的複合動詞の意味が希薄化しており、先行研究では「補文関係複合動詞」と呼ばれている。そして、「貼り付ける」「吊り下げる」などの例において、V1 の意味の一部には本来的に V2 の意味（それぞれ「つける」「下げる」）が含まれており、V2 は V1 の意味の複製に過ぎない。ここにも意味の希薄化が起こっていると考えられる。V2 の意味変化と自他交替とどういう関連を持っているのかについては、第 5 章で詳しく議論するが、V2 の意味変化も自他交替と関わることを言っておきたい。

以上の分析から分かるように、(55) の自他交替できる語彙的複合動詞の共通点は複合動詞において、意味変化が起こっているということである。語彙的複合動詞における意味変化と自他交替との関係については、第 5 章でより深く分析するが、ここではこの考えの理論的な可能性を少し論じる。第 3 章で論じた語彙的複合動詞はすべて V1 と V2 が本義が生きている場合である。この場合、ほとんどの語彙的複合動詞は自他交替できない。しかし、V1 あるいは V2 は意味変化が起こる場合、事象構造も変化すると考えられる。事象構造に変化が起こり、自他交替できる事象構造の条件を満たせば、自他交替できるようになると推測できる。つまり、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞は「起因事象」と「結果事象」という使役事象を持っており、そして、「結果事象」が焦点化されるという事象構造を持つようになれば、自他交替が成立する。

以上の大まかな分析に基づき、本節で語彙的複合動詞の自他交替の要因について、以下のような仮説を提案したい。

⁴³ 秋元（2004:6）によると、意味の「希薄化」(bleaching)は「漂白化」とも呼ばれ、意味の弱化または消失をいう。「花火を打ち上げる」における「打つ」は単独動詞としての意味を保持していないので、意味が希薄化していると思われる。これについて、第 5 章で詳しく論じる。

(57) 「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞の自他交替についての仮説：

V1 あるいは V2 の意味変化により、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞は「結果事象」が焦点化されるように事象構造が変化した場合、自他交替が可能になる。

4.5 まとめ

本章は語彙的複合動詞の自他交替を単純動詞と同じメカニズムで説明できることを示した。すなわち、複合事象（起因事象と結果事象）を持つ使役変化動詞は結果事象が焦点化されるかどうかにより、自他交替のふるまいが異なる。

本稿では、単純動詞の自他交替について、「結果事象」に注目して、自他交替のメカニズムを「結果事象の焦点化」と再定義した。単純動詞の場合、「結果他動詞」は結果事象が焦点化されるので、自他交替が可能になる。そして、第 3 章で述べたように、日本語では「結果動詞」は数が最も多いので、自他交替できる動詞も多い。単純動詞の事象構造と自他交替について、表 4-1 のようにまとめる。

語彙的複合動詞の場合、一番基本的な語彙化タイプは「様態+結果」タイプであり、「様態」と「結果」両方が焦点化されている。従って、ほとんどの語彙的複合動詞は自他交替できない。少数ながら、「積み重ねる」のような「結果他動詞」は単純動詞と同じように自他交替できる。また、外見上「様態+結果」タイプであるものの、「打ち上げる」、「吊り下げる」、「編み上げる」などのような自他交替できる複合動詞は V1 あるいは V2 意味変化によって、これらの語彙的複合動詞の事象構造が変化することに起因する仮説している。しかし、その事象構造はまだ説明されていない。これについては第 5 章に譲る。第 5 章で語彙的複合動詞における意味変化と自他交替について詳述する。語彙的複合動詞の事象構造と自他交替について、表 4-2 のようにまとめる。

表 4-1：他動詞の事象構造と自他交替

事象 タイプ	語例	事象構造	自他交替
様態	叩く、蹴る、 引く、殴る	LCS: [x ACT<MANNER>on y] EVENTSTR=E1=e* (x,y) :process	×
結果	潰す、壊す、 開ける、上げる、 倒す	LCS:[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT z] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process E2=e2* (y) :state	○
様態・ 結果	刻む、巻く、 貼る、吊る	LCS: [x ACT<MANNER> on y]CAUSE[y BECOME BEAT z] EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process E2=e2* (x,y) :state	×

表 4-2：語彙的複合動詞の他動詞の事象構造と自他交替

事象タイプ	語例	事象構造	自他交替
様態	写し描く	LCS: [x ACT<MANNER>on y] EVENTSTR=E1=e* (x,y) :process	×
結果	積み重ねる	LCS: [[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT z]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process E2=e2* (y) :state	○
様態+結果	叩き壊す	[[x ACT<MANNER> on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (x,y) :state	×
	打ち上げる 吊り下げる 編み上げる	?	○

本章は語彙的複合動詞における意味変化と自他交替と関連していると予測している。語彙的複合動詞の構成要素の意味変化について、これまで、概ね「接頭辞」、「接尾辞」として研究されてきた。しかし、もし語彙的複合動詞において、V1 あるいは V2 は接辞化したと認めたら、複合他動詞と自動詞に自他交替の問題は存在しないということになる。なぜなら、接辞は自動詞とも他動詞とも結合することができるからである。このため、自他交替する複合動詞における V1 あるいは V2 は語彙的意味が希薄化しているが、接辞になっていないという真ん中の段階にあると論じなければならない。V1、V2 の意味変化については、第 5 章で詳しく論じる。

第 5 章 語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化と自他交替

5.1 はじめに

第 3 章では V1 と V2 の本義が生きている際の語彙的複合動詞における事象構造を提示し、第 4 章でそのような事象構造を持つ語彙的複合動詞の自他交替について分析した。そして、第 4 章の最後で、語彙的複合動詞の自他交替は意味変化と関わるということを仮説として提唱した。本章では、語彙的複合動詞における意味変化について考察し、意味変化が起こった場合の事象構造を提示する。その上で、語彙的複合動詞の自他交替について分析したい。

以下、5.2 節では、語彙的複合動詞における意味変化についての先行研究を概観し、5.3 節では、文法化の理論を取り上げ、語彙的複合動詞における構成要素の意味変化には文法化と同じ特徴が見られることについて論じる。5.4 節と 5.5 節では、文法化の理論をもとに、V1、V2 の意味変化について考察した上で、意味変化が起こった場合の複合動詞の事象構造を提示し、この事象構造から複合動詞の自他交替について分析する。5.6 節で本章のまとめを行う。

5.2 語彙的複合動詞における意味変化に関する先行研究

従来、複合動詞における構成要素の意味変化をめぐる様々に議論されてきた。自他交替現象と関連させ、本節では、意味変化の判断基準と意味変化の段階性という二点に注目しながら、先行研究を概観する。

5.2.1 先行研究の概観

国語学において、複合動詞を V1、V2 は本来の意味が保持されているかどうかによって分類する研究がよくなされている。以下では、まず代表的な研究である寺村（1984）、山本（1984）、斎藤（1989）の分類を概観する。

寺村（1984）は、複合動詞の構成要素としての動詞は本来の意味が保持されているを自立語（V）とし、保持されていないものを付属語（v）とするという観点から、複合動詞を（1）のように 4 つに分類している。

(1) 寺村 (1984) の分類

a.V-V : 呼び入レル、握リツブス、殴リ殺ス、ネジ伏セル、...

b.V-v : 降り始メル、呼びカケル、思イ切ル、泣キ出ス、...

c.v-V : サシ出ス、振り向ク、打ち樹テル、引き返ス、...

d.v-v : 払イ下ゲル、(話ヲ) 切り上ゲル、(仲ヲ) 取り持ツ、(芸ヲ) 仕込ム、...

寺村 (1984:167)

このような自立語と付属語に基づいた分類は、その後の複合動詞の研究の「ひとつの出発点」と位置づけられている⁴⁴。しかしながら、寺村 (1969,1984) では複合動詞における「自立語」か「付属語」かについての明確な判断基準が提出されていない。

次は山本 (1984) の分類について見てみたい。山本の分類は寺村 (1984) とは異なり、明確な分類基準に基づいて行われている。山本は複合動詞の格成分が V1 または V2 とどのような対応をみせるかに着目して複合動詞を以下 (2) の 4 類型に分類している。

(2) I 類 : 複合動詞の格成分が、前項動詞と後項動詞のそれぞれに対応関係にあるもの。

例 : 泣き叫ぶ、光り輝く、降り積もる、刺し通す、売り歩く、踏み荒らす...

II 類 : 複合動詞の格成分が前項動詞とは対応を示すが、後項動詞とは対応しないもの。

例 : 静まり返る、沸き立つ、降り出す、読み始める、食べ過ぎる、書き終える...

III 類 : 複合動詞の格成分が後項動詞とは対応するが、前項動詞とは対応しないもの。

例 : 打ち破る、取り澄ます、差し込む、引き起こす、振り仰ぐ...

IV 類 : 複合動詞の格成分が前項動詞とも後項動詞とも対応しないもの。

例 : 打ち切る、打ち解ける、取り乱す、取り締まる、繰り返す...

山本 (1984:45-46)

山本 (1984) 自身が認めるとおり、この分類は結果的に寺村 (1969,1984) の分類とあまり変わらないが、分類基準が明示されている点が評価できる。

斎藤 (1989) は山本 (1984) の分類に基づいて、V1、V2 が実質的な意味を保持しているかどうかという観点から、複合動詞の次の (3) のように 4 種類に分類している。

⁴⁴ 斎藤・石井 (1997:300-308) を参照されたい。

(3) a. V1,V2 双方が実質的な意味を保持しているもの

例：木を切り倒した→木を [○切っ/○倒し] た

b. V1 のみが実質的な意味を保持しているもの

例：本を読み返した→本を [○読ん/*返し] た

c. V2 のみが実質的な意味を保持しているもの

例：人を公平に取り扱う→人を公平に [*取る/○扱う]

d. 意味的に V1, V2 に分解できないもの

例：彼女は落ち着かなかった→彼女は [*落ち/*着か] なかった

齋藤 (1989:63-64)

齋藤 (1989) は山本の分類とほぼ同じであるが、複合動詞の構成要素の格支配能力によってその動詞は実質的な意味を保持しているかどうかを判断しており、明確に複合動詞における意味変化に触れている。

山本 (1984) 及び齋藤 (1989) は動詞の格支配能力によって複合動詞を分類するのに対して、姫野 (1999) は複合動詞のそれぞれの動詞の意味構成を文に言い換えることによって複合動詞を分類し、構成要素が単独で使われる場合の意味がどのような形で複合動詞の中に生かされているのかについて考察している。姫野 (1999) は語彙的複合動詞を次のように分類している。

(4) ①前項、後項の二つの動詞を使って言い換えられる。すなわち本義がそのまま生きている。

流れ着く→流れて (流れてから) 着く

縫いつける→縫って (縫うことにより) つける

遊び暮らす→遊んで (遊びながら) 暮らす

②後項動詞を他の言い方にしなければならない

投げ込む→投げて、中に入れる

投げつける→投げて、対象物に強く当てる

震え上がる→すっかり震える

③前項動詞を他の言い方にしなければならない

打ち切る→継続状況を途中で切る (=終了する)

引き継ぐ→あとを続いて継ぐ

さしつける→押してつける

④二つの動詞とも他の言い方にしなければならない

落ち着く 取りなす 騒る（しつける）

姫野（1999:20-21）

姫野（1999）はこのように、「テ形」接続との言い換えによって複合動詞における構成要素の本義が生きているかどうかということを判断している。

以上の先行研究で提出されている「格支配能力」及び「テ形」接続との言い換えによって複合動詞における意味変化を判断するという方法は広く認められている。本稿でもこの二つの判断テストを利用する。しかし、後述するように、これだけでは、語彙的意味が希薄化しているかいないかという二分法で判断されており、意味変化における段階性が見られない。そして、これらの先行研究ではただ意味変化が起こっているかどうかにより、複合動詞を分類しているだけであり、意味変化についての詳しい分析になっていない。

次に複合動詞において起こる意味変化とその段階性について見てみたい。複合動詞における意味変化についてより詳細に議論しているのは斎藤（1992）、森田（1994）、田辺（1996）などがある。以下、これらの研究を概観する。

斎藤（1992）は複合動詞の V2 の接辞化⁴⁵を意味の抽象化の度合いという観点から論じている。まず、斎藤は複合動詞における V2 の接辞性について考える場合、統辞論的視点と語彙論的視点という二つの視点があると指摘している。統辞論的な視点は、例えば、「木を切り損なう」という場合、後項「損なう」は、「木を切る」全体を包摂する、つまり、全体の意味解釈としては、＜木を切ることを損なう（＝失敗する）＞と捉えることができる。このことによって「損なう」の接辞化を認定する（斎藤 1992:192）。この視点による接辞の方が語彙論的視点による接辞性より高いという。

語彙論的視点は接辞性が低い複合動詞、主として方向性に関する複合動詞の接辞化を判断するために斎藤が提出したものである。斎藤は語彙論的視点によって後項の接辞性の判定を、以下の二つに基づいて行くと述べている。

⁴⁵ 斎藤(1992)では、「接辞化」を「補助動詞化」と同様に扱っている。複合動詞における V2 の意味が抽象化していくことを指す。

- (5) a. 前項の意味との関係、
b. 単独用法の意味との関係

そして、接辞性の度合いについては、「前項の意味との重なりが多いほど、単独用法の意味との重なりが少ないほど、接辞性が高い」と判定される（斎藤 1992:193）。例えば、V2 は方向性を表す場合、「見上げる」「盛り上がる」などがあるが、両方とも V2 は単純動詞の意味を失っている。しかし、「盛り上がる」では、V2 は V1 の意味との重なりがあるのに対して、「見上げる」では、V2 は V1 との意味の重なりがない。従って、「盛り上がる」における「上がる」の接辞性がより高いと判定できると論じられている。斎藤はこれを「明示化」と「確認・強調」とまとめている。

- (6) a. 確認・強調：前項の表す動作そのものにすでに含まれている一定の方向性を後項が改めて明確化する場合。接辞性が b より高い。

例：盛り上がる、染みとおる

- b. 明示化：V1 の表す動作そのものには明確に含まれていない一定の方向性を V2 がはっきりと指示する場合。

例：「見上げる」「飛びかかる」「押し込める」

斎藤（1992:327 をもとに作成）

斎藤は以下の二点で大変示唆に富んでいる。一つは V2 の意味の抽象化に程度性があると指摘している点であり、もう一つは接辞性の低い V2 の意味の抽象化の判断基準を提示する点である。本稿は V2 の意味の抽象化について、斎藤に負うところが多い。しかし、斎藤は V2 の抽象化の程度性について論じているが、V1 のそれについて触れていない。

一方、森田（1994）は V1 と V2 の語義結合の度合いから複合動詞を次の 5 つの段階に区分している。

- (7) 第一段階：並列段階

二つの動詞が結びついて生ずる意味関係として最も単純なものは、二つの動詞が対等の関係で並列する「してーする」形式である。この段階ではテ形によるパラフレーズは基本的に問題ない。

例：切り倒す－切って倒す 叩き壊す－叩いて壊す

第二段階：主述・補足の関係

V1、V2 がそれぞれ独立した意味を持ち、それが並列関係でなく、次のように、一歩進んで、補足の関係を構成することがある。

例：響き渡る－響くことが渡る

食べ慣れる－食べることになれる

第三段階：具体的な意味から抽象的な意味へ

複合する二つの動詞のどちらか一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられる場合がある。この場合、複合動詞全体の意味も変化する。

例：切り落とす－泣き落とす（転義的） 投げ上げる－こみ上げる

第四段階：造語成分への移行

それ自体では単独で単純動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質的な意味をまだ保持している場合もある。

例：考えあぐねる、塗りたくる、言いそびれる

第五段階 実質的な意味から形式的意味へ

一方の動詞の抽象化がさらに進むと、単純動詞の用法はなくなり、実質的な意味を失い、接辞のように形式化されてしまう。

例：掻き混ぜる－掻き曇る（急に曇る） 打ち砕く－打ち続く（長く続く）

突き立てる－喚き立てる（ひどく喚く） 突き飛ばす－叱り飛ばす（ひどく叱る）

（森田 1994:289-294）

森田の分類に、複合動詞の V1,V2 の意味の抽象化の段階性が見られる。すなわち、動詞の本義から抽象的な意味へ変化し、更に進むと、形式的な意味へ展開していくという段階性である。しかし、森田はただ複合動詞における意味変化の段階性を大まかにまとめているだけであり、どういう基準によってそのような段階性を分けるのかについて論じていない。

上記のような森田の分類に対し、田辺（1996）は複合動詞の V2 の意味の抽象化を文法化という角度から考察している。複合動詞の構成する動詞の辞書的意味が複合動詞形成後も、どの程度生きているかによって、大きく以下（8）のように三種類に分類している。

（8） a. 二つの動詞のそれぞれの辞書的な意味が生かされているもの－意義素融合型

例：「拾い上げる」「飛び出す」「叩き壊す」

b. 前項動詞が、接頭辞化しているもの

例：「取り決める」「突っ込む」「込みあげる」

c. 後項動詞が接辞化しているもの－文法化型

例：「読み切る」「作り上げる」

田辺（1996:2）

また、田辺は後項動詞の文法化の段階についても詳しく論じている。例えば、「～こむ」における文法化の段階を以下（9）のように三つに分けて論じている。

（9） 第一段階 「ボールを投げ込む」

{動作性の前項動詞＋（なかへ）はいる/入れるという意味}

第二段階 「このバットは、よく打ち込んでいる。」

{動作性の前項動詞＋程度や密度が高いという意味の補助動詞化}

第三段階 「じっと考え込んでいた。」

{非動作動詞＋状況の程度の強さを表す補助動詞化}

田辺（1996:5）

この三段階について、田辺（1996:5）は以下のように分析している。第一段階では、「込む」本来の意味「詰まって入り組む」が生きている。第二段階で、文法化が起こり、「込む」の意味が漂白化し、辞書的意味を失い、前項の動作性動詞にその程度や密度の高さのみを付け加える補助動詞へと展開する。第三段階で、広範囲の動詞に適用され、非動作動詞に結合し、程度の高さ・密度の濃さを強調する効果を出している。

田辺（1996）は文法化の角度から複合動詞における V2 の意味変化を段階に分けて詳しく分析している点は大変示唆的である。本章はこれを参考にしながら、V2 のみならず、

V1 の意味変化についても考察していく。

以上の先行研究以外に、Ono (1992)、大堀 (2002)、青木 (2004)、廣瀬 (2006) などは複合動詞の補助動詞化を文法化現象として分析しているが、いずれも「テ形」動詞か統語的複合動詞を対象としており、語彙的複合動詞における意味変化を詳細に論じていない。また、言語学では、意味変化は補文関係複合動詞と統語的複合動詞の中で論じられているが、V1 の意味変化はあまり研究されていない。なお、補文関係複合動詞に関する先行研究は 5.5 節で紹介する。

5.2.2 先行研究のまとめ

以上見たように、先行研究では、複合動詞において、V1 と V2 の意味がよく抽象化していることは共通の認識になっている。そして、V2 の意味変化に程度性、段階性があるということも言及されている。また、複合動詞における意味変化の判断基準も提出されている。山本 (1984)、斎藤 (1989) などは V1、V2 が格支配能力を有しているかどうかというテスト、姫野 (1999) はテ形接続との言い換えというテストで複合動詞の構成要素の意味変化を判断している。斎藤 (1999) は接辞性の低い V2 を前項動詞の意味との関係、単独動詞としての意味との関係によってその接辞性を判定している。

しかし、先行研究では、V1 の意味の抽象化についての論述は少ない。そして、先行研究では一律に抽象化しているかしていないかというだけであり、V1 の意味の抽象化の段階性について全く触れていない。一方、V2 の意味の希薄化についての論述は多いが、ほとんどの先行研究は接辞性が高い場合について論じているものであり、意味変化の最初の段階はあまり重要視されていない。また、自他交替と関連させて考える場合、意味変化が起こった際、複合動詞の事象構造はどうなるかということが重要であるが、意味変化による事象構造の変化について全く研究されていない。

第 4 章の最後で論じたように、「花火を打ち上げる」において、「打つ」は語彙的意味が抽象化しているが、接頭辞になっていない。これは語彙的複合動詞における V1 の意味変化に段階性があることを意味する。従って、本稿は語彙的複合動詞における意味変化は連続的なものであり、段階性があり、異なる段階にある語彙的複合動詞は異なる事象構造を持つと考えている。

変化の連続性は文法化の研究でよく取り上げられている課題である。Traugott (2003:6) に指摘されているように、形式はある範疇から別の範疇へ突然変わるのではなく、各段階

を経て次第に変わっていく。このため、本稿は文法化理論を取り入れ、語彙的複合動詞における V1、V2 の意味変化の段階性について分析したい。なお、本章は文法化について深く分析せず、語彙的意味が希薄化することとそれによる語彙的複合動詞の事象構造の変化に重点を置くことをお断りしておく。

5.3 語彙的複合動詞における意味変化と文法化

本節では、語彙的複合動詞における意味変化について詳しく考察する。

まず 5.3.1 節で、語彙的複合動詞における意味変化と関連させ、文法化について紹介する。文法化の理論を広範囲にわたって吟味するのは本稿の範囲外であるが、複合動詞における意味変化を理解するのに役立つ要素をいくつか挙げる。

5.3.1 「文法化」理論について

まずは「文法化」の理論を簡単に概観する。Hopper & Traugott (2003) は「文法化」について、以下のように定義している。

Grammaticalization is usually thought of as that subset of linguistic changes whereby a lexical item or construction in certain uses takes on grammatical characteristics, or through which a grammatical item becomes more grammatical.

Hopper & Traugott (2003:2)

「文法化」とは、語彙項目や文構造が、ある言語学的文脈において文法機能を果たすようになる過程であり、いったん文法化されると、さらに新たな文法機能が発展し続ける。

日野訳 (2003:2)

文法化の場合には、語彙の持つ形態、音韻、意味、統語といったさまざまな側面が総合的に変化し、統語上の独立性や語彙的意味の消失、さらには、音声的摩滅なども通常伴う。Hopper and Traugott (2003)、Heine et al. (1991) によると、文法化には以下のような特徴を持っている。

(10) 文法化の特徴：

a. 意味の一般化、希薄化：

具体的な内容を持つ語彙的意味が抽象化、一般化していく。

b. 文法機能の一般化：

文法化が進むにつれて、その選択制限を失い始め、一般化されるにつれて、より広い文脈で使われるようになる

c. 脱範疇化：

動詞や名詞など実質的な意味をもつ内容語（content word）から、助詞、接頭辞、接尾辞のような機能語（function word）へと変化していく。音韻の縮約がともなうことがある。

以上の文法化過程における音声的、形態統語的、意味的な変化は徐々なものであり、連続的なものである。A から突然 B へ変化するのではなく、ある過渡的段階を経て、ある経路にしたがって次第に変わっていく。そして、Hopper and Traugott (2003) は、文法化が再分析 (reanalysis) と類推 (analogy) の繰り返し適用により起こると述べ、「再分析」と「類推」により、文法化の段階分けをしている。「再分析」と「類推」について、Hopper and Traugott は次のように述べている。

...we consider two general mechanisms by which grammaticalization takes place: reanalysis primarily, and analogy secondarily.

Reanalysis: The grammatical syntactic and morphological and semantic properties of forms are modified. These modifications comprise changes in interpretation, such as syntactic bracketing and meaning, but not at first in form. Reanalysis is the most important mechanism for grammaticalization, as for all change, because it is a prerequisite for the implementation of the change through analogy.

Analogy: Modifies surface manifestations and in itself does not effect rule change, although it does effect rule spread either within the linguistic system itself or within the community.

Hopper and Traugott (2003:39)

このように、Hopper and Traugott は文法化のメカニズムは「再分析」と「類推」であると指摘し、再分析を第一に、類推を第二に考えている。再分析は意味や形態の深層表現を変化させ、文法的規則の変化を促す。ただし、表面上の形式が直接変化しない。一方、類推とは、再分析によって引き起こされた新たな文法規則が拡大して適用されるということである。類推は「表層の構造」を変化させる。「再分析」と「類推」による文法化の発展について、Hopper and Traugott は「be going to」の例を用いて説明している。

				Syntagmatic axis	
				Mechanism:reanalysis	
Stage I	be	going	[to visit Bill]		
	PROG	Vdir	[Purp.clause]		
Stage II	[be going to]		visit Bill		
(by reanalysis)	TNS		Vact		
Stage III	[be going to]		like Bill		
(by analogy)	TNS		V		
Stage IV	[gonna] like/ visit Bill				
(by reanalysis)					
					Paradigmatic axis
					Mechanism:analogy
(PROG:進行形 Vdir:方向性の動詞 Purp.clause:目的節					
TNS : テンス Vact : 動作性の動詞 V : 動詞)					

図 5-1 : 助動詞 be going to の発展 Hopper and Traugott (2003:69)

図 5-1 に示されているように、Hopper and Traugott は[be going to]の文法化の段階を四つに分けている。

第一段階では、文は方向を表す動詞と目的を表す節で構成されており、[go]は本来の意

味「行く」を保持している。第二段階では、[be]と[going]と[to]を一つの括弧でくくり、未来を表す助動詞と行為を表す動詞の組み合わせとして再分析されている。この変化は、方向を表す動詞から時間を表す助動詞へと意味変化しているが、表面上は見えない。第三段階では、類推により、[be going to]は動作動詞だけでなく、より広く一般動詞を取るようになっていく。これによって、[be going to]は未来を表す表現という文法的機能が一般化されている。第四段階は音声を再分析することによって変化したものである。

Hopper and Traugott は文法化の連続性を通時的に論じているが、ある段階ではお互いに共存する異形が存在することから、共時的な面にも関係があると述べている。Hopper and Traugott によると、文法化において、古い形式と意味が長年にわたって持続することがあり、新しい形式と意味と共存したり相互に作用したりするという重層化 (layering) の特徴がある。重層化は、同じ領域で起こる形式の文法化が連続的に起こった共時的結果である (日野訳 2003 : 149)。このように、通時的な文法化過程は共時的にも現れているので、本章は Hopper and Traugott のこの段階の分け方をもとに、複合動詞における意味変化を共時的に考察する。

なお、文法化理論では、本来の具体的な内容を持つ語彙的意味が抽象化、一般化していく意味変化は「語彙的意味の希薄化」と呼ばれているので (辻編 2002:46)、以下では、意味変化、意味の抽象化を統一して「語彙的意味の希薄化」と呼ぶことにする。

本稿は文法化そのものについて考察することが目的ではないので、文法化についてこれ以上深く論じない。次節から文法化の理論を援用しながら、語彙的複合動詞における意味変化を見てみる。

5.3.2 語彙的複合動詞に見られる文法化

この節では、まず語彙的複合動詞に見られる文法化について分析し、文法化理論を用いて考察を進める妥当性を論じる。

本稿で扱う語彙的複合動詞の文法化についてあまり研究されていないようである。しかし、語彙的複合動詞も文法化の傾向において例外ではない。複合動詞は以下の三点で文法化の特徴を持っていると考えられる。

- (11) a. V1、V2 の語彙的意味の希薄化
- b. V1、V2 の結合制限の弱化、消失

c. V1、V2 の脱範疇化

(11) a 語彙的意味の希薄化について説明する。前節で述べられているように、文法化過程において、具体的な内容を持つ語彙的意味が抽象化、一般化していく。意味変化は文法化の初期の段階に起こり、文法化において中心的な役割を果たし、それが引き金となって音韻的、統語的な変化が起こると Heine&Kuteva (2002) が主張している。

複合動詞では、構成要素が様々な意味変化が観察されている。『複合動詞レキシコン』では約 2700 語の語彙的複合動詞が収録されているが、その中で V1 が接頭辞化したとされているものは 166 語、V2 が補助動詞化したとされているものは 830 語である。このように、語彙的複合動詞において、V1 あるいは V2 が単独動詞としての意味が希薄化することがよくある。

(11) b.V1、V2 の結合制限の弱化、消失についてであるが、Hopper and Traugott は文法化の特徴の一つに文法機能の一般化を挙げている。文法化が進むにつれて、選択制限を失い始め、文法機能が一般化されるにつれて、より広い文脈で使われるようになった。

複合動詞の場合、意味変化が進むにつれて、V1 或いは V2 の選択制限が緩くなり、消失したりする。例えば、第 3 章での分析によると、V1 になる「打つ」は本義が生きている場合、「働きかけ動詞」(様態他動詞)であるので、使役変化/移動動詞が V2 に来るという選択制限がある。しかし、「打つ」の語彙的意味が希薄化し、「打ち重なる」が成立するように、「重なる」という非動作性動詞とも結合できるようになり、その選択制限は消失している。

Hopper and Traugott によると、(11) c の脱範疇化とは、ある形式が語彙形成から文法形式に文法化するとき、名詞や動詞のそれぞれの持っている形態的、統語的特性を失って、前置詞や接続詞などの特性を逆に持っていくことである。

複合動詞において、V1、V2 は語彙的意味が希薄化しており、もとの統語的特性を失い、接辞化していく。斎藤 (1992) に論じられている音便化があるように、音韻的縮約も起こる。例えば、「取り〜」「差し〜」「打ち〜」などは意味変化した際、V1 は具体的な動作を表さず、V2 の意味を「強調」する機能を果たすようになり、接辞化していく。また、「引っつかむ」「引っ返す」などのように、「引く」は本来の動作の意味から強調機能を果たすように変化していくに伴って、音韻的縮約も起こっている。

以上のように、語彙的複合動詞も文法化の特徴が見られるので、文法化の理論を取り入

れ、複合動詞における意味変化を詳細に分析することが可能になると考えられる。

5.3.3 語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化の段階分け

本稿では Hopper and Traugott (2003) の「再分析」「類推」による文法化の段階の分け方を参考に、語彙的複合動詞における V1、V2 の語彙的意味の希薄化を考察する。

語彙的複合動詞の語彙的意味の希薄化における「再分析」と「類推」を以下のように捉える。再分析段階では、語彙的複合動詞における V1 あるいは V2 は意味が希薄化し、意味的な再分析が起こっているが、語彙的複合動詞の基本的な構造は保持されており、結合する動詞に選択制限を課す。類推段階では、V1 あるいは V2 動作としての本来の意味は完全に喪失しており、選択制限が消失しており、広範囲の動詞と結合できるようになっている。

このため、語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化を考察する際、まずは意味変化の有無について判断し、その上で選択制限を考察し、「再分析」段階か「類推」段階かを分ける。この考えに基づいて、本稿は語彙的複合動詞における V1、V2 の意味変化を段階分けするために、以下のような判断テストを設けた。

1) V1 の語彙的意味の希薄化について

①意味変化の有無

- a. 格支配 (無) : N を V1V2—*N を V1
- b. テ形連接との言い換え (不可) : N を V1V2—*N を V1 で V2
→V1 は語彙的意味が希薄化

②選択制限

- a. 選択制限が課される場合、「再分析」の段階にある。
- b. 選択制限がない場合、「類推」の段階にある

1) の判断テストについて、下記のように説明する。

①複合動詞における構成要素としての動詞に意味変化が起こっているかどうかについて、二つのテストを設定している。一つは「テ形」動詞との言い換えであり、もう一つは名詞に格支配能力を有しているかどうかというテストである。これは先行研究でもよく用いられるテストである (斎藤 1989、森田 1994 など)。V1 の場合、「格支配能力」テスト

と「テ形接続との言い換え」テストとはほぼ同じ結果をもたらす⁴⁶が、確認のため、二つ設定している。なお、その判断は日本人母語話者 15 人にアンケート調査を行い、大多数を占める答えを正解とみなした。

「テ形」と言い換えられない、そして、格支配能力を失った場合、V1 の語彙的意味が確実に希薄化していると判断できる。(12) b はその一例である。これに対して、(12) a では、「テ形」動詞とも言い換えられれば、格支配能力も有しているため、本義が生きていると認定できる。

(12) a. 栗を打ち落とす

栗を打って落とす (○) 栗を打つ (○) 栗を落とす (○)

→「栗を打ち落とす」における「打つ」は本義が生きている。

b. 花火を打ち上げる

花火を打って上げる (×) 花火を打つ (×) 花火を上げる (○)

→「花火を打ち上げる」における「打つ」は語彙的意味が希薄化している。

②選択制限について、以下のように説明する。「再分析」の段階では、意味変化が起こっているが、表面上はまだ見られない。複合動詞の基本的な構造は保持されているので、選択制限が課される。類推行為により、表面の形式も変化し、広範囲の動詞タイプと結合できるようになる。

第 3 章の議論によると、「打つ」という「働きかけ動詞 (様態他動詞)」は「使役変化/移動動詞 (結果他動詞)」と結合し、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞になる。再分析の段階では、この選択制限が守られているが、類推段階では、語彙的複合動詞の表面の形式が崩れ、非動作性の動詞も V2 にくる。例えば、(13) a、b では、「テ形動詞との言い換え」及び「格支配能力」テストで二つの複合動詞において、どちらも「打つ」は語彙的意味が希薄化していると判断できた。しかし、(13) a では、「打つ」という様態動詞は使役変化・移動動詞と結合し、「様態+結果」という複合動詞の表面の形式は保持されているため、「再分析」段階であると判断する。一方、(13) b では、「打つ」は V2 への選択制限が消失しており、「類推」段階であると判断する。

⁴⁶ V2 の場合、「格支配能力」テストと「テ形接続との言い換え」テストは異なる。これについては後述する。

(13) ①a. 太郎は花火を打ち上げる

－花火を打ってあげる (×) 花火を打つ (×) 花火を上げる (○)

→「打つ」：語彙的意味が希薄化している

b. 葉が打ち重なる

－葉が打って重なる (×) 葉が打つ (×) 葉が重なる (○)

→「打つ」：語彙的意味が希薄化している

②a. 「打ち上げる」：

「様態＋結果」－表面の形式は保持されている→「再分析」段階

b. 「打ち重なる」：

「打つ」＋非動作性動詞－表面の形式は崩れている→「類推」段階

次に V2 の意味変化の判断テストについて考えてみよう。

2) V2 の語彙的意味の希薄化について

①「再分析」段階について

a. 格支配テスト

N を V1V2－*N を V2→V2 は語彙的意味が希薄化

－N を V2 (○) →V2 は希薄化の可能性がある

b. テ形連接との言い換え

N を V1V2－*N を V1 て V2 →V2 は語彙的意味が希薄化

c. 前項動詞の意味との関係：V1 との意味の重なり

N を V1V2－○N を V1 ○N を V2

V1 との意味の重なりがある場合 →V2 は希薄化の可能性がある

②「類推」段階について

d. 選択制限：

選択制限が課される場合、「再分析」の段階にある。

選択制限がない場合、「類推」の段階にある

V2 の意味変化についての判断テストは V1 よりやや複雑である。「再分析」段階についての判断は、「格支配テスト」「テ形接続との言い換え」と「選択制限」の他に、「V1 との意味の重なり」というテストを加えた。これについて、少し説明する。

①a.V2 は名詞に格支配能力を失う場合、語彙的意味が希薄化していると判断できる。例えば、例 (14) では、「積み上げる」と「編み上げる」という二つの例では、「上げる」は名詞に格支配能力を失っているため、語彙的意味が希薄化している。これは上述した V1 と同じである。

(14) a. レンガを積み上げる－レンガを積む (○) レンガを上げる (×)

→「上げる」：語彙的意味が希薄化している。

b. セーターを編み上げる－セーターを編む (○) セーターを上げる (×)

→「上げる」：語彙的意味が希薄化している。

しかし、V1 と違って、V2 は名詞に格支配能力を保持している場合でも、語彙的意味が希薄化していると認められることがある。先述したように、ほとんどの先行研究では、格支配能力を有している場合、本義が生きていると認めている。しかし、斎藤 (1992) に指摘されているように、V2 は V1 の表す動作そのものにすでに含まれている一定の方向性を改めて明確にする場合、V2 は実質的な意味を持っているが、実質的な機能を持っていないため、接辞化している。本稿では、斎藤 (1992) の論述を参考にし、格支配能力を保持している場合でも、深層表現に変化が起こっており、「再分析」が起こっていることを主張したい。これについては「吊り下げる」を例として論じる。

(15) 風鈴を天井に吊り下げる

→風鈴を天井に吊る (○) 風鈴を天井に下げる (○)

(15) から分かるように、「吊り下げる」では、「吊る」も「下げる」も「風鈴」に格支配能力を持っている。しかし、(16) のように、「吊り下げる」は「テ形接続」とは言い換えられない。

(16) 風鈴を天井に吊り下げる－*風鈴を天井に吊って下げる

「吊り下げる」において、「吊る」は「様態・結果動詞」であり、「下げる」は結果動詞である。第3章で少し触れたように、「様態・結果+結果」タイプの語彙的複合動詞は通常、「一義的経路の制約」に違反しないように、V1の結果は後退され、様態だけを表すようになっており、V2の手段を修飾する。例えば、「巻き入れる」「巻き上げる」などでは、(17)のように、「テ形接続」と言い換えられる。

(17) 巻き入れる－巻いて入れる 巻き上げる－巻いて上げる

これに対して、「吊り下げる」は「テ形接続」と言い換えられないように、「吊る」はすでに「下げる」の手段ではなくなっている。これとは逆に、「吊る」は意味的な中心であり、「下げる」は「吊る」の意味の一部の複製に過ぎないと考えられる。この点は判断テストc「V1との意味の重なり」により説明できる。このテストは斎藤（1992）を参考にしている。斎藤（1992）では、V2はV1との意味の重なりが多いほど、接辞性が高いと述べている。「吊り下げる」では、「下げる」は「吊る」と意味の重なりがあり、「吊る」にすでに含まれている「結果」の意味の複製である。このように、「様態・結果+結果」タイプの複合動詞は本来なら、V1はV2の手段を修飾し、V2は意味的な中心であるという意味構造を持つはずであるが、「吊り下げる」のような複合動詞では、V1は意味的な中心であり、V2はV1の意味の一部の複製になっているように、意味構造が変わっている。本稿ではこのような複合動詞は再分析により、表面の形式は保持されているが、深層の意味構造にすでに変化が起こっているため、ここにも希薄化があると主張したい。

以上をまとめると、つまり、V2は格支配能力を有する場合でも、V1の意味の一部の複製である場合、V1は複合動詞の意味的な中心になり、複合動詞の深層表現に変化が起こっているため、希薄化と認める。このため、V2の語彙的意味の希薄化については、「格支配能力」、「テ形接続との言い換え」、「V1の意味との重なり」をあわせて見る必要がある。

次節から、これらの判断テストに基づいて、語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化を考察してみたい。

5.4 V1の語彙的意味の希薄化と自他交替

5.4.1 V1の語彙的意味の希薄化

5.2.1節で述べたように、従来、複合動詞におけるV1が接頭辞化することが指摘されてきたが、それ以上深く追求されることは少なかった。しかし、前述するように、V1の語彙的意味の希薄化は単純に接頭辞化として一通りの扱いで済ませることはできない。以下、具体的な例を取り上げ、複合動詞におけるV1の語彙的意味の希薄化について論じる。

本節では、自他交替と関連させ、5.3.3節で提出した判断テストに基づいて、「打つ」「引く」「切る」をV1とする語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化を詳しく分析する。分析する手順としては、まず例を取り上げ、判断テストに基づいて段階分けする。その後、各段階にある複合動詞について説明する。

複合動詞「打ち～」における語彙的意味の希薄化の段階分け

第一段階：「本義」の段階

例1：栗を竹竿で打ち落とす。(大辞林)

例2：彼はハンマーで氷の塊を打ち砕いた。(『複合動詞レキシコン』)

例3：彼は熊を打ち殺した。(『複合動詞レキシコン』)

(1) 栗を打って落とす (○) 栗を打つ (○) 栗を落とす (○)

塊を打って砕く (○) 塊を打つ (○) 塊を砕く (○)

熊を打って殺す (○) 熊を打つ (○) 熊を殺す (○)

(2) 選択制限：「打つ」動作としての本義＋使役変化・移動動詞

→「打つ」は動作としての本義が生きている

第二段階：「再分析」の段階

例1：花火を打ち上げる

例2：ロケットを打ち上げる

(1) 花火/ロケットを打ってあげる (×)

花火/ロケットを打つ (×) 花火/ロケットを上げる (○)

(2) 選択制限：「打つ」(「勢いよく」の意味)＋使役変化・移動動詞

→「打つ」は副詞的な意味合いに転義している

第三段階：「類推」の段階

例 1 色とりどりの葉が打ち重なっていた。 (『複合動詞レキシコン』)

例 2 私たちは卓球に打ち興じた。 (『複合動詞レキシコン』)

例 3 大雨が打ち続いた。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 葉が打って重なる (×) 葉を打つ (×) 葉が重なる (○)

卓球に打って興じる (×) 卓球に打つ (×) 卓球に興じる (○)

大雨が打って続く (×) 大雨が打つ (×) 大雨が続く (○)

(2) 選択制限：「打つ」(強調を表す) + 非動作性の後項動詞

→「打つ」は接頭辞化している。

以上は判断テストに基づいて、「打つ」を V1 とする語彙的複合動詞を三段階に分けてみた。ここで、各段階について説明する。

第一段階では、「打つ」は単独動詞としての本来の意味(強くたたく)を保持している。

第二段階は再分析の段階である。「花火を打ち上げる」では、「打つ」は本来の意味から「勢いよく」という副詞的な意味合いに転義している。また、「打つ」は「花火」に格支配能力を失っている。これにより、本稿では「花火を打ち上げる」における「打つ」は語彙的意味が希薄化していると認定する。そして、この段階では、結合する V2 には選択制限が課されており、V2 は使役変化・移動動詞であり、複合動詞全体は「様態動詞 + 使役変化・移動動詞」(様態 + 結果)であり、第 3 章で論じた語彙的複合動詞の事象構造「様態 + 結果」と一致している。

ただし、「打ち上げる」の場合、補語名詞によって、「打つ」は語彙的意味が希薄化したり、しなかったりする。例えば、「ボールを打ち上げる」は (18) に示されているように、「打つ」は動作を表しており、元々の動詞の意味が生きている。

(18) ボールを打ち上げる

ーボールを打って上げる (○) ボールを打つ (○) ボールを上げる (○)

「打ち上げる」から窺えるように、第二段階は実質的な意味と形式上の意味との間で揺れる段階であり、意味変化の真ん中の段階でもであり、文法化の程度が低いといえるであ

ろう。

第三段階では、「打つ」は本来の動作としての意味は完全に喪失し、類推行為によって広範囲の動詞に適用され、V2に選択制限を要求しないようになっている。「重なる」「興じる」「続く」などの非動作動詞と結合し、強調する役割を果たしている。他には「打ち震える」「打ち忘れる」などがある。

次は「引く」をV1とする複合動詞について考察してみたい。

複合動詞「引く～」における語彙的意味の希薄化の段階分け

第一段階：「本義」の段階

例1：海底に沈んでいた船を引き上げた。 (『複合動詞レキシコン』)

例2：田んぼに水を引き入れる。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 船を引いてあげる (○) 船を引く (○) 船を上げる (○)

水を引いて入れる (○) 水を引く (○) 水を入れる (○)

(2) 選択制限：「引く」動作として本義（近くへ寄せる）＋動作性の後項動詞

→「引く」は動作としての本義が生きている。

第二段階：「再分析」の段階

例1：人口の増加が様々な環境問題を引き起こした。 (『複合動詞レキシコン』)

例2：エクササイズでお腹を引き締める。 (『複合動詞レキシコン』)

例3：消費税率を5%引き上げる発言の撤回を求めます。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 問題を引いて起こす (×) 問題を引く (×) 問題を起こす (○)

お腹を引いて締める (×) お腹を引く (×) お腹を締める (○)

税率を引いてあげる (×) 税率を引く (×) 税率を上げる (○)

(2) 選択制限：「引く」（強調を表す）＋使役変化・移動動詞

→「引く」は副詞的な意味合いに転義している。

第三段階：「類推」の段階

例1：円高が引き続いている。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 円高が引く (×) 円高が続く (○)

(2) 選択制限：「引く」＋非動作性の後項動詞

→「引く」は接頭辞化している。

第一段階では、「引く」は本来の動作の意味が保持されており、V2の手段を指定している。複合動詞全体は「様態＋結果」という構造を持っている。

第二段階では、「再分析」により、「引く」は補語名詞に格支配能力を失っており、語彙的意味が希薄化している。そして、V2に選択制限を課しており、V2は使役変化・移動動詞であることを求めており、複合動詞の表面の形式「様態＋結果」は保持されている。

「引き－」の場合も「打ち－」と同様、第二段階は実質的な意味と形式的な意味の間で揺れる段階であり、同じ複合動詞は補語名詞によっては、本義が保持される場合もある。例えば、「税率を引き上げる」では、「引く」は語彙的意味が希薄化しているが、「船を引き上げる」において、「引く」は「引っ張る」という本来の動作の意味を持っている。「引き起こす」も(19)のように、本来の動作の意味が生きている場合がある。

(19) 倒れている人を引き起こす

－倒れている人を引いて起こす (○)

倒れ入る人を引く (○) 倒れている人を起こす (○)

第三段階では、意味変化がさらに進み、「引く」の本来の意味が完全になくなり、「類推」により、非動作性の動詞まで結合できるようになり、接頭辞化している。

複合動詞「切る～」における語彙的意味の希薄化の段階分け

第一段階：「本義」の段階

例1：木を切り倒す

例2：彼は枝を鋸で切り落とすした。

例3：料理人は魚の腹を切り開いた。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 木を切って倒す (○) 木を切る (○) 木を倒す (○)

枝を切り落とす (○) 枝を切る (○) 枝を落とす (○)

腹を切り開く (○) 腹を切る (○) 腹を開く (○)

(2) 選択制限：「切る」本義＋使役変化・移動動詞

→「切る」は動作としての本義が生きている。

第二段階：「再分析」の段階

例 1：チャンネル/映像を切り替える

(1) チャンネル/映像を切って替える (×)

チャンネル/映像を切る (×) チャンネル/映像を替える (○)

(2) 選択制限：「切る」本義＋使役変化動詞

→「切る」は意味が抽象化している。

第三段階：「類推」の段階

例 1:高い山が両側に切り立っている。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 山が切る (×) 山が立つ (○)

(2) 選択制限：「切る」程度＋非動作性動詞

→「切る」は接頭辞化している。

第一段階では、「切る」は「切断する」という動作そのままの意味を保持している。第二段階では、「切る」は補語名詞に格支配能力を失っており、「切断」の動作から「中断させる」「止める」の意味へ希薄化している。意味が希薄化しているが、表面の形式「様態＋結果」は変化していないので、「再分析」の段階にある。第三段階では、「切り立つ」は「垂直にそそり立つ」という意味を表しており、「切る」の語彙的意味が完全に消失し、「立つ」という非動作性動詞と結合するようになっており、接頭辞化している。

以上、語彙的複合動詞における V1 の語彙的意味の希薄化を三段階に分けて考察してみた。第一段階では、V1 は動作としての本義が保持されている。第二段階は、いわば文法化が起こってきた段階で、「再分析」により、V1 は辞書的意味を失い、動作を表す意味から副詞的な意味へ転義している。これらの段階では、V1 は V2 に対する厳しい選択制限を課す。第三段階では、V1 の意味変化がもっと進んでおり、V2 に強調などの意味を加える役割をしている。「類推」により、結合する V2 は非動作性の動詞まで広がっている。このように、複合動詞においては、V1 は具体的な動作から、抽象的な意味へ、接頭辞へと徐々に展開していく。V1 の語彙的意味の希薄化の段階性を表 5-1 にまとめる。

表 5-1: V1 の語彙的意味の希薄化の段階分け

段階		例	意味	構造
第一段階	本義	打ち落とす	本義	「様態＋結果」
↓				
第二段階	再分析	打ち上げる	副詞的な意味	「様態＋結果」
↓				
第三段階	類推	打ち重なる	接頭辞	「V1+非動作性動詞」

語彙的意味の希薄化という過程は連続的なものであり、希薄化の各段階の間に明確な線を引くことが難しいと考えられるが、複合動詞における語彙的意味の希薄化の傾向として、以上の三段階に分けられると思われる。では、各段階では、語彙的複合動詞の事象構造はどのようなになっているのであろうか。次節でこれについて議論する。

5.4.2 V1 の語彙的意味の希薄化と語彙的複合動詞の事象構造

5.4.1 節で、具体例の分析を通して、語彙的複合動詞における V1 の語彙的意味の希薄化を三段階に分けてみた。管見の限りでは、複合動詞において、語彙的意味が希薄化した場合、複合動詞の事象構造はどうなるのかについてはまだ研究されていない。本節では、V1 の語彙的意味が希薄化していく場合、深層表現である事象構造がどのように変化していくのかについて考察を進めたい。

中村（1998）は複合動詞において、接頭辞化しやすい動詞は「打つ」「差す」「立つ」「掻く」「引く」「取る」「押す」「繰る」「振る」などがあると述べている。そのほとんどは本稿の分類で言えば、様態他動詞である。第 3 章で論じられているように、様態他動詞は本来、使役変化・移動動詞と組み合わせられて、「様態＋結果」タイプの複合動詞になり、V1 は V2 の手段を指定する。例えば、「打ち落とす」では、「打つ」は様態他動詞であり、「落とす」は使役移動動詞であり、「打つ」は「落とす」の手段を修飾する。その事象構造は下記（20）のようである

- (20) LCS: 「落とす」 [x ACT <空白>on y]CAUSE[y BECOME BE AT< DOWN>]]
↑
「打つ」 [x ACT<HITTING>on y]
→[x ACT <HITTING>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <DOWN>]]

EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner)

E2=e2* (y) :state

このように、第一段階—本義が生きている段階では、V1 は V2 の意味構造を補充し、V2 の手段を指定している。第二段階から、深層表現（事象構造）に変化が起こっていると述べたが、事象構造のどの部分、どのように変化するのかを考えてみよう。

第 3 章で論じたように、動詞の事象構造は二つの部分から構成されている。一つは一定の動詞クラスに共通の構造的意味を表す事象スキーマ（event schema）であり、もう一つは動詞の個別的意味を表す「root」である。Rappaport Hovav & Levin（1998）では事象スキーマは「構造的意味（grammatically-relevant aspect of verb meaning）」を表しており、「root」は「個別的意味（idiosyncractic aspect of verb meaning）」を表していると述べている。そして、Rappaport Hovav & Levin（1998）は「semantic bleaching」について、以下のような論述がある。

It is significant that semantic bleaching always involves the loss or weakening of the idiosyncractic aspect of verb meaning, and to our knowledge, never involves removal of grammatically-relevant aspect of verb meaning. Furthermore, ‘semantic bleaching’ is quite idiosyncratic, being associated with individual verbs rather than with grammatically-relevant semantic classes of verbs.

Rappaport Hovav & Levin（1998:105）

Rappaport Hovav & Levin によると、語彙的意味の希薄化が起こった際、動詞の個別的意味（idiosyncractic aspect of verb meaning）は弱化したり、消失したりするが、構造的意味（grammatically-relevant aspect of verb meaning）は保持されている。

Rappaport Hovav & Levin（1998）は文法化に関する論述ではないので、語彙的意味の希薄化についてこれ以上詳しく論じていないが、語彙的意味の希薄化と事象構造との関係についてヒントを与えてくれた。第二段階—「再分析」の段階では、V1 の語彙的意味が希薄化し、本来の具体的な動作の意味を失っている。すなわち、V1 の個別的意味（root）はなくなると理解できる。しかし、複合動詞全体は表面上「様態他動詞＋使役変化動詞」で

あり、V2 に使役変化・移動詞がくるという選択制限を課しており、複合動詞全体の表面の形式（様態＋結果）はまだ保持されている。すなわち、V2 の構造的な意味（事象スキーマ）はまだ保持されている⁴⁷。このように、「再分析」段階では、V1 の個別的意味（「idiosyncractic aspect of verb meaning」）が失われているが、構造的意味（「grammatically-relevant aspect of verb meaning」）が保持されている。これを事象構造で説明すると、次のようになる。まずは様態他動詞の事象構造を（21）のように示す。

(21) 様態他動詞の LCS:[x ACT<MANNER> ON y]

(22) a.event schema (grammatically-relevant aspect of verb meaning) :[x ACT ON y]

b.root (idiosyncractic aspect of verb meaning) :<MANNER>

再分析段階では、(22) b の<root>は消失し、a の<event schema>は保持されているため、(21) は (23) のようになる。

(23) [x ACT<MANNER>ON y] → [x ACT ON y]

これにより、語彙的複合動詞の事象構造は (24) のようになる。

(24) V2: [x ACT _↑<空白>ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]
V1[x ACT ON y]
→[x ACT <空白>ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]

このように、V1 の個別的意味<MANNER>の消失により、V2 への様態の指定がなくなり、本来の「様態」と「結果」両方が指定されている事象構造は「結果」だけ指定されるようになっている。

以上は理論的な分析であるが、ここで、「花火を打ち上げる」という例を取り上げて、再分析段階では、<MANNER>がなくなっていることについて説明する。『日本語多義語学習辞典 動詞編』によると、「打つ」の基本義は「(瞬間的に力を加え) 強く叩いて衝撃を与える、攻撃する」であり、ある特定の動作を表す。(25) a のように、「打つ」は単独で

⁴⁷ 後述するように、事象スキーマが保持されない場合、V2 に結合制限を課さない。

使う場合、特定の動作であるため、手やラケットやバットなど特定の道具と共起できる。通常、パソコンでボールを叩くことは考えられないため、パソコンと共起できない。b は a と同様に、特定の道具が要求されているため、「ボールを打ち上げる」における「打つ」は本来の具体的な動作の意味が生きているとわかる。一方、c では、「パソコンで花火を打ち上げる」のように、パソコンで花火自体に特定の動作を行うのではなく、何らかの操作によって、花火を勢いよく上げれば、「花火を打ち上げる」が言える。このことから、「花火を打ち上げる」における「打つ」は<<MANNER>が消失していると考えられる。

- (25) a. 手で/ラケットで/バットで/*パソコンでボールを打つ
b. 手で/ラケットで/バットで/*パソコンでボールを打ち上げる
c. パソコンで花火を打ち上げる

第三段階、「類推」の段階では、V1 の意味が完全に喪失しており、V2 への選択制限が消失し、V1 の構造的な意味も失うようになっている。複合動詞は深層の意味構造が変化しただけではなく、表面の形式まで変化し、複合動詞全体の構造（「様態＋結果」）は崩れている。すなわち、(26) のように、V1 は複合動詞の事象構造に参加しないようになり、V2 は複合動詞全体の事象構造をなす。

(26) LCV の LCS=V2 の LCS

例えば、(27) では、「打つ」は完全に意味が喪失しており、複合動詞の事象構造に参加しないようになっている。

(27) 色とりどりの葉が打ち重なっていた。

→意味的に「葉が重なっていた」と同じである

→LCS:[y BECOME BE AT<overlap>]

事象タイプの情報も含め、語彙的複合動詞における V1 の語彙的意味の希薄化と事象構造を

表 5-2 にまとめる。

表 5-2 : V1 の語彙的意味の希薄化と事象構造

段階	例	LCV の LCS
一：本義	ボールを打ち上げる	<p>[LCS1]・[LCS2]</p> <p>→[x ACT<MANNER> on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]</p> <p>EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)</p> <p>E2=e2 (x,y) :state</p>
二：再分析	花火を打ち上げる	<p>V1 の<Manner>の消失</p> <p>→ [LCS1]・[LCS2]</p> <p>[x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE<state>]]</p> <p>EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner)</p> <p>E2=e2 (y) :state</p>
三：類推	葉が打ち重なる	<p>V1 の[event schema]の消失</p> <p>→ [LCS2] : [y BECOME BE AT<state>]</p> <p>EVENTSTR=E1=e1 (y) :transition</p>

5.4.3 V1 の語彙的意味の希薄化と自他交替

前節で V1 の語彙的意味が希薄化している場合、語彙的複合動詞の事象構造について分析してみた。本節では、語彙的複合動詞の自他交替について分析し、第 4 章で提案した仮説を V1 の語彙的意味の希薄化から立証してみたい。第 4 章の最後で (28) のような自他交替の例は V1 の意味変化と関わると予測している。

(28) 「様態＋結果」タイプ語彙的複合動詞の自他交替：

花火を打ち上げる－花火が打ち上がる、税を引き上げる－税が引きあがる

画面を切り替える－画面が切り替わる、お腹を引き締める－お腹が引き締まる...

5.4.1 節の考察から、(28) に取り上げられている複合動詞における V1 語彙的意味が希薄化しているということは分かってきたが、これらの自他交替できる複合動詞は V1 の語

彙的意味の希薄化によるものかどうかはまだ確定できない。ここで、同じ動詞を V1 とする複合動詞の他の例を見てみたい。もし V1 が同じ動詞であり、しかも V2 の本義が生きている場合、V1 の語彙的意味が希薄化している複合動詞だけ自他交替できるとしたら、(28) の複合動詞の自他交替は V1 の語彙的意味の希薄化によるものであるといえるであろう。では、まず「打つ」を V1 とする他の複合動詞の例を見てみよう。自他交替を考察したいため、「打つ+自他交替できる他動詞」だけを取り上げる。

(29) a. はさみで枝を打ち落としたー*打ち落ちる

枝を打って落とす (○) 枝を打つ (○) 枝を落とす (○)

b. 彼はハンマーで氷の塊を打ち砕いたー*打ち砕ける

氷の塊を打いて砕く (○) 氷の塊を打つ (○) 氷の塊を砕く (○)

c. 彼は古い家を打ち壊したー*打ち壊れる

家を打って壊す (○) 家を打つ (○) 家を壊す (○)

d. 彼は棒でスイカを打ち割ったー*打ち割れる

スイカを打って割る (○) スイカを打つ (○) スイカを割る (○)

e. ボールを打ち上げたー*ボールが打ち上がった

ボールを打ってあげる (○) ボールを打つ (○) ボールを上げる (○)

→「打つ」は本義が生きている

→「打ち～」複合動詞は自他交替しない

(29) では、5.3.3 節で提出された「意味変化の有無」を判断するテストー「テ形」接続との言い換え及び「格支配能力」テストにより、これらの複合動詞における V1「打つ」はすべて単独用法を保持している。そして、これらの複合動詞は自他交替できない。これに対して、5.4.1 節で考察したように、「花火/ロケットを打ち上げる」では、「打つ」は語彙的意味が希薄化しており、(30) のように、自他交替できる。

(30) 花火/ロケットを打ち上げたー花火/ロケットが打ち上がった

(29)、(30) を対照して考えると、(29) と (30) 語彙的複合動詞の自他交替のふるまいが異なる原因は V1 の語彙的意味の希薄化に求められると分かる。すなわち、「打つ」を

V1 とする語彙的複合動詞は V1 の語彙的意味が希薄化している場合、自他交替が可能になるという結論を得られる。

では、他の例も見よう。次の (31) では、「引き締める」において、「引く」は単独動詞の意味が保持されており、「引き締める」は自他交替しない。

(31) まわしを引き締める－*まわしが引き締まる

まわしを引いて締める (○) まわしを引く (○) まわしをしめる (○)

→「引く」は本義が生きている

これに対して、5.4.1 で考察したように、「お腹を引き締める」における「引く」は語彙的意味が希薄化しており、(32) のように、自他交替できる。

(32) a. エクササイズでお腹を引き締める

b. はいて、歩くだけで、お腹がと引き締まると今話題のクロスウォーカー。

(『複合動詞用例データベース』)

他には次のような例が取り上げられる。(33) (34) は同じ「引き上げる」という複合動詞であるが、(33)「税を引き上げる」という例では、「引く」は語彙的意味が希薄化しており、「税が引きあがる」と自他交替している。一方、「船を引き上げる」では、「引く」は本義が生きており、自他交替できない。

(33) a. 所得税と法人税を一律 10%引き上げる「定率増税」を実施して財源を賄う予定でいる。

b. 今日から住民税が引きあがる。

－税を引いてあげる (×) 税を引く (×) 税を上げる (○)

→「引く」は語彙的意味が希薄化している。

(34) 海底に沈んでいた船を引き上げた。－*海底に沈んでいた船が引き上がった

－船を引いてあげる (○) 船を引く (○) 船を上げる (○)

→「引く」は本義が保持されている。

「切る」を V1 とする語彙的複合動詞も同じである。(35) に示されているように、「切る」は語彙的意味が希薄化している場合、複合動詞は自他交替できる。これに対して、(36) 「切り～」複合動詞において、「切る」は本義が保持されている場合、複合動詞は自他交替しない。

(35) a. 画面を切り替えれば、元に戻る。 (『複合動詞用例データベース』)

b. 画面が切り替わる。 (『複合動詞用例データベース』)

—画面を切って替える (×) 画面を切る (×) 画面を替える (○)

→ 「切り替える」における[切る]は語彙的意味が希薄化している。

(36) a. 木を切り倒す—*木が切り倒れた

b. 彼は枝を鋸で切り落とした。—*枝が切り落ちる

—木を切って倒す (○) 木を切る (○) 木を倒す (○)

枝を切って落とす (○) 枝を切る (○) 枝を落とす (○)

→ 「切る」は本義が保持されている。

以上の例で示したように、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞では、V1 の語彙的意味が希薄化している場合、複合動詞の自他交替が可能になるという仮説は実例で論証できた。では、なぜ V1 の語彙的意味が希薄化している場合、複合動詞の自他交替が成立するのであろうか。

ここで、まず「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞の本来の事象構造を再観察しよう。また繰り返しになるが、5.4.2 節で論じたように、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞では、V1 は様態を表す様態他動詞であり、V2 は変化が指定される使役変化動詞である。その事象構造は (37) のようである。

(37) LCS: [[x ACT<MANNER> on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]

EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner)

E2=e2* (y) :state

例えば、「打ち落とす」「叩き落す」「打ち壊す」などにおいて、V2 は自他交替できるが、

V1 は V2 の様態・手段を指定することによって、複合動詞全体は様態も変化結果も指定され、変化は焦点化されず、自他交替できないわけである。

しかし、上で示したように、V1 の語彙的意味が希薄化する場合、複合動詞の自他交替が成立する。前節で論じた語彙的意味の希薄化により、語彙的複合動詞の事象構造が変化することを思い出してほしい。表 5・2 から分かるように、第二段階では、V1 の語彙的意味の希薄化により、V1 は V2 への手段の指定はなくなっている。複合動詞全体は起因事象と結果事象という使役事象を含んでいるが、結果事象だけが焦点化されているため、自他交替が成立すると考えられる。「花火を打ち上げる」を例に、事象構造で表すと、以下のようになる。

(38) a. 上げる : LCS[[x ACT<MANNER> ON y] CAUSE [y BECOME BE AT<UP>]]

b. 打つ : [x ACT<HITTING>ON y]⁴⁸ →意味の希薄化

c. 花火を打ち上げる :

[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME BE AT<UP>]]]

起因事象 (無指定) 結果事象 (焦点)

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner)

E2=e2* (y) :state

(38) a は「上げる」の意味構造であり、b は「打つ」の意味構造である。「打つ」は語彙的意味の希薄化により、元々の動作様態を失っているということを網掛けで示している。「打つ」は V2 への手段の指定がなくなることにより、結果事象に焦点が置かれ、自他交替が成立する。

このように、第二段階では、V1 は語彙的意味が希薄化していることにより、語彙的複合動詞の事象構造が変化し、結果事象が焦点化されるという事象構造になった場合、自他交替が可能になるという点は理論的な説明ができた。

第三段階では、V1 の語彙的意味が希薄化しているが、V1 は事象構造を完全に失っており、接頭辞になっており、広範囲の動詞と結合するようになっている。この場合、複合動詞というより、「接頭辞+動詞」という派生語に近く、自他交替現象とは関係なくなる。

⁴⁸ ここでは網掛けで「打つ」という動詞の語彙的意味の希薄化を表す。

以上の議論をまとめると、V1における語彙的意味の希薄化の第二段階では、V1の語彙的意味が希薄化することにより、V1のV2への手段（様態）の指定が失われて、結果事象に焦点が置かれ、自他交替が成立する。これを次のような表 5-3 にまとめる。

表 5-3：V1の語彙的意味の希薄化と自他交替

段階	例	事象構造	自他交替
第一段階： 本義	ボールを打ち上げる	[LCS1]・[LCS2] →[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	×
第二段階： 再分析	花火を打ち上げる	V1の<Manner>の消失 → [LCS1]・[LCS2] [x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner) E2=e2* (y) :state	○
第三段階： 類推	葉が打ち重なる	V1の[event schema]の消失 → [LCS2]： [y BECOME BE AT<state>] EVENTSTR=E1=e1 (y) :transition	×

次節はV2の語彙的意味の希薄化による自他交替について分析してみたい。

5.5 V2の語彙的意味の希薄化と自他交替

複合動詞におけるV2は多くの場合、元来の語彙的な意味からより抽象的で形式的な意味を表すようになっていることが確かめられている。近年では、Ono(1992)、青木(2004)、廣瀬(2006)などはこれを文法化現象として分析している。しかし、それらの研究の多くは接辞性が高い統語的複合動詞に関するものである。本節は語彙的複合動詞におけるV2の語彙的意味の希薄化について詳細に考察を行いたい。

5.5.1 V2 の語彙的意味の希薄化

従来、複合動詞構成要素のうち、V2 に関して、特にその接尾辞化をめぐって様々に議論されてきた。例えば、以下のような研究がある。

武部（1953:468）は複合動詞における補助動詞的要素としては、次の三つを考えることができる」と論じている。

- (39) 一、強意的意味を添えるもの あきれ返る、投げつける
二、動作の方向を示すもの 積み込む、逃げ出す
三、動作の起こり方を示すもの 読みきる、乗り続ける

寺村（1984:164）は複合動詞の V2 の接辞化を次のように分類している。

- (40) (i) 時間相 開始 ～はじめる、～だす、～かける
継続 ～つづける、～つづく、
終了 ～おわる、～おえる、～やむ
(ii) 空間相 上下 ～あげる、～あがる、～おろす、～くだす
内と外/周囲への方向 ～こむ、～こめる、～だす、～まわす
ある目標に向かっての動き ～かける、～かかる、～つける、～つく、～かえす
(iii) 程度、密度、強さ、完成 ～ぬく、～きる、～こむ、～とおす

姫野（1999）は、複合動詞の V2 が補助動詞化している場合を、意味によって以下の四つに分類している。

- (41) I. 方向性に関するもの：盛り上がる、見上げる
II. 程度の強調に関するもの：震え上がる、叱り付ける、静まり返る
III. ことの成否、過不足に関するもの：見落とす、見かねる、寝過ごす
IV. アスペクトに関するもの：見始める、降り出す、見終わる

以上の国語学における先行研究は、V2 の表す意味に基づいて複合動詞の詳細な分類を

試みている。しかし、これらの研究は語彙的複合動詞と統語的複合動詞を混同して考察している。これに対して、言語学の分野では、影山（1993）、由本（2005）は以上のような V2 が補助動詞化している複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞の補文関係複合動詞にまとめている。影山（2012）は語彙的複合動詞の中にも「補助動詞」があると指摘し、従来、補文関係複合動詞と呼ばれているものをアスペクト複合動詞と呼び、空間的なアスペクト複合動詞（「見上げる」、「見下ろす」など）、時間的なアスペクト複合動詞（「降り止む」、「歌い上げる」など）に分けられると述べている。

以上の先行研究に共通している点は、V2 の語彙的意味が希薄化して本来の動作からおおよそ空間、時間、強調という三つの意味を表すようになっていくとまとめられるところである。これは文法化における意味変化の方向と一致している。Heine et al.（1991）は次のような意味変化過程における「metaphorical extension」（比喩的拡張）という変化の方向を提示している。

(42) PERSON > OBJECT > ACTIVITY > SPACE > TIME > QUALITY

（人 > 対象 > 活動 > 空間 > 時間 > 質）

Heine et al.（1991:48）

このクラインにおいて、より右にあるものが、より左にあるものとして比喩的に表現されている。例えば、よく取り上げられている「Time is space」はその一例である。この中で、「質」の概念はやや曖昧であるが、「状態」「程度」などたくさんの概念を指すことができると Heine et al.が述べている。語彙的複合動詞において、程度の強調を表す V2 は「活動」から「質」へと変化していると考えられる。また、Heine et al.はこのカテゴリー的メタファーの変化プロセスはさまざまな言語において、さまざまな品詞の間で生じる文法化の現象に適用できると論じている。語彙的複合動詞における V2 の意味変化はまさにこの経路に沿って進んでいる。

以下、本節は 5.3.3 節で設定した判断テストに基づいて、V2 の語彙的意味の希薄化するプロセスを段階に分けて、より詳細に分析したい。V2 の語彙的意味の希薄化の段階分けも大きく「再分析」段階、「類推」段階に分けるが、Hein et al.の意味変化のプロセスを考慮に入れてもっと詳しく分類する。では、次は「上げる」「付ける」「切る」を V2 とする語彙的複合動詞を取り上げて考察していく。

複合動詞「～上げる」における語彙的意味の希薄化の段階分け

第一段階：本義—動作

例 1：少女が金魚を手ですくい上げた。 (『複合動詞レキシコン』)

例 2：彼はボールを高く蹴り上げた。 (『複合動詞レキシコン』)

例 3：ボールを打ち上げる。

- (1) 金魚を掬ってあげる (○) 金魚を掬う (○) 金魚を上げる (○)
ボールを蹴ってあげる (○) ボールを蹴る (○) ボールを上げる (○)
ボールを打ってあげる (○) ボールを打つ (○) ボールを上げる (○)

(2) V1 との意味の重なり：なし

(3) 選択制限：様態動詞＋「上げる」の本義（上の方向へ移動させる）

→「上げる」は動作としての本義が生きている

第二段階 I：再分析—空間

①明示化

例 1：恋人と二人で、夜空を見上げた。 (『複合動詞レキシコン』)

例 2：羊を丘の上に追い上げる。

- (1) 夜空を見てあげる (×) 夜空を見る (○) 夜空を上げる (×)
羊を追ってあげる (×) 羊を追う (○) 羊を上げる (×)

(2) 意味の重なり：なし

(3) 選択制限：様態動詞＋上げる（「上へ」という方向を表す）

→「上げる」は動作から「上へ」という「方向」を表す。

②「確認・強調」

例 1：作業員はケースを積み上げた。 (『複合動詞レキシコン』)

例 2：土を盛り上げた。

- (1) ケースを積んであげる (×) ケースを積む (○) ケースを上げる (×)
土を盛って上げる (×) 土を盛る (○) 土を上げる (×)

(2) 意味の重なり：あり

(3) 選択制限：様態結果動詞＋ 上げる（「上へ」という方向を表す）

→「上げる」は「上へ」という「方向」を表す

第二段階Ⅱ：再分析—時間

例 1：彼女はマフラーを編み上げた。 (『複合動詞レキシコン』)

例 2：料理人は野菜を炒め上げた。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) マフラーを編んであげる (×) マフラーを編む (○) マフラーを上げる (×)

野菜を炒めてあげる (×) 野菜を炒める (○) 野菜を上げる (×)

(2) 意味の重なり：あり

(3) 選択制限：様態結果動詞＋上げる (完了を表す)

→「上げる」は空間から時間への抽象化、「完了」を表す

第三段階：類推—強調

例：彼は部下を怒鳴り上げるばかりで、ほめたことがない。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 部下を怒鳴る (○) 部下を上げる (×)

(2) 意味の重なり：なし

(3) 選択制限：様態自動詞＋強調を表す「上げる」

→「上げる」はただ強調するという機能を果たしている。

第一段階では、「上げる」は「上へ移動させる」という本来の意味が生きている。

第二段階は「再分析」の段階である。この段階では、「上げる」の語彙的意味に変化が起こっているが、複合動詞全体の表面の形式は（「様態他動詞＋使役移動動詞」）保持されており、「上げる」は V1 に選択制限を課す。意味によって、再分析段階を「空間」段階と「時間」段階に下位分類できる。「空間」段階では、「上げる」は動作を表す「上へ移動させる」という意味から、V1 という動作の方向「上へ」を表すようになっている。一方、「時間」段階では、「上げる」は空間から時間へと抽象化し、「上げる」は「完了」というアスペクトを表すようになっている。

「～上げる」の場合、動作から空間へ意味変化した際、また度合いによって 2 つに分けられる。斎藤（1992:327）の用語を使用すると、それは「明示化」と「強調・確認」の相違である。「見上げる」「追い上げる」といった例における「上げる」は「明示化」であり、V1 の表す動作そのものに方向性が含まれておらず、「上げる」はその方向を明示する。「積

み上げる」「盛り上げる」などの例における「上げる」は「強調・確認」であり、V1には「上へ」という方向性がすでに含まれており、V2「上げる」は改めて明確にする。この違いは、V2の接辞性とも関係し、後者のほうが後項の接辞性がより高いと斎藤（1992）が指摘している。

第三段階では、「上げる」は時間から更に文法化が進み、「怒鳴る」のような自動詞とも結合するようになっており、ただ単に程度を表すようになっている。

複合動詞「～つける」における語彙的意味の希薄化の段階分け

第一段階：本義－動作

例1：彼女はセーターにポケットを編み付けた。 （『複合動詞レキシコン』）

例2：彼女は壁に板を打ち付けた。 （『複合動詞レキシコン』）

- (1) ポケットを編んでつける (○) ポケットを編む (○) ポケットを付ける (○)
板を打ってつけた (○) 板を打つ (○) 板をつける (○)

(2) 意味の重なり：なし

(3) 選択制限：様態動詞＋「つける」（本義：付着させる）

→「付ける」は本義が生きている

第二段階：再分析－方向

例1：封筒に切手を貼り付ける （広辞苑）

例2：糸を巻きつける （『複合動詞用例データベース』）

- (1) 封筒に切手を貼ってつける (×) 切手を貼る (○) 切手を付ける (○)
糸を巻いて付ける (×) 糸を巻く (○) 糸を付ける (○)

(2) 意味の重なり：あり

(3) 選択制限：様態・結果動詞＋「付ける」（付着させるという動作より、方向を表す）

→「付ける」はV1に含まれる方向の確認

例3：彼女は彼にバッグを投げつけた。 （『複合動詞レキシコン』）

例4：両親は地元で就職するように娘を説き付けた。

- (1) バッグを投げて付ける (×) バッグを投げる (○) バッグをつける (×)
娘を説いて付ける (×) 娘を説く (○) 娘をつける (×)

(2) 意味の重なり：なし

(3) 選択制限：様態動詞＋「付ける」（「対象への指向」という方向を表す）

→「付ける」は実質的な意味を失い、単に V1 の方向を明示している。

第三段階：類推—程度

例：砂丘は日光が強く照りつけるので、砂に水分が少ない。

(1) 日光が照る 日光がつける

(2) 意味の重なり：なし

(3) 選択制限：非動作性の自動詞＋「付ける」（強調機能を果たしている）

→「付ける」は強調の役目を果たしている。

第一段階では、「付ける」は動作としての本義「接着させる」という意味を保持している。結合する V1 は「付ける」の手段を修飾する。

第二段階では、「つける」は再分析により、「接着させる」という動作から「対象への指向」という方向性を表すようになっていく。その方向は物理的な方向と抽象的な方向という二つがある。例えば、「彼にバッグを投げつける」は「彼に向けてバッグを投げる」という意味であり、「つける」は「彼に向けて」という物理的な方向を表す。これに対して、「娘を説きつける」は「娘に向かって説く」という意味であり、ここでの「つける」は抽象的な方向を表している。姫野（1999）は後者の「つける」は相手の意向にかまわず、一方的に行為がなされるというニュアンスを含むと述べている。

「投げつける」などの例では「つける」は補語名詞に格支配能力を失っているため、語彙的意味が希薄化していると考えられる。これに対して、「貼り付ける」「巻き付ける」といった例は 5.3.3 節で論じた「吊り下げる」と同じように、V2「つける」は格支配能力を有していることから考えると、V2 に語彙的意味の変化は起こっていないと思われるかもしれない。しかし、これらの複合動詞は「テ」形連接と言換えられないということから分かるように、表面上は「様態＋結果」という構造を持っているが、V1 はすでに V2 の様態を表していない。そして、これらの動詞において、V1 と V2 に意味の重なりがあり、V1「貼る」「巻く」などはすでに「接着・設置」の意味が含まれており、「つける」は単に V1 の意味の複製に過ぎない。以上の二点から、これらの複合動詞において、V2 の意味構造にすでに変化が起こっているということがわかる。このため、これらの複合動詞にも意味の希

薄化があると認められる。

第三段階では、「つける」は空間から質へ抽象化し、選択制限が緩くなっており、「照る」などのような非動作性の動詞と結合できるようになっている。この段階で、「つける」は本来の動詞の意味がなくなり、ただ強調の機能を果たすようになっている。

複合動詞「～切る」の語彙的意味の希薄化の段階分け

第一段階：本義—動作

例 1：彼女は糸を噛み切った。 (『複合動詞レキシコン』)

例 2：ゆで卵を、箸で挟み切った。 (『複合動詞レキシコン』)

(1) 糸を噛んで切る (○) 糸を噛む (○) 糸を切る (○)

卵を挟んで切る (○) 卵を挟む (○) 卵を切る (○)

(2) V1 との意味の重なり：なし

(3) 選択制限：様態動詞＋「切る」(動作としての本義「切断する」)

→「切る」は本義が生きている

第二段階：再分析—時間⁴⁹

例 1：在庫品を買い切る。 (明鏡)

例 2：わずか 2 週間で初版の 2 万部を売り切った。(姫野 1999:178)

例 3：融資限度ぎりぎりまで金を借り切る。 (明鏡)

(1) 在庫品を買って切る (×) 在庫品を買う (○) 在庫品を切る (×)

2 万部を売ってくる (×) 2 万部を売る (○) 2 万部を切る (×)

金を借りて切る (×) 金を借りる (○) 金を切る (×)

(2) V1 との意味の重なり：なし

(3) 選択制限：様態動詞＋「切る」(「切断する」という動作から「完遂」を表す)

→「切る」は動作から「完遂」⁵⁰を表すようになっている。

⁴⁹ 姫野(1999)では、「～切る」は本動詞の「切る」の意味で用いられる語彙的複合動詞の場合と、接辞的に統語的複合動詞として用いられる場合に大別しされる。「完遂」を表すものと「極度の状態に達する」ことを表すものは統語的複合動詞に分かれている。これにより、「買い切る」、「売り切る」は統語的複合動詞に分かれるが、本稿では、「売り切る」は次の判断テストによって、(1)代用：そうし切る (×)、(2)受身形：売られ切る (×)、(3)尊敬：お売りになり切る (×)、(4)重複形：売りに売り (×)、語彙的複合動詞として扱う(影山 1993 を参照されたい)。

第三段階：類推一程度

例 1：彼らは彼の態度に困り切っていた。（『複合動詞レキシコン』）

例 2：川の水が澄み切っている。（『複合動詞レキシコン』）

- (1) 彼の態度に困って切っている (×) 彼の態度に困る (○) 彼の態度に切る (×)
 水が澄んで切っている (×) 水が澄む (○) 水が切る (×)

(2) V1 との意味の重なり：なし

(3) 選択制限：非動作性の自動詞＋「切る」（「極度」という強調の機能）

→「切る」は時間的アスペクトから強調する機能を果たすようになっている

第一段階では、「切る」は「つながっているものを断ったり、付いているものを離したりする」という本来の意味を持っている。第二段階では「切る」は「再分析」により、動作から「完遂」というアスペクトを表すように展開している。「切る」は V1 に選択制限を課しており、V1 は完結性を持っている動作性動詞である。第三段階では、「切る」は「類推」により、「困る」、「澄む」などの非動作動詞と結合し、その状態の程度の高さを表す。

以上、「～上げる」「～つける」「～切る」を取り上げ、V2 の語彙的意味の希薄化について考察した。これらの例から分かるように、V2 の意味変化は「活動＞空間＞時間＞質」という方向に沿って進んでいる。本稿は影山（2012）に倣って、以下、V2 が空間を表す複合動詞を「空間的アスペクト複合動詞」、「時間的アスペクト複合動詞」と呼ぶ。また、V2 が強調を表す複合動詞を強調機能複合動詞と呼ぶ。以上の考察をまとめると、表 5-4 のようになる。

表 5-4：V2 の語彙的意味の希薄化の段階性

V2	第一段階 (動作)	第二段階 I (空間的アスペクト)	第二段階 II (時間的アスペクト)	第三段階 (強調機能)
～上げる	打ち上げる	見上げる	編み上げる	怒鳴り上げる
～つける	編みつける	貼り付ける 投げつける		照りつける
～切る	噛み切る		売り切る	困りきる

⁵⁰ 「完遂」と「完了」はやや異なる。姫野（1999:177）によると、「完遂」を表す「切る」は、行為の単なる終了を表すのではなく、行為者の予定どおり（質、量ともに）完全に行われることを表している。

5.5.2 V2 の語彙的意味の希薄化と事象構造

(43) V1 + V2 → V

歌い 上げる

(Ag1 <Th>) (Ag2 <Ev>) (Ag2 <Ev>)

(Ag1 <Th>)

(44) 補文構造 [LCS2...[LCS1]...]

[[x_i]]CONTROL[[y_i]]WRITE[[z_i]]+[[x_i]]FAIL[IN[Event (y)]]]

響き渡る:[[x_i]**SOUND**]+[[Event (y)]**EXTEND**]]

157

(44) に示されているように、補文関係複合動詞において、V1 と V2 は補文構造をなしており、V2 が Event を項としてとる動詞で、その項として V1 の LCS が埋め込まれている。由本 (2005) は補文関係複合動詞の LCS を提示しているが、ただ V1 と V2 の LCS を補文構造で表しているだけであり、V1 と V2 の意味的、統語的特徴を表すことができず、単一事象としての事象構造を提示していない。

そして、影山 (1993) 及び由本 (2005) はいわゆる時間的アスペクト複合動詞だけを扱っており、空間的アスペクト複合動詞の事象構造を言及していない。本稿では 5.5.1 節で考察した V2 の語彙的意味が希薄化した 3 つの段階の複合動詞（すなわち、空間的アスペクト複合動詞、時間的アスペクト複合動詞、強調を表す複合動詞）の事象構造を明らかにしたい。

5.5.1 節で V2 は本来の動作の意味から空間へと、時間へと、質へと希薄化していくと考察したが、V2 の語彙的意味が希薄化している場合、V2 の事象構造はどのように変化するのであろうか。この問題が分かれば、複合動詞の事象構造が明らかになるであろう。その手掛かりになるのは大堀 (2002) の研究である。大堀 (2002) は V2 の意味変化を文法化現象として捉え、複合動詞における V2 の文法化について、以下のような論述がある。

複合動詞が相の標識へと変化するときには、V1 が具体的な動作を表し、V2 がそれに対して概念的な枠を与えている。つまり、単独では本動詞としてはたらく V2 の意味が、抽象的な要素へと変わっている。ここでは、時間の中での変化や状態という意味が残されて、変化の軌跡そのものが焦点となる。Talmy の理論に従えば、事象構造の中で、経路の概念が移動から相へと拡張されてフレーム化がされていると見ることができる。

...ここから、次のような一般化が可能である。

経路保存の制約 (path-preservation constraint)

経路を含んだ動詞は相の標識へとスキーマを保存しながら補助動詞化する傾向が強い。

大堀 (2002:191-192)

そして、大堀 (2002) は「V1 テ形-V2」のような複合動詞から補助動詞へ文法化して

いる例を次のように図式化している。

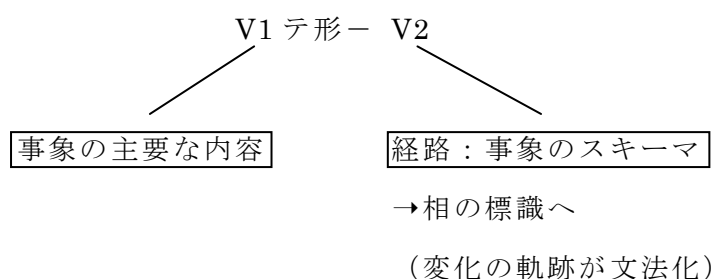


図 5-2: 複合動詞から補助動詞へ

大堀 (2002:193)

ここで述べられている複合動詞は「テ形+V」動詞（例：「～ている」>状態・継続、「～ておく」>完了、「～てしまう」>完了など）と「連用形+V」統語的複合動詞（例：「～かける」>始動、「～きる」>完了、「～だす」>始動など）であり、いずれも補助動詞化している動詞である。

後述するが、本研究で論じられているアスペクト複合動詞も大堀に指摘されているように、V1 は事象の主要な内容を表し、V2 は補助的な役割を果たしている⁵¹。そして、5.5.1 で考察しているアスペクト複合動詞も語彙的意味が希薄化しており、本来の動作から空間へ時間へと変化していくので、アスペクト複合動詞も事象のスキーマが保存しながら、抽象化していく過程であると考えられる。ここでの事象のスキーマはイメージスキーマ⁵²のことであり、5.4.2 節で論じた Rappaport Hovav & Levin の事象構造の一部分である「event schema」と異なる⁵³。文法化の理論では、Sweetser (1988) など語彙的意味が希薄化

⁵¹ これについては後述する。この節では、語彙的意味が希薄化している V2 の事象構造をどのように表すのかに焦点を当てて議論する。

⁵² 人間は常に具体的な情報を一般化・抽象化して獲得する。その抽象的な知識はスキーマという。イメージスキーマは人間の感覚像のスキーマ化されたものであり、容器のスキーマ、経路のスキーマ、力のスキーマなどがある。(Johnson1987、Lakoff1987、大堀 2002 など)

⁵³ 5.4.2 節で説明したが、ここで再度説明する。ここで論じられている V2 になる動詞は使役変化・移動動詞であり、その事象構造は次のようになる。

(1) [x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE<state>]

この事象構造は二つの部分から構成されている。一つは[event schema]: [x ACT on y]CAUSE[y BECOME BE<>]]であり、もう一つは[root]: <state>である。ここの[event schema]は構造的な意味を担当する部分である。

大堀 (2002) の「経路」を含んだ動詞の表す事象のスキーマは「経路」と述べて

していく際、イメージスキーマが保存されていることについても論じている。Sweetser (1988) は移動経路動詞を取り上げ、意味変化の過程では、動詞の具体的な動作の意味がなくなったが、イメージスキーマ (image schematic structure) が保存されていると指摘している。5.5.1 節で検討した先行研究に取り上げられる例から分かるように、語彙の意味が希薄化している V2 はすべて「上げる」「切る」「付ける」などのような使役変化・移動動詞であり、すなわち「経路」(変化) を含んでいる動詞である。使役変化・移動動詞が表す事象のスキーマは「経路」(変化) である。例えば、「上げる」のイメージスキーマは「上へ」という経路であると考えられる。以下のようになると考えられる。

(45)

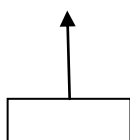


図 5-3: 「上げる」のイメージスキーマ

「上げる」は語彙の意味が希薄化していく際、「上へ移動させる」というイメージスキーマは保存されながら、「空間」へと、「時間」へと変化していく。では、このような「上へ」という移動経路は抽象化していくということを事象構造で表すとどうなるであろう。事象構造は動詞の意味情報を分解しているものであり、イメージスキーマは動詞の意味情報を抽象化したものであるということから考えると、イメージスキーマは動詞の事象構造の抽象化したものであると理解できる。このため、イメージスキーマが抽象化していくということは動詞の事象構造全体が抽象化していくということになると考えられる。

大堀の論述と関連して考えると、アスペクト複合動詞において、V1 は事象の主要内容を表し、V2 は事象のスキーマ (経路) を保存しながら語彙の意味が希薄化していき、V1 の表す事象に補助的な役割をしている。図 5-3 を事象構造で表すと、次のようになる。

いる。この「事象のスキーマ」は (1) の事象構造全体の抽象化したものであると考えられる。

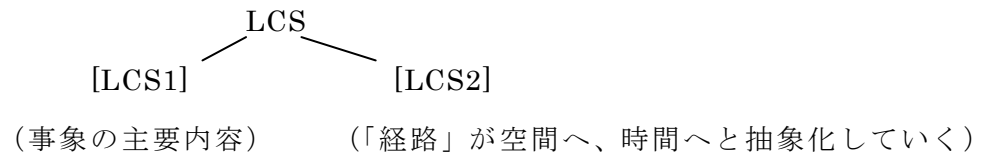


図 5-4：アスペクト複合動詞の事象構造

図 5-4 に示されているように、V2 の語彙的意味が希薄化している場合、V2 の事象構造全体は空間へ、時間へと抽象化していく。各段階の複合動詞の事象構造は具体的にどのようなになっているのかについて次節から議論を進める。

5.5.3 空間的アスペクト複合動詞の事象構造

空間的アスペクト複合動詞についてはあまり詳しく研究されておらず、ほとんどの研究はただ V2 は語彙的意味が希薄化し、空間相を表していると指摘するに留まっている。本節は空間的アスペクト複合動詞について詳しく分析した上で、その事象構造を解明したい。

5.5.2 節では、大堀（2002）の研究を参考にし、アスペクト複合動詞の事象構造を予測しているが、ここでは、まず前節で論じられていない空間的アスペクト複合動詞の意味的特徴と統語的特徴について考察する。空間的アスペクト複合動詞では、V2 は本来の動作の意味が希薄化し、V1 の動作の方向を表すようになっている。このため、V1 は複合動詞の中核的な意味を担い、V2 は V1 の事象内容（方向）を補足する役割を果たしていると考えられる。この点は次の簡単なテストからも判断できる⁵⁴。(46) のように、「空を見上げる」では、伝えたい意味の中心は V1 「見る」にある。

(46) 空を見上げましたか。

(○) はい、見ました。 (*) はい、上げました。

大堀（2002）を参考に、上記した空間的アスペクトの意味的特徴を次のような簡単な図で示す。

⁵⁴ これは影山(2012)で用いられている判断方法である。しかし、影山(2012)のご指摘のように、これはあくまで判断の目安である。

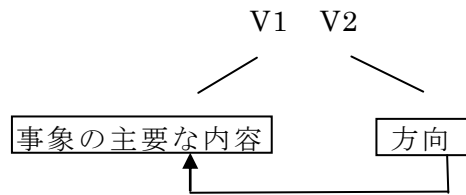


図 5-5：空間的アスペクト複合動詞の事象構造

そして、5.5.1 節で考察したように、空間アスペクト複合動詞において、(47) のように、V2 は名詞に格支配能力を失っているので、統語的にも V1 が複合動詞の中心となっている。

(47) 空を見上げる

—空を見る (○) 空を上げる (*)

このように、空間アスペクト複合動詞において、V1 は意味上、統語上の中心であり、V2 はただ V1 の動作の方向を明示するだけである。これで、前節で提案した事象構造は空間的アスペクト複合動詞に適用できると考えられる。空間アスペクト複合動詞の事象構造は下記 (48) のように示すことができる。V2 は V1 の表す動作の方向を示しており、補助的な役目を果たしているので、V2 の LCS が小さく表記されている。

(48) LCS= [[LCS1][LCS2]]

「事象の主要内容」「方向」

空間的アスペクト複合動詞は V1 の事象タイプによって 2 つに分けられる。それは「様態＋結果」タイプと「様態・結果＋結果」タイプである。「見上げる」「投げつける」などの複合動詞における V1 は様態他動詞であり、V1 に方向性が含まれていないので、V2 は V1 の動作の方向を明示する。複合動詞全体の事象タイプは V1 と同じように「様態動詞」になる。その LCS は (49) のようになる。

(49) LCS=LCS1 [x ACT <MANNER>on y]

↑
+方向

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

もう一つのタイプは「貼り付ける」「盛り上げる」などの「様態・結果＋結果」複合動詞である。V1は様態結果動詞の場合、すなわち、V1にすでに経路が含まれている場合、複合動詞の事象構造はどうなっているであろう。ここで「盛り上げる」の事象構造を見よう。「盛る」は「積み上げる」という意味であり、「上へ」という方向が含まれている。「盛る」のLCSは下記のようなものである。

(50) 「盛る」のLCS: [x ACT <stacking>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <UP>]]

「盛り上げる」における「上げる」は「上へ」という方向を表すようになっているので、「上げる」は「盛る」にすでに含まれている「上へ」という方向を繰り返し表しており、「上へ」という変化結果が強調されると考えられる⁵⁵。結果的に、「盛り上げる」は「方向」が強調されている「様態結果」複合動詞になる。「盛り上げる」のLCSを(51)のように表す。

(51) LCS : LCS1[x ACT <stacking>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <UP>]]
↑
LCS2 [UP]
 →LCS: [x ACT <stacking>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <UP>]]

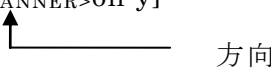
これを一般化すると、「様態・結果＋結果」タイプの空間的アスペクト複合動詞の事象構造を以下のように表す。

(52) LCS: LCS1 [[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]
↑
LCS2<state>
 →LCS: [x ACT <stacking>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]
 EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)
 E2=e2 (y) :state

⁵⁵ 斎藤(1992:318)に指摘されているように、「本来入れなくてもいい要素をわざわざ入れてもう一度その要素を繰り返すことによって、そこに力点が置かれていることを示す」。その要素を強調する役割をしている。

以上は空間アスペクト複合動詞の事象構造について考察してみた。それを表 5-5 のようにまとめる。

表 5-5：空間的アスペクト複合動詞の事象構造

事象タイプ	語例	事象構造
様態＋結果	見上げる 投げつける	LCS: [x ACT <MANNER>on y]  EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)
様態・結果 ＋結果	盛り上げる 貼り付ける	LCS: [[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <state >]] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state

5.5.4 空間的アスペクト複合動詞の自他交替

第 4 章で取り上げられている (53) のような複合動詞は空間的アスペクト複合動詞に属すると考えられるので、本節で第 4 章で提出した仮説を空間的アスペクト複合動詞から論証する。なお、(54) ～ (57) はこれらの複合動詞を用いる例文である。

(53) 貼り付ける—貼り付く、巻き付ける—巻きつく、
吊り下げる—吊り下がる、盛り上げる—盛り上がる…

(54) a. 封筒に切手を貼り付けた。(広辞苑)

b. 封筒の紙から切手は剥しておらず、貼りついたままの状態です。

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1329328993)

(55) a. 彼らは天井にランプを吊り下げた。(『複合動詞レキシコン』)

b. 天井から花が吊り下がっている。(『複合動詞レキシコン』)

(56) a. 糸を手に巻きつけて使用するタイプのものと、ホルダータイプのものです。

(用例データベース)

b. そこで彼の腕に金属の糸が巻きつく。

(57) a. わがやの芝生に、朝になると地中から土を地上に盛り上げる害虫 (ミミズ?)

がいて、これを歩いて踏んでしまうとその部分の芝生が傷みます。

<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/4458917.html>

- b. ミミズなら小さいブドウの房のような土の塊が出来ますが雨上がり以外には見られません周りの土が盛り上がることはありません

<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/4458917.html>

本稿では V2 の語彙的意味の希薄化がこれらの複合動詞の自他交替と密接に関わると仮説しているが、それを議論する前、他の可能性も探してみたい。5.5.1 節で「貼り付ける」「巻きつける」「盛り上げる」における V2 の語彙的意味の希薄化について考察したが、ここで「吊り下げる」も含めて改めてこれらの複合動詞の特徴を詳しく考察したい。よく観察すると、上記した例は以下のような特徴を共有していると考えられる。

- (58) a. これらの複合動詞の語彙化タイプは「様態・結果+結果」である。
b. V1 と V2 に意味の重なりがある。
c. これらの複合動詞はいわゆる空間的アスペクト複合動詞であり、V2 は方向を表している。

まずこれらの複合動詞において、V1 は「様態・結果」動詞であることを改めて確認しよう。「様態性」について (59) ① (59) ②のようなテストで判断する。

(59) ①.様態の否定：

- a. *太郎は封筒に切手を貼ったが、筋肉は全然動かなかった。
b. *太郎は糸を手に巻いたが、筋肉は全然動かなかった。
c. *太郎は土を盛ったが、筋肉は全然動かなかった。
d. *太郎は蚊帳を吊ったが、筋肉は全然動かなかった。

②.主語の選択制限：

- a. 人/糊/ *自然力が切手を貼った。
b. 人/ *自然力が糸を手に巻く。
c. 人/ *自然力が庭に土を盛る。

- d. 人/*自然力が蚊帳を吊る。

第3章で、「様態」については、「様態の否定」、「主語の選択」などといった判断テストを提出している。上記した判断テストにより、「貼る」「巻く」「盛る」「吊る」などといった動詞は「様態」が指定されているということが分かってきた。また、これらの動詞の「結果性」については、下記(60)①(60)②という二つのテストを行う。

(60) ①.変化結果の否定：

- a. *封筒に切手を貼ったが、切手はまだもとのところにある。
- b. *糸を手巻いたが、糸はまだもとのところにある。
- c. *土を盛ったが、土はまだもとのところにある。
- d. *蚊帳を吊ったが、蚊帳はまだもとのところにある。

②「二」格の着点句/結果構文/テアル構文⁵⁶：

- a. 封筒に切手を貼る。

手紙やはがきに貼ってある切手は交換できますか

<http://www.post.japanpost.jp/question/38.html>

- b. 糸を手巻く。

糸が巻いてあるプラスチックの丸い棒

http://www.sakae-trading.co.jp/online_shop/threadholder.html

- c. 庭に土を盛る。

土を高く盛る。

- d. カーテンをレールに吊る。 (用例)

天井に吊ってある丸い蛍光灯→

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11114340011

(60) (60) ①から分かるように、「貼る」「巻く」「盛る」「吊る」などの動詞は「結果」が否定できない。そして、(60) ②では、これらの動詞は「二格」の着点句、「テアル」構文

⁵⁶ 影山(1996)によると、この構文は対象物が状態変化を起こし、その結果状態が残ることを意味する。「テアル」構文に適合する場合、普通「結果」を含意すると考えられる。

とも共起できる。これにより、これらの動詞は「結果」が指定されていると認定できる。

以上、「貼る」「巻く」「盛る」「吊る」といった動詞は「様態」と「結果」両方が指定されていることについて判断テストによって明らかにされた。しかし、「様態・結果+結果」タイプの複合動詞だからといって、自他交替できるわけではない。例えば、「切り落とす」「切り倒す」「巻きいれる」なども「様態・結果+結果」タイプの複合動詞であると考えられるが、(61)のように、「切り落とす、切り倒す、巻きいれる」などのような「様態・結果+結果」タイプの複合動詞は自他交替しない。

(61) 切り落とす－*切り落ちる 切り倒す－*切り倒れる 巻きいれる－*巻き入る

3.5.2 節で論じたように、これらの複合動詞においては、V1 は本来「様態」と「結果」両方を含んでいるが、V2 の「変化結果」と一致しないため、「一義的経路の制約」に違反しないように、V1 の「変化結果」は後退し、「様態」だけを表すようになっている。すなわち、これらの「様態・結果+結果」タイプの複合動詞は結局「様態+結果」と同じようになる。このように、「様態」と「結果」両方が指定され、V1 は V2 の様態を指定している複合動詞は自他交替できない。

そこで、「貼り付ける」などの複合動詞の第二の特徴を考えてみよう。それは、V1 と V2 に意味の重なりがあることである。「V1 と V2 は意味の重なりがある」を検証するために、動詞の意味を辞書で調べると、下記のような解釈が出てくる。

(62) a. 「貼り付ける」:

「貼る」: 平たくのばして、糊・釘等で他の物につける。(広辞苑)

糊などをつけて物を平らな面に付着させる。(明鏡)

「付ける」: ぴったりとくっつけて離れない状態にする。(明鏡)

b. 「巻きつける」

「巻く」: 物のまわりにひも状・帯状の物などをしっかりとからみつける。(明鏡)

「つける」: ぴったりとくっつけて離れない状態にする。(明鏡)

c. 「吊り下げる」

「吊る」: 上部や両端をひもなどで固定して垂れ下げ、一定の高さに保つ。吊り下げる。

(明鏡)

上で支えて下へ垂れ下げる (大辞林)

「下げる」：ある場所にかけて垂らす。つるす。ぶらさげる。(大辞林)

吊るす。ぶら下げる。(広辞苑)(明鏡)

d. 「盛り上げる」

「盛る」：高く積み上げる。盛り上げる。(明鏡)

高く積み上げる。(大辞林)

辞書で記述されているこれらの動詞の意味をみると、これらの複合動詞において、V1 と V2 は意味が重なっているということが分かる。

これらの「様態・結果+結果」タイプの語彙的複合動詞において、V1 と V2 の変化結果が一致しているので、「一義的経路の制約」と一致しており、V1 の変化結果が後退せずに保持されている。そして、5.3.3 節と 5.5.1 節で論じたように、これらの複合動詞は「テ形」接続と言い換えられないこと、V2 が V1 の意味の一部の複製であるということから、V2 が語彙的意味が希薄化していると認め、空間的アスペクト複合動詞と名づけた。しかし、(63) のように、空間的アスペクト複合動詞がすべて自他交替できるわけではない。このことから、単に V2 が語彙的意味が希薄化していることだけにより、自他交替を説明することができないということが分かってきた。

(63) 空を見上げる－*空が見あがる

羊を丘の上に追い上げる－ *羊が丘の上に追いあがる

ここまで「貼り付ける」のような空間的アスペクト複合動詞の三つの特徴について分析した。ここで、三つの特徴を (64) に再掲する。

(64) a. 語彙化タイプ：様態・結果+結果

b. V1 と V2 に意味の重なりがある

c. 空間的アスペクト複合動詞：V2 は方向を表している、

a の条件を満たしている「切り倒す」などの複合動詞は自他交替できない、また c 「見上げる」のような空間的アスペクト複合動詞は自他交替できないということから、どれ一

つだけから自他交替を説明するのは無理であり、これらの特徴を総合的に考え、これらの複合動詞の全体の事象構造から分析する必要があると分かる。(64)の特徴を持っている空間的アスペクト複合動詞の事象構造は前節で提示したが、ここで再度見てみよう。

(65) 複合動詞の LCS:[LCS1][LCS2]

V1[[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

↑
V2 <state> 方向性

→[[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=e2* (y) :state

(65) に示されているように、V1 は複合動詞の事象内容を表しており、様態が指定されている起因事象と結果事象という使役事象を持っている。V2 は結果動詞であるが、語彙的意味が「方向」へと希薄化しているとみなしているため、便宜上、<state>で示す。V2 が V1 に含まれていて変化結果を繰り返すことにより、その変化結果は強調されていると考えられる。本稿では、変化結果は強調されていることはそこに焦点が置かれており、変化結果は焦点化されると考えているため、結果事象に焦点化の印(*)をつけている。このように、複合動詞全体は「起因事象」と「結果事象」という使役事象を持っており、そして、結果事象が焦点化されている。

ここで、「巻きつける」を例として、これらの複合動詞において、結果事象が焦点化されているということは実例で説明する。例えば、次の例を見てみよう。

(66) a. 腕に包帯を巻く。

b. 腕を包帯で巻く。

(67) a. 腕に包帯を巻きつける

b. *腕を包帯で巻きつける

(66) はいわゆる「壁塗り交替」と呼ばれる交替現象である。岸本(2011)によると、壁塗り交替が可能な動詞は、主題(材料)の移動と場所の状態変化の二つの意味を表すことができる動詞である(岸本 2011:34)。(66)における「巻く」は移動物の移動と場所の

状態変化両方を表すことができるので、壁塗り交替に適用できる。(66) a は「包帯」という移動物の移動に焦点を当てているのに対して、(66) b は「腕」という場所の状態変化に注目している。これに対して、(67) に示されているように、「巻きつける」は壁塗り交替できない。このような現象について、岸本 (2008,2011) は「つける」を付け加えることによって、複合動詞全体は「移動物の移動」に注目するようになっているためであると説明している。ここで、壁塗り交替について詳しく論じないが、要は「巻き付ける」は「移動物の移動」に注目しているという点である。「巻く」の事象構造は (68) の通りである。起因事象は「包帯をぐるぐる回す」ことであり、結果事象は「包帯をどこかにつける」(移動物の移動) ということを表している。

(68) 巻く : LCS:[[[x ACT <winding >on y]CAUSE[y BECOME BE AT<stuck>]]

結果事象 (～につける)

「巻く」の事象構造から見れば、「移動物の移動」は「結果事象」に相当する。「巻き付ける」は「移動物の移動」に注目しているということは「結果事象に注目している」ということになる。

以上で簡単ながら、「巻き付ける」という複合動詞で結果事象が焦点化されているという点について説明した。本節の冒頭で取り上げられている例のように、このような事象構造を持っている「巻きつける」「貼り付ける」といった複合動詞は自他交替できる。これに対して、「見上げる」のような空間的アスペクト複合動詞は (69) に示されているように、起因事象しか持っていない様態動詞であるため、自他交替できない。

(69) LCS= [x ACT <MANNER>on y]

↑
方向

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

以上のように、空間的アスペクト複合動詞において、V1 は「様態」と「結果」両方を持っている動詞であり、V2 は V1 に含まれている「結果」を強調する場合、結果事象が焦点化され、自他交替が可能になる。これにより、第 4 章で提出した仮説は空間的アスペクト複合動詞から論証できた。

5.5.5 時間的アスペクト複合動詞の事象構造

5.5.2 節で述べたように、時間的アスペクト複合動詞はこれまで補文関係複合動詞として様々な研究がなされてきた（影山 1996、由本 2005 など）が、その事象構造はまだ明らかにされていない。本節では、時間的アスペクト複合動詞の意味的特徴と統語的特徴を考察した上で、時間的アスペクト複合動詞の事象構造を提示する。

時間的アスペクト複合動詞において、V2 は本来の語彙的な意味が希薄しており、時間的アスペクトを表すようになっており、複合動詞全体の意味の中心が V1 にあると考えられる。この点について、下記（70）のテストからも判断できる。

（70）セーターを編み上げたのですか。

（○）はい、編みました。（*）はい、上げました。

以上のように、複合動詞「編み上げる」全体が伝えたい意味の重点は V1「編む」にある。他の時間的アスペクト複合動詞も同じことがいえるであろう。

次は時間的アスペクト複合動詞の統語的素性を考察する。5.5.1 節で考察したように、時間的複合動詞において、V2 は名詞に格支配能力を喪失しているので、統語的な中心も V1 になっている。影山（1993）や由本（2005）に指摘されているように、補文関係複合動詞において、V2 が Event 項を取り、その Event 項に V1 の LCS が埋め込まれている。V1 と V2 の項の同定は自動的に起こり、主語が同定され、V1 の目的語が複合動詞全体の目的語になり、V1 の下位範疇化素性が複合動詞に受け継がれる。

このように、時間的アスペクト複合動詞において、V1 は事象の内容を表しており、つまり、どのようなことが起こるかを表している。V2 は事象の時間的アスペクトを表しており、つまり、当該事象の展開の仕方を表す。これを図 5-6 で示す。

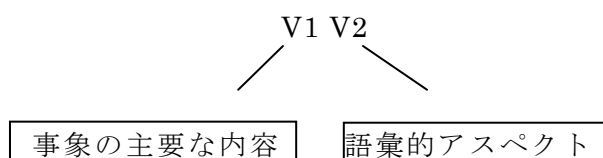


図 5-6：時間的アスペクト複合動詞の事象構造

これにより、時間的アスペクト複合動詞の LCS は空間的アスペクトと同じように、(71) のように表すことができる。V2 は時間的アスペクトを表しており、V1 の表す事象内容に補助的役割を果たしているため、小さく表記されている。

$$(71) \text{ LCS} = [[\text{LCS1}[\text{LCS2}]]$$

事象内容 時間的アスペクト

本稿で、影山（2012）にしたがって、時間的アスペクトを [L-Asp](lexical aspect) と表記する。(71) を (72) のように示す。

$$(72) \text{ 時間的アスペクト複合動詞の LCS : } [[\text{LCS1}][\text{L-Asp-Z}]]$$

V2 が表す時間的アスペクトには「完了」（例えば、「降り止む」、「編み上げる」「煮詰める」など）、「継続」（降りしきる）、「習慣」（言い習わす、書き習わす）、「強調」（困り果てる、腐りきる）などがある。これらの時間的アスペクトを [L-Asp] で示すと、(73) のようになる。

$$(73) \begin{array}{ll} \text{開始 : } [[\text{L-Asp INCHOATIVE}]] & \text{継続 : } [[\text{L-Asp CONTINUATIVE}]] \\ \text{完了 : } [\text{L-Asp COMPLETIVE}] & \text{反復 : } [\text{L-Asp ITERATIVE}] \dots \end{array}$$

V2 の表すアスペクトの情報も含めて、「編み上げる」を例に、時間的複合動詞の事象構造は下記 (74) のように示すことができる。

$$(74) \text{ 「編み上げる」 の LCS : } [[\text{LCS1}][\text{L-Asp-Z}]]$$

$$[[\text{x ACT <MANNER>on y}] \text{CAUSE}[\text{z BECOME BE AT <MADE>}]] [\text{L-Asp COMPLETIVE}]$$

しかし、時間的複合動詞の事象構造は (74) で済ませるわけではない。もうひとつ考える必要があるのは、V2 の V1 のどの事象を取り立てるかということである。V2 は V1 の事象の一部を取り立てることによって、複合動詞全体の事象構造に影響を与えられらる。V2 は V1 の何らかの事象を取り立てるが、どの事象を取り立てるかは動詞によって異

なる。例えば、長谷部（2012）に指摘されているように、「完遂」を表す「～果てる」は主に到達動詞（本稿でいう結果自動詞と対応する）と共起し、変化結果を取り立てる。「動作の反復の強調」を表す「～倒す」は活動動詞（本稿の様態動詞）と結合し、活動を取り立てる。「編み上げる」において、「上げる」は「完了」アスペクトであり、「編む」の表す事象の一部を取り立てる。だが、「編む」は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っているが、「上げる」は「編む」の「結果事象」を取り立て、変化の完了を表す。これについて、5.5.6 節で詳述するが、ここで言っておきたいのは、「上げる」は結果事象を取り立てることにより、複合動詞全体は「結果事象」が焦点化されるような事象構造を持つようになっている。すなわち、V2 は具体的な事象内容を表していないが、V1 の事象を取り立てることによって、複合動詞の事象構造に影響を与えている。(74) の「編み上げる」の事象構造を正確に書くと、(75) のようになる。「編み上げる」については、5.5.6 節で詳しく議論する。

(75) 「編み上げる」の LCS : [[LCS1][L-Asp-Z]]

[[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[z BECOME BE AT <MADE>]] [L-Asp COMPLETIVE]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) ↑

E2=e2* (z) :state

以上議論したように、時間的アスペクト複合動詞の事象構造は三つの部分を含むと考えられる。一つはV1の事象構造であり、これは複合動詞の事象の主要な内容を表す。一つはV2の時間的アスペクトを表す事象構造であり、これは複合動詞の事象の展開の仕方を表す。一つはV2がどの事象を取り立てるという情報である。これについては、これ以上深入りしないが、次節の自他交替についての議論からも窺える。

5.5.6 時間的アスペクト複合動詞の自他交替

本節は時間的アスペクト複合動詞の自他交替について考える。まずは第4章で取り上げられている例を観察してみよう。

(76) 編み上げる－編み上がる、煮詰める－煮詰まる、売り切る－売り切れる

これらの複合動詞における V2 は語彙的意味が希薄化し、時間的アスペクトを表すようになっている。これまで語彙的複合動詞の自他交替についての分析から考えると、時間的アスペクト複合動詞では、V1 と V2 は何らかの操作を通して、「結果事象」が焦点化されれば、自他交替が可能になるということを予測できる。では、次はそれぞれの例を詳しく分析していく。

分析例 1：「編み上げるー編み上がる」

「編み上げる」において、「編む」は作成動詞であり、「上げる」は「完了」というアスペクトを表している。「作成動詞」は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っている。その事象構造を (77) のように示すことができる。これにより、「編み上げる」の LCS は (78) のようになる。

(77) 作成動詞：[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]]

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=e2 (z) :state

(78) 「編み上げる」の LCS:[LCS1][L-Asp-Z]

[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]][L-Asp Completive]

起因事象

結果事象

完了

5.5.5 節で少し触れたが、時間的アスペクト複合動詞において、V2 は V1 の何らかの事象を取り立てることにより、V1 の事象構造に影響を与えている。ここでは、「編む」は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っているが、「上げる」は「結果事象」を取り立てることにより、「結果事象」が焦点化されると主張したい。これについて、以下のように論じる。

「作成動詞」は同じ文脈で「材料」と「生産物」両方を取ることができる。例えば、(79) のような例である。

(79) a. 毛糸を編む セーターを編む

b. 米を炊く ご飯を炊く

- c. 糸を織る 布を織る
- d. 木を彫る 熊を彫る

「糸でセーターを編む」という事象では、「糸」は「材料」であり、「セーター」は「生産物」である。この事象を言語化する際、(79) a のように、「糸を編む」も言えるし、「セーターを編む」も言える。「材料」を内項に取る場合、「起因事象」に焦点を当てており、「生産物」を内項に取る場合、「結果事象」に焦点を置いていると思われる。つまり、作成動詞は「起因事象」にも「結果事象」にも焦点を当てることができる。しかし、(80) に示されているように、これらの作成動詞は「上げる」と組み合わせさせて複合動詞になると、同じ文脈で「生産物」しかを内項に取ることができない。つまり、「結果事象」だけに焦点を置くことができる。これによって、「作成動詞＋上げる」は「結果事象」が焦点化されるといえるであろう。

- (80) a. 毛糸を編む セーターを編む
 —*毛糸を編み上げる セーターを編み上げる
- b. 米を炊く ご飯を炊く
 —*米を炊き上げる ご飯を炊き上げる
- c. 糸を織る 布を織る
 —*糸を織り上げる 布を織り上げる
- d. 木を彫る 熊を彫る
 —木を彫り上げる *熊を彫り上げる

以上から分かるように、「作成動詞＋上げる」複合動詞において、「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っているが、「結果事象」が焦点化されている。その事象構造を(81) のように示す。

(81) 「作成動詞＋上げる」：

[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]] [L-Asp Completive]

↑
結果事象を取り立てる

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

$$E2=e2^* (z) :state$$

このため、このような複合動詞は自他交替が成立する。例えば、次（82）のような例である。

- (82) 編み上げる－編み上がる 炒め上げる－炒めあがる 織り上げる－織り上がる
 炊き上げる－炊き上がる 煮上げる－煮あがる 縫い上げる－縫いあがる
 塗り上げる－塗りあがる 彫り上げる－彫りあがる 蒸し上げる－蒸しあがる
 焼き上げる－焼きあがる 茹で上げる－茹で上がる...

このように、「作成動詞＋上げる」複合動詞は「起因事象＋結果事象」という使役事象を持っており、そして、結果事象が焦点化されているため、自他交替が成立する。これは本節で予測した通りである。この点は以下のような作成動詞以外の動詞を V1 に取る「～あげる」複合動詞が自他交替しないことから裏付ける。

- (83) 調べ上げる－*調べあがる 数え上げる*数えあがる 勤め上げる－*勤めあがる

これらの複合動詞において、V1 は「様態他動詞」（活動動詞）であり、「あげる」は「作業活動の完了」を表す。事象構造で以下のように示す。

- (84) 「様態他動詞＋上げる」 LCS:[[x ACT][L-Asp Completive]] （活動の完了）

$$EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)$$

V1 は上位事象しか持っておらず、「上げる」はその上位事象を取り立て、複合動詞全体は上位事象が焦点化されているため、これらの動詞は当然自他交替できない。

以上は「作成動詞＋上げる」複合動詞の自他交替を「結果事象の焦点化」という角度から分析した。以下、引き続き同じ観点から他のアスペクト複合動詞を見てみよう。

分析例 2：「煮詰める－煮詰まる」

「煮詰める」において、「煮る」は作成動詞であり、起因事象と結果事象という使役事象

を持っている。「詰める」は「完了」という時間的アスペクトを表している。では、「煮詰める」という複合動詞全体はどのような事象構造を持っているのであろう。ここでも、「詰める」は「煮る」の「結果事象」を取り立てることによって、複合動詞全体は「結果事象」が焦点化されると主張する。これについて、二つの現象を取り上げて説明する。一つは分析例 1 に述べられている現象であり、即ち、「材料」と「生産物」のどちらを内項にする現象である。もう一つは「煮詰める」と「煮込む」との対照である。

「煮る」は「作成動詞」であり、上述した「編む」と同じように、「材料」と「生産物」両方を内項に取ることができる。例えば、「お肉でスープを煮る」ということを表す場合、以下の二つの言い方ができる。

(85) お肉を煮る スープを煮る

しかし、同じことを「煮詰める」で表すと、「スープを煮詰める」⁵⁷しか言えない。これにより、「煮詰める」において、「結果事象」が焦点化されていると考えられる。この点は、「煮込む」と対照してより一層明らかになる。姫野（1999）によると、「煮込む」において、「込む」は「時間をかけてその行為を重ねる」という「累積化」を表している。「煮詰める」と「煮込む」のそれぞれの意味は下記の通りである。

(86) a. 煮込む：煮汁を多くして時間をかけて煮る。

b. 煮詰める：水分がなくなるまで煮る。

(明鏡)

辞書に記載されている意味から分かるように、「煮込む」は時間を掛けて十分に煮るという過程に注目するのに対し、「煮詰める」は時間をかけて水分のなくなるという状態変化の結果に注目している。(87) の例を見てみよう。

(87) a. 彼女は 1 時間ほど リンゴを煮詰めた。(『複合動詞レキシコン』)

⁵⁷ 「スープを煮詰める」では、ただ「スープができる」だけではなく、「水がなくなるまで煮る」という意味合いを含んでいる。「お肉を煮詰める」という表現もあるが、それは「お肉でスープを作る」ということを表すのではなく、ただ水分がなくなるまでお肉を煮るということを表す。

b. 彼女は 1 時間ほどリンゴを煮込んだ。(作例)

(87) a 「リンゴを煮詰めた」は水分がなくなるまでリンゴを煮るという意味である。即ち、リンゴの変化結果に焦点を当てている。これに対して、(87) b 「リンゴを煮込む」はただ時間をかけて煮るという過程に注目しており、リンゴはどのような状態になるのかは焦点ではない。

5.5.5 節で V2 は V1 のどの事象を取り立てるかということは動詞によって異なると述べた。(86) の二つの複合動詞の意味の区別は以下のように解釈できると考えられる。「煮る」はもともと「起因事象」と「結果事象」両方を持っているが、「込む」と組み合わせる場合、「込む」は「起因事象」を取り立て、「煮込む」は「煮る」過程に重点を置いている。一方、「詰める」は「結果事象」を取り立て、「煮詰める」は変化結果に注目する。このため、「煮込む」「煮詰める」の事象構造をそれぞれ (88) a (88) b のように示すことができる。

(88) a. 煮込む:

[[x ACT<MANNER> ON y] CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]]] [L-Asp Accumulative (累積)]

↑
起因事象を取り立てる

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

b. 煮詰める:

[[x ACT<MANNER> ON y] CAUSE [z BECOME BE AT-MADE]] [L-Asp Completive]

↑
結果事象を取り立てる

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner)

E2=e2* (z) :state

以上で論じたように、「煮詰める」では、「起因事象」と「結果事象」両方を含んでいるが、結果事象が焦点化されているため、自他交替が成立する。

分析例 3: 「売り切る—売り切れる」

「売り切る」における「切る」は「切断」という具体的な動作を表す語の意味が転用され、完遂を意味するようになっているため、これも時間的アスペクト複合動詞である。

まず V1「売る」についてであるが、「売る」は所有変化を表す動詞であり、品物が売り手から離れ、買い手に渡るという意味であり、「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っていると考えられる。

次は V2「切る」を考察しよう。杉村（2008:72）は接辞的な「～切る」を3つに分類し、基本的に前項動詞が動作動詞の場合は「食べきる」、「走りきる」のように「行為の完遂」を表し、変化動詞の場合は「諦め切る」、「治り切る」のように「変化の達成」を表し、状態動詞の場合は「疲れ切る」、「冷え切る」のように「極限状態」を表すと指摘している。「～切る」自体は当該の事態が 100 パーセント達成すること（裏を返せば残余がゼロになること）を表すと述べている。

「売る」は「起因事象」と「結果事象」両方を持っている。このような動詞は「切る」とくっつくと、「動作の完遂」と「変化の完遂」両方を表すことができると思えるが、実際「売り切る」は「変化の完遂」だけを表す。これは「売りぬく」と比べると分かる。「売りきる」と「売りぬく」の意味は次のようである。

(89) 売りきる：品物が全部はけることを意味する

売りぬく：一貫して売り続けることを表している。

（姫野 1999:173）

(90) 新聞を売り切った。→新聞がなくなった。→変化の完了

新聞を売りぬく。→一貫して売り続ける。→動作の継続

姫野（1999）によると、「切る」、「ぬく」両方とも具体的な動作から完遂を意味するようになったものであるが、(89) (90) に示されているように、「売り切る」と「売りぬく」の意味が違う。「売り切る」は「品物が全部はける」という意味であり、重要なのはその品物が売り手から全部離れるという変化結果である。これに対して、「売りぬく」では、品物はどうなるかに無関心であり、「一貫して売り続ける」ことを表している。姫野は意味の違いの原因について言及していないが、その原因は「切る」と「ぬく」は「売る」の異なる事象を取り立てることに求められると考えられる。

「売り切る」において、「切る」は「売る」の結果事象を取り立て、その変化が 100% 達成することを表す。事象構造で (91) のように示す。

(91) 「売り切る」:

[[[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT-SOLD]][L-asp Completive]]

結果事象を取り立てる

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

E2=e2* (y) :state

これに対して、「売りぬく」では、「ぬく」は「売る」の起因事象を取り立て、「売る」行為の継続を表す。これを (92) のような事象構造で示す。

(92) 「売りぬく」:

[[[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT-SOLD]][L-asp Completive]]

起因事象を取り立てる

EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process

このように、「売り切る」において、「起因事象」と「結果事象」両方を持っているが、「結果事象」が焦点化されている。このため、自他交替が可能になる。

以上は具体例の分析を通して、時間的アスペクト複合動詞の自他交替についての分析である。時間的アスペクト複合動詞の場合、V1 は複合動詞全体の意味の中心であり、即ち、どんな事態が起こったということを表す。V2 は V1 の事象のアスペクトを表す。即ち、当該事態がどの段階にあるのかを表す。V1 は「起因事象」と「結果事象」という複合事象を持っており、V2 は V1 の「結果事象」を取り立てる場合、複合動詞全体は結果事象が焦点化され、自他交替が可能になる。これにより、第 4 章で提出した仮説も論証できた。

5.5.7 強調機能複合動詞

本節で、V2 が強調を表す複合動詞について簡単に分析する。V2 が強調機能を果たしている複合動詞も補文関係複合動詞として扱われている。例えば、姫野 (1999:181) によると、(93) の「困り切る」における「切る」は「V1 の変化が進み、それ以上はないというほどの究極まで達することを表す」。「困りきる」は「「困る」ということが「切る」(極端)」

という意味であり、V1 と V2 は補文関係をなす。

(93) 彼らは彼の態度に困り切っていた。

このような V2 が V1 に強調を付け加える複合動詞は、空間的アスペクト複合動詞、時間的アスペクト複合動詞と同じように、V1 は複合動詞の意味的、統語的な中心である。例えば、(94) に示されているように、「困りきる」という複合動詞が伝えたい意味の中心は「困る」である。そして、(95) のように、V1 は統語的な中心にもなる。

(94) 彼らは彼の態度に困りきっていたのか。

(○) はい、困りました。 (×) はい、きりました。

(95) 彼の態度に困りきっている。

(○) 彼の態度に困る (×) 彼の態度に切る

強調機能複合動詞において、V2 は V1 の表す事象内容の程度の高さを強調するだけであり、V1 の事象構造に影響を与えていない。従って、複合動詞全体の事象構造は V1 とあまり変わらない。本稿では強調機能複合動詞の事象構造を (96) のように示す。

(96) 強調機能複合動詞の LCS = [LCS1]

強調機能複合動詞において、V2 の語彙的意味が完全に喪失しており、複合動詞の事象構造に参加していないので、その統語的素性（自他性）も複合動詞全体と関係なくなる。

(97) に示されているように、複合動詞の自他性は V1 と一致している。このため、強調機能複合動詞は自他交替現象と無縁である。

(97) a. 太陽は照りつける。 (自動詞 + 他動詞 → 自動詞)

b. 彼は困りきっている。 (自動詞 + 他動詞 → 自動詞)

5.5.8 5.5 節のまとめ

5.5 節で、先行研究で補文関係複合動詞と呼ばれているものを「空間的アスペクト複合動詞」、「時間的アスペクト複合動詞」、「強調機能複合動詞」という三つに分けて考察し、それぞれの事象構造を提示した上で、自他交替について分析してみた。従来、補文関係複合動詞において、V1 の自他性が複合動詞に受け継がれるとされている。しかし、本稿で考察した自他交替する補文関係複合動詞から分かるように、V2 は複合動詞の事象構造に影響を与える場合、V2 の自他性は複合動詞に受け継がれることがある。V2 の語彙的意味が希薄化した場合、複合動詞の事象構造と自他交替を表 5-6 にまとめる。

表 5-6 : V2 の語彙的意味が希薄化した場合の事象構造と自他交替

意味変化段階	事象構造	自他交替	
第一段階 (動作)	CVLCS:[LCS1][LCS2] →[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]] EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	×	
第二段階 I 空間的アスペクト	CVLCS:[LCS1] [LCS2] ①[x ACT <MANNER>on y][Dir] (見上げる) EVENTSTR=E1=e1* (x,y) :process (+Manner) ②[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]][Dir] (貼り付ける) EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	×	○
第二段階 II 時間的アスペクト	CVLCS:[LCS1][L-Aspz] (編み上げる、売り切る) →[x ACT <MANNER>on y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]][L-Aspz] EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	○	
第三段階 (強調機能)	CVLCS:[LCS1] (困りきる)	×	

本章は文法化の理論を援用し、語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化について考察した上で、複合動詞の事象構造を提示し、自他交替について分析してみた。それを次の表にまとめる。

表 5-7: 複合動詞における語彙的意味の希薄化と自他交替

自他交替例	希薄化	事象構造	要因
花火を打ち上げる ー花火が打ち上がる	V1	V1: [[x ACT ON y] CAUSE[yBECOME BE AT<state>]] V2: [x ACT<MANNER>ON y] →V1V2: [[x ACT ON y] CAUSE <u>[y BECOME BE AT<state>]]</u> EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (-Manner) E2=e2* (y) :state	様態の 希薄化 による 結果事 象の焦 点化
切手を貼り付ける ー切手が貼り付いた	V2	V1: [[xACT<MANNER>ONy]CAUSE[yBECOME BE AT<state>]] V2:<state> V1V2: [[xACT<MANNER>ONy]CAUSE <u>[y BECOME BE AT<state>]]</u> EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	結果の 強調に よる結 果事象 の焦点 化
セーターを編み上げる ーセーターが編み上がる	V2	V1: [[xACT<MANNER>ONy]CAUSE[yBECOME BE AT<state>]]] V2:[L-Asp-completive] V1V2: [[xACT<MANNER>ON y] CAUSE <u>[y BECOME BE AT<state>]]]</u> EVENTSTR=E1=e1 (x,y) :process (+Manner) E2=e2* (y) :state	結果の 強調に よる結 果事象 の焦点 化

これらの語彙的複合動詞は V1 の事象タイプは異なるものの、本来、いずれも V1 は V2 の様態を指定する「様態＋結果」タイプの語彙的複合動詞である。しかし、語彙的意味の希薄化により、いずれも本来の事象構造に変化が起こっている。具体的な操作は異なるが、これらの自他交替する複合動詞は最終的に似ている事象構造を持つようになっている。それは「起因事象」と「結果事象」を持っており、「結果事象」が焦点化されるという事象構造である。「打ち上げる」などのような V1 の語彙的意味が希薄化している複合動詞は、V2 への手段の指定がなくなるのによって、結果事象が焦点化されるようになっている。一方、「貼り付ける」のような空間的アスペクト複合動詞及び「編み上げる」のような時間的アスペクト複合動詞は V2 の語彙的意味が希薄化しており、「結果事象」を強調するのによって、結果事象が焦点化されるようになっている。これによって、第 4 章で立てられた次のような仮説が成立するといえるであろう。

- (98) V1 あるいは V2 の意味変化により、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞は「結果事象」が焦点化されるように事象構造が変化した場合、自他交替が可能になる。

第 6 章 結論

本章では各章の内容をまとめ、本論文の意義と今後の課題を述べる。

6.1 論文内容のまとめ

6.1.1 各章の概要

本稿の研究目的は語彙的複合動詞の自他交替現象を解明するということである。語彙的複合動詞の自他交替について、本稿は語彙意味論的枠組みに基づいて、語彙化の角度から論じた。語彙的複合動詞は単純動詞と同じように語彙化された一語であり、パラレルな事象構造を持っているため、自他交替も同じメカニズムが働いていると主張した。全体の流れとしては、第 3 章で V1、V2 の本義が生きている場合の語彙的複合動詞の事象構造を提示し、第 4 章では、そのような事象構造を持っている語彙的複合動詞の自他交替について分析した。ほとんどの複合動詞は「様態＋結果」という構造を持っているため、自他交替できない。第 5 章では、語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化について考察し、語彙的意味が希薄化した場合、本来の「様態＋結果」という語構造に変化が起こり、自他交替が成立する可能性があるということを論じた。では、次はもう少し詳しく各章の概要をまとめる。

第 3 章では、語彙的複合動詞の語形成について分析し、語彙化の角度から語彙的複合動詞の事象構造を提示した。まず語彙的複合動詞は語彙化された一語であることについて述べた。語彙的複合動詞は形態的緊密性を持っており、意味の慣習化と語彙的選択制限を備えている。そして、V1 と V2 の意味関係がいくつかに限られているように、一つのまとまった事象を持っている。このように、語彙的複合動詞は語彙化された一語であると考えられる。次に語彙化された一語の事象構造と表す可能な意味について論じた。判断テストに基づいて、日本語で単純動詞が表す可能な意味は「様態」（例えば、「叩く」）、「結果」（例えば、「壊す」）「様態＋結果」（例えば、「貼る」）であることを明らかにし、それぞれの事象構造を提示した。最後にデータベースからデーターを収集し、語彙的複合動詞の語彙化タイプを「様態＋結果」「様態＋様態」「結果＋結果」にまとめ、それぞれのタイプの複合動詞の事象構造を提示した。「様態＋結果」タイプの複合動詞は例えば「叩き壊す」「切り落とす」のようなものがあり、単純動詞の様態・結果動詞と近似している。「様態＋様態」タイプの複合動詞（飛び跳ねる、持ち歩く）は全体的に上位事象だけを持っている様態動

詞になる。「結果＋結果」タイプの複合動詞（折り曲げる、焼け焦げる）は結果事象だけを持っている結果動詞になる。このように、語彙的複合動詞は単純動詞と同じように語彙化された一語であり、単純動詞と平行な事象構造を持っているということを論じた。

第4章では、第3章で明らかにされた語彙的複合動詞の事象構造に基づき、語彙的複合動詞の自他交替について議論した。「動詞の意味がその統語的ふるまいを決定する」という語彙意味論の基本的な考え（小野 2000 : 3）にしたがって、単純動詞と平行な事象構造を持っている語彙的複合動詞は単純動詞と同じ自他交替のメカニズムが働いていると考えられる。この考えに基づいて、第3章ではまず単純動詞の自他交替のメカニズムは、「起因事象＋結果事象」という使役事象を持っており、結果事象が焦点化されるということであると論じた。次に語彙的複合動詞の「起因事象＋結果事象」を持っているものを考察し、その中で「折り曲げる」など少数の「結果＋結果」タイプは結果事象だけが指定されており、自他交替できる。一方、ほとんどは「様態＋結果」タイプ（叩き壊す、切り落とす）であり、「様態」も「結果」も指定されており、自他交替できないと分析した。最後に、「花火を打ち上げる－花火が打ち上がる」「編み上げる－編み上がる」などのように、「様態＋結果」タイプでありながら、自他交替できる複合動詞を観察し、それは V1 あるいは V2 の語彙的意味の希薄化によって自他交替できるからであるという仮説を提案した。

第5章では、語彙的複合動詞における語彙的意味の希薄化について考察し、語彙的意味の希薄化が起こった場合の事象構造を提示し、語彙的複合動詞の自他交替について分析した。この章では、まず文法化の定義、特徴、メカニズムである「再分析」「類推」について紹介し、語彙的複合動詞における意味変化は文法化の特徴が見られるので、「文法化」の理論を取り入れて議論することが妥当であることについて論じた。Hopper and Traugott (2003) の「再分析」「類推」による文法化の段階の分け方を参考に、語彙的複合動詞における V1、V2 の語彙的意味の希薄化の段階分けの判断テストを提出した。次に、判断テストに基づいて、「打つ」「引く」「切る」を V1 とする語彙的複合動詞を例として考察し、V1 の語彙的意味の希薄化を三段階（本義の段階、再分析の段階、類推の段階）に分けてみた。その上で、各段階の複合動詞の事象構造を提示した。第二段階の「再分析」段階（花火を打ち上げる）では、V1 の具体的な動作様態が失われているので、V2 への手段の指定がなくなっている。このため、本来「様態＋結果」という語構造は結果だけが指定されるようになっており、自他交替が成立すると述べた。次は同じ分析の手順で V2 の語彙的意味の希薄化による複合動詞の自他交替について分析した。「～上げる」「～切る」「～付ける」

複合動詞を取り上げて例を考察し、V2 は「動作—空間—時間—質」という変化方向に沿って意味が希薄化していくということが分かった。「見上げる」「貼り付ける」「盛り上げる」などにおいて、V2 は本来の動作から空間へと意味が変化しており、V1 の表す動作の方向を表している。「貼り付ける」「盛り上げる」では、V2 は V1 にすでに含まれている方向を繰り返すことにより、変化結果が強調されると考えられる。つまり、これらの複合動詞において、結果事象が強調されているため、自他交替が成立できる。「編み上げる」「調べ上げる」などの複合動詞において、V2 は時間へと意味が希薄化しており、「完了」というアスペクトを表している。「編み上げる」では、「編む」は「起因事象と「結果事象」両方を含んでいるが、「上げる」は「結果事象」を取り立てることによって、「結果事象」が焦点化されている。このため、「編み上げる」は自他交替できると分析した。

6.1.2 語彙的複合動詞の自他交替と複合動詞の語形成

本節で本稿の全体の内容をまとめる。影山（1993）、松本（1998）、由本（2005）などの先行研究では、語彙的複合動詞の自他交替を例外扱いしているが、本稿の分析から分かるように、語彙的複合動詞の自他交替という現象は複合動詞の語形成の例外どころか、まさに複合動詞の語形成の本質を反映するそのものである。語彙的複合動詞の自他交替を通して、複合動詞の語形成は文法化、語彙化の相互作用の結果バランスが保たれて進行していくものであることが分かった。日本語の複合動詞は様態を補充するために生じたものであり、そのほとんどは「様態＋結果」という語構造を持っている。ほとんどの複合動詞は自他交替できないのはその語構造を持っているからである。少数の自他交替できる複合動詞は意味変化した産物である。

ここで、語彙的複合動詞の自他交替と語彙化、文法化の関係を簡単にまとめる。まず、語彙的複合動詞の自他交替と語彙化のかかわりを次の表にまとめてみた。

表 6-1：自他交替と語彙化⁵⁸

単純動詞	R（最も多い）	M	M+R（少数）
語彙的複合動詞	R+R→R（少数）	M+M→R	M+R（最も多い）、MR+R
自他交替	○	×	×

語彙的複合動詞は単純動詞とパラレルな事象構造を持っている。日本語の単純動詞の語彙化タイプは「様態」、「結果」、「様態＋結果」という 3 つのタイプがある。その中で、結果動詞は数が最も多いので、「様態＋結果」は最も数が少ない。結果他動詞のほとんどは自他交替できるため、自他交替できる単純動詞は数が多い。複合動詞の語彙化タイプは「様態＋結果」、「様態＋様態→様態」、「結果＋結果→結果」という 3 つであり、「様態＋結果」タイプは最も多い。「様態＋結果」タイプの複合動詞は様態と結果両方が指定されているので、自他交替できない。上位事象しか持っていない「様態」タイプの複合動詞も自他交替できない。このため、ほとんどの複合動詞は自他交替しない。

しかし、複合動詞における意味の希薄化がよく観察されている。「様態＋結果」タイプの複合動詞における V1 は語彙的意味が希薄化して、V2 への「様態」の指定がなくなった場合、複合動詞は結果だけが指定されるようになり、自他交替が可能になる。また、V2 の語彙的意味が空間へと希薄化して、V1 に含まれている変化結果の複製になり、複合動詞全体は変化結果が強調され、自他交替が成立できる。あるいは、V2 は時間アスペクトを表すようになり、V1 の結果事象を取り立てることにより、複合動詞全体は結果事象が焦点化され、自他交替が可能になる。それを表 6-2 にまとめる。

表 6-2：自他交替と文法化

	M+R	MR+R
文法化が起こっている動詞	V1	V2
事象構造	<u>M</u> +R→R（様態の希薄化による結果事象の焦点化）	MR+R→ <u>MR</u> （結果の強調による結果事象の焦点化）
自他交替	○	○

⁵⁸ ここで、便宜上、詳しい事象構造を示さず、R は結果動詞、M は様態動詞を表している。

以上のように、第 1 章で設定した三つの問題を解決できた。簡単にまとめると、次の通りになる。

(1) a. なぜほとんどの複合動詞は自他交替できないのか

ほとんどの複合動詞は「様態＋結果」タイプであり、「様態」も「結果」も指定されているため、自他交替できない。

b. なぜ一部の複合動詞は自他交替できるのか

「起因事象」と「結果事象」という使役事象を含んでおり、結果事象が焦点化されるような事象構造を持つ複合動詞は自他交替できる。V1 と V2 が本義が生きている場合は、「積み重ねる」「折り曲げる」など「結果＋結果」タイプの複合動詞しか自他交替できない。「打ち上げる」「貼り付ける」「巻き付ける」など V1 或いは V2 の語彙的意味が希薄化することによって、自他交替が可能になる。

c. なぜ自他交替できる単純動詞が多いのに対して、自他交替できる複合動詞が少ないのか

単純動詞において、最も数が多い語彙化タイプは「結果」であるのに対して、複合動詞は「様態＋結果」であるからである。

6.2 本論文の意義

本論文は三つの面で意義を有していると思われる。それは、複合動詞の語形成研究における意義、動詞の自他交替研究における意義、そして文法化研究における意義である。以下ではそれぞれについて詳しく述べる。

まず複合動詞の語形成研究における意義であるが、第 3 章で指摘したように、複合動詞は二つの動詞からなるものであるため、今まで合成的なアプローチによって分析され、語彙化の角度から、「一語」が表す可能な意味という視点から論じられたことがない。本稿では語彙的複合動詞の語形成について、語彙化の角度から、単純動詞と同じように、「一語」が表す可能な意味「様態」「結果」「様態・結果」のいずれかになるという視点から論じている。複合動詞を単純動詞と同じように「様態」「結果」から考えれば、語形成の制約や事象構造も容易に分かってくる。

そして、本稿では「様態」「結果」という角度から、単純動詞の事象構造を提示した上で、同じ表記の仕方では体系的に語彙的複合動詞の一語としての事象構造を提示した。これ

により、語彙的複合動詞の単一事象としての事象構造の全体像が見えてくる。つまり、「様態+結果」「様態+様態→様態」「結果+結果」という三つである。

また、本稿では自他交替を論じるため、語彙的複合動詞を大きく本義が生きているものと、意味の希薄化が起こっているものに分けて議論してきた。この二つの種類は連続しており、後者の多くは前者から拡張されてきたものということについて考察した。意味変化の有無による分類は寺村（1984）、山本（1984）などでも行われているが、意味変化があるものとなないものの連続性について言及されていない。

次に自他交替研究における意義であるが、語彙意味論の研究では、自他交替という現象は多くの学者の関心を集め、様々な研究成果を挙げた。しかし、単純動詞と複合動詞の自他交替を同様に扱う研究はまれである。第4章で述べたように、先行研究では、自他交替に関する議論は単純動詞に基づくものであり、日本語の複合動詞などを視野に入れておれず、一般的な制約とは言えない。本稿では、複合動詞も単純動詞も語彙化された一語であるので、「結果事象の焦点化」と同じ自他交替のメカニズムが働いていると考えている。使役事象の手段が指定されても、結果事象が焦点化されれば、自他交替が可能であるについて分析した。これにより、単純動詞の自他交替と複合動詞の自他交替を統一した視点から説明できた。

最後に文法化研究における意義であるが、日本語における文法化研究は、統語的複合動詞及びテ形複合動詞から補助動詞への発展などについて議論するものがほとんどであり、語彙的複合動詞における意味変化のような初期段階の文法化についての研究は少ない。意味変化は文法化の初期段階に起こり、それが引き金となって音韻的、統語的な変化が起こると Heine&Kuteva（2002）が主張している。本稿では、たくさんの例を取り上げて、判断テストに基づいて複合動詞における意味変化について詳しく考察した。文法化の初期段階における意味変化では具体的にどのような現象が起こっているのかを考察したことは意義を有していると思われる。

また、文法化の通時的な変化は共時的にも現れていると言われているが、共時的な研究は少ない。本論文は共時的に語彙的複合動詞における意味変化を考察し、幾つかの段階に分けており、それぞれの段階の特徴について分析した。これは共時的な文法化研究の一例としても意義があると思われる。

そして、本稿は複合動詞における意味変化を段階分けした後、各段階の複合動詞の事象構造を提示した。従来、文法化の研究で、意味変化を事象構造と関連させて研究したもの

がほとんどない。本稿では、意味変化が起こった場合、動詞の意味が具体的にどのように変化し、どの部分が失われ、どの部分が保存されているについて考察した上で、事象構造を提示した。形式化した事象構造で表すことによって、意味変化をより明確にする点で文法化研究に一石を投じられれば幸いである。

6.3 今後の課題

本稿では、語彙的複合動詞の自他交替について、「結果事象の焦点化」によって論じたが、この考えは英語の結果構文と中国語の複合動詞の自他交替などにも適用できると思われる。ここでは深入りしないが、分析の可能性だけを提示する。英語の結果構文は第4章で論じたように、結果述語を置くことで変化結果が焦点化され、他動詞構文から能格構文が生まれる⁵⁹。また、中国語における自他交替できる複合動詞は日本語の複合動詞と同じように、V1とV2の語彙的意味の希薄化によって、結果事象が焦点化されるものがある。

- (2) a. 他 打开 了 门。— 门 打开 了。

Ta da-kai le men—Men da-kai le

彼 開ける LE ドア—ドア 開く LE

彼はドアを開けた—ドアが開いた

- b. 他 弄脏 了 衣服。—衣服 弄脏 了。

Ta nong-zang le yi-fu Yi-fu nong-zang le

彼 汚す LE 服 — 服 汚れる LE

彼は服を汚した。— 服が汚れた。

- c. 他 搞坏 了 电脑。— 电脑 搞坏 了。

Ta gao-huai le dian-nao—Dian-nao gao-huai le

彼 壊す LE パソコン—パソコン 壊れる LE

彼はパソコンを壊した。—パソコンが壊れた。

(2) における「打开 da-kai」(力を加えて開く/力が加わって開く)、「弄脏 nong-zang」(汚す/汚れる)、「搞坏 gao-huai」(壊す—壊れる)といったような自他交替できる複合動詞はいずれも「花火を打ち上げる」と同じように、V1は動作の具体的な動作の意味が希薄

⁵⁹ 4.3.3 節を参照されたい。

化している。一方、ほぼ「打开 da-kai」と同じ意味を表している「推开 tui-kai」（押し開ける）という動詞は、V1「推 tui」は具体的な動作を表しており、「推开了门—*门推开了」（ドアを押し開けた—*ドアが開いた）のように自他交替できない。つまり、中国語でも V1 の語彙的意味の希薄化による自他交替できる複合動詞が存在する。これ以外に、中国語では活動動詞の後に「好 hǎo」「断 duàn」などの終点、結果状態を表す V2 を付け加えて自他交替を表す動詞も多い（望月 2004:78）。次の例を見よう。

- (3) a. 她 织好 毛衣 了。—毛衣 织好 了。
Ta zhi-hao mao-yi le—Mao-yi zhi-hao le
彼女 編み上げるセーター LE—セーター 編み上がる LE
彼女はセーターを編み上げた—セーターは編みあがった
- b. 她 做好 米饭 了。—米饭 做好 了
Ta zuo-hao mi-fan le —Mi-fan zuo-hao le

(3) では、「织好 zhi-hao」（編み上げる）、「做好 zuo-hao」（炊き上げる）において、V2 は「編み上げる」の「上げる」と同じように、「完了」を表しており、複合動詞全体は結果状態が焦点になっている。「編み上げる—編み上がる」と同じように、自他交替できる。このように、「結果事象の焦点化」から中国語の自他交替する複合動詞についても分析できると考えられる。しかし、中国語はもっと広範囲の複合動詞は自他交替できる。

英語の結果構文も含めて、自他交替できる複合動詞あるいは構文は結局使役関係を表していると考えられる。同じ使役関係を表しているので、自他交替には上述したように類似点がある。だが、異なる言語なので、無論相違点も存在する。日本語の複合動詞と中国語の結果複合動詞、英語の結果構文と比較対照するという視点は重要な意義を持つのであるが、これについての分析を今後の課題に残す。

また、本稿では語彙的複合動詞の自他交替について、他動詞からの自動詞化だけを論じたが、自動詞から他動詞へ派生するという他動詞化現象も見られている。(4) はその例である。

- (4) a. 舞い上げる、滑り落とす、転がり落とす、飛び散らかす、絡み付ける、染み付ける

b. 舞い上がる、滑り落ちる、転がり落ちる、飛び散る、絡みつく、染み付く

松本（2002:206）

松本（1998,2002）では、(4) a のような主語一致の原則に反する複合動詞は b からの他動詞化したものと指摘しているが、他動詞化について詳しく論じていない。複合動詞の他動詞化についての議論も今後の課題としたい。

参考文献

- 青木博史 (2004) 「複合動詞「～キル」の展開」『国語国文』73: 35-49
- 秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- 秋元実治ら (2004) 『コーパスに基づく言語研究－文法化を中心に』 ひつじ書房
- 浅尾仁彦 (2007) 「意味の重ね合わせとしての日本語複合動詞」『京都大学言語学研究』26, pp.59－75, 京都大学大学院文学研究科言語学研究室
- 石井正彦 (1988) 「接辞化の一類型－複合動詞後項の補助動詞化－」『方言研究年報』30
和泉書院
- 石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』 ひつじ書房
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 今泉志奈子・郡司隆男 (2002) 「語彙的複合における複合事象－『出す』『出る』に見られる使役と受動の役割」伊藤たかね(編)『文法理論：レキシコンと統語』33-59東京大学出版会
- 岩本遠億(2008)『事象アスペクト論』 開拓社
- 王怡人 (2004) 『現代中国語の軽動詞について－打を中心に』『現代社会文化研究』No.29pp.225-242
- 奥野浩子 (2010) 「日本語と韓国語の複合動詞と類像性」『人文社会論叢．人文科学篇』23.pp.11-16
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社
- 伊藤たかね (2002) 『文法理論：レキシコンと統語』 東京大学出版会
- 伊藤たかね (2005) 「日本語自他交替動詞の完結性と意図性--大規模辞書構築の現場からの予備的考察--」『言語研究の宇宙--長谷川欣佑先生古稀記念論文集』今西典子編 pp.355-366 開拓社
- 岩田彩志 (2010) 「Motion と状態変化」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』No. 5, 27-52, ひつじ書房
- 上野誠司 (2007) 『日本語における空間表現と移動表現の概念意味論的研究』 ひつじ書房
- 大島一 (2004) 『日本語における複合動詞の後項動詞あがる・あげるについて：ポーランド語データとの対照研究から』『一橋研究』28 (4) :43-54
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京大学出版会

- 大堀寿夫(2005)『日本語の文法化研究にあたってー概観と理論的課題ー』『日本語野研究』
pp.1-17
- 小野尚之(2000)「動詞クラスモデルと自他交替」丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』pp.1-31.ひつじ書房
- 小野尚之(2004)「移動と変化の言語表現：認知類型論の視点から」,佐藤滋・堀江薫・中村渉(編)『対照言語学の新展開』pp.3-26, ひつじ書房
- 小野尚之(2005)『生成語彙意味論』くろしお出版
- 小野尚之編(2007)『結果構文研究の新視点』 ひつじ書房
- 小野尚之(2008)「認知類型論による日英語の事象構造の研究」 科研報告書
- 小野尚之編(2009)『結果構文のタイポロジー』 ひつじ書房
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論ー言語と認知の接点ー』くろしお出版
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお
- 影山太郎(2000)「自他交替の意味メカニズム」『日英語の自他の交替』丸田忠雄・須賀一好編(2000) pp.33-70 ひつじ書房
- 影山太郎編(2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎(2002a)「概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』2-2 pp.29-45
- 影山太郎(2002b)「非対格構造の他動詞ー意味と統語のインターフェイス」伊藤たかね(編)『文法理論：レキシコンと統語』pp.126-130, 東京大学出版会
- 影山太郎(2005)「英語結果構文と日本語結果複合動詞におけるforce dynamics」『人文論究』54(1) .pp.26-40
- 影山太郎(2005)「辞書的知識と語用論的知識ー語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」『レキシコンフォーラム 1NO. 1』影山太郎編 65ー101. ひつじ書房
- 影山太郎(2006)「結果構文のタイポロジーに向けて」The Journal of the Literary Association of Kwansei Gakuin University 56(2) , 45-61
- 影山太郎(2007)「辞書情報と結果述語の含意的普遍性」影山太郎編『レキシコンフォーラム No.3』pp.131-159. ひつじ書房.
- 影山太郎(2008)「語彙概念構造(LCS)入門」影山太郎編『レキシコンフォーラム No. 4』 .pp.239-264. ひつじ書房.
- 影山太郎(2012)「動詞+動詞型複合動詞研究の現状」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト

- クト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会配布資料（2012年9月24日於東北大学([http://www.ninjal.ac.jp/lexicon/%E5%BD%B1%E5%B1%B1\(2012-09-24\).pdf](http://www.ninjal.ac.jp/lexicon/%E5%BD%B1%E5%B1%B1(2012-09-24).pdf))
- 影山太郎・由本陽子（1997）『語形成と概念構造』研究社
- 影山太郎 沈力（編）（2012）『日中理論言語学の新展望② 意味と構文.』くろしお出版
- 何志明（2002）『日本語の語彙的複合動詞における「並列関係」の複合動詞の組み合わせ』『言語学論集論叢』21,pp.39-59, 筑波大学一般応用言語学研究室
- 何志明（2010）『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から』笠間書院
- 片山晴一（2009）「日本語と英語の移動事象における経路」東京外国語大学『日本研究教育年報 13』 pp.25-43
- 菊田千春（2008）「複合動詞「Vかかる」「Vかける」の文法化—構文の成立とその拡張」『同志社大学英語英文学研究』 pp.81-82
- 岸本秀樹（2000）「非対格性再考」『日英語の自他の交替』丸田忠雄・須賀一好編（2000）pp.71-110 ひつじ書房
- 岸本秀樹（2007）「場所格交替動詞の多義性と語彙概念構造」『日本語文法』7 巻 1 号 pp.87-108
- 岸本秀樹（2011）「壁塗り構文と視点の転換」『日中理論言語学の新展望—①統語構造』くろしお出版 pp.33-57
- 草山学（2010）「英語の動能交替現象における事態認知と意味シフト」『地域政策研究』第12 巻第 4 号,pp.117-136
- 郡司隆尾など（1998）『言語の科学 4 意味』岩波書店
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 小泉保・船城道雄ら（1993）『日本語基本動詞用法辞典』大修館
- 小柳昇（2012）「有対自動詞の両用動詞化のメカニズム—『場主語構文』の観点からの分析—」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.8, pp.129-152
- 小西正人（2009）「現代日本語の到達事象について」『北海道文教大学論集』(10), 33-45
- 小原眞子（2007）「移動表現の日英比較：小説とその翻訳を題材に」『神戸言語学論集』5,pp.161-174
- 斎藤伸治（2001）「無生物主語構文について」岩手大学社会科学部紀要第 68 号 pp.83-93
- 斎藤倫明（1985）「複合動詞後項の接辞化 - 「返す」の場合を対象として - 」『国語学』140,

- pp.130-120,日本語学会
- 斎藤倫明（1988）複合動詞「引く＋～」の意味の多様性『国語学』152集 pp.124-138
- 斎藤倫明（1989）「語構成Ⅱ 派生語」森田良行他（編）『ケーススタディ日本語の語彙』桜楓社，pp.58—65
- 斎藤倫明（1992）『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味』ひつじ書房
- 斎藤倫明・石井正彦（編）（1997）『語形成』ひつじ書房
- 佐藤聖（2001）「日本語における自他交替「切る」「切れる」と語彙概念構造」『秋田県立大学総合科学研究彙報』2, pp.35-49
- 坂原茂 編(2000)『認知言語学の発展』 ひつじ書房
- 佐藤琢三（2005）『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 朱春日（2009）「複合動詞の自・他対応について-派生に基づく対応を中心に-」世界の日本語教育. 日本語教育論集』19,pp.89-106
- 申亜敏（2005）「中国語の自他と結果表現類型」影山太郎編『レキシコンフォーラム』No.1 pp.231-266ひつじ書房
- 申亜敏（2007）『中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造影山太郎編『レキシコンフォーラムⅢ』（2007:195-229） ひつじ書房
- 申亜敏（2009）『中国語結果複合動詞の意味と構造：日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類型的視点から』 東京外国語大学博士論文
- 須賀一好（1984）「現代語における複合動詞の自・他の形式について」『静岡女子大学研究紀要』17,pp.1-13
- 須賀一好・早津恵美子（2001）『動詞の自他』ひつじ書房
- 杉村泰（2008）「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7, pp.63-79
名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 砂川有里子（2000）「空間から時間へのメタファー—日本語の動詞と名詞の文法化」青木三郎・竹沢幸一編『空間表現と文法』pp.105-140
- 武部良明（1953） 「複合動詞における補助動詞的要素について」 『金田一博士古・稀記念言語民族論叢』pp461-476 三省堂
- 田中茂範・松本曜（1997）『空間と移動の表現』研究社
- 田辺和子（1995）「日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化」『日本女子大学紀要. 文学部』45,pp. 1-16

- 谷口一美（2003）『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』研究社
- 陳劼憐（2009）「結果複合動詞の語形成の意味条件と生産性」『言語科学論集』13, pp.83-94,
東北大学大学院文学研究科
- 陳劼憐（2010）「語彙的複合動詞の自他交替と語形成」『日本語文法』10 卷 1 号 pp.37-53.
- 陳劼憐（2013）『現代日本語の複合動詞の研究』博士論文 東北大学大学院文学研究科
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫（1969）「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト—その一—」『日本語・日本文化』1, pp.32-48, 大阪外国語大学
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人編（1987）「ケーススタディ日本語」桜楓社
- 長嶋善朗（1997）「複合動詞の構造」, 斎藤倫明・石井正彦編『語構成』pp.213-231, ひつじ書房
- 中右実・西村義樹（1998）『構文と事象構造』研究社出版
- 中村その子（（1998）「日本語複合動詞の意味形成と特性—言語認知の立場から—」『経営・情報研究』No.2, pp65-155
- 中村芳久（1995）「構文の認知構造ネットワークの精緻化：kick/break 類動詞構文の場合」『金沢大学文学部論集．文学科篇』15, pp .A127-A146
- 中村芳久（2000）「認知文法から見た語彙と構文：自他交替と受動態の文法化」『金沢大学文学部論集．言語・文学篇』20. pp.75-103
- 中村芳久（2004）『認知文法論Ⅱ』大修館書店
- 鍋島弘治朗（2003）「メタファーと意味の構造的性」『認知言語学論考 No. 2』ひつじ書房.
- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子（1987）「複合動詞 外国人のための日本語例文・問題シリーズ」荒竹出版
- 二枝美津子（2007）『格と態の認知言語学—構文と動詞野意味』世界思想社
- 西尾寅弥（1954）「動詞の派生について—自他対立の型による—」『動詞の自他』須賀一好・早津恵美子編（2001）pp.41-56 ひつじ書房
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院
- 西村義樹編（2002）『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会
- 野村雅昭・石井正彦（1987）『複合動詞資料集』国立国語研究所

- 長谷部優郁子（2012）「語彙的アスペクト動詞としての「～倒す」について—「～果てる」や「～まくる」との比較において—」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会配布資料（2012年9月24日於東北大学）
- <http://www.ninjal.ac.jp/lexicon/%E9%95%B7%E8%B0%B7%E9%83%A8%EF%BC%882012-09-24%EF%BC%89.pdf>
- 早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6.pp.79-109
- 早津恵美子（1995）「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味特性を中心に」須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』pp.179-197.ひつじ書房
- 日野資成（2001）『形式語の研究』九州大学出版会
- 日野資成訳（2003）『文法化』九州大学出版会
- 日高俊夫（2012）「語彙的複合動詞における反使役化と脱使役」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編』Vol.2, No.2.pp.115-130 外国語編近畿大学教養・外国語教育センタ
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 廣瀬裕子（2006）「動詞「おく」の文法化のメカニズム：本動詞「おく」と補助動詞「～ておく」の意味的関連性」『日本認知言語学会論文集』第6巻, 204-213.
- 米山三明（2009）『意味論からみる英語の構造—移動と状態変化の表現をめぐって』開拓社
- 松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ
- 松田文子・白石知代（2006）「コア図式を用いた複合動詞習得支援のための基礎研究—「とり～」を事例として—」『世界の日本語教育』（16）pp.35-51
- 丸田忠雄（1998）『使役動詞のアナトミー—語彙的使役動詞の語彙概念構造』松柏社
- 丸田忠雄（2000a）「動詞の語彙意味鑄型と語彙の拡張—walk を例に」『日英語の自他の交替』丸田忠雄・須賀一好編（2000）pp.209-24 ひつじ書房
- 丸田忠雄・須賀一好編（2000b）『日英語の自他の交替』ひつじ書房
- 松本曜（1997）「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』pp.125-230 研究社出版
- 松本曜（1998）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114,37-83

- 松本曜（2000a）「『教わる／教える』などの他動詞／二重他動詞ペアの意味的性質」 山田 進・菊地康人・靱山洋介（編）『日本語 意味と文法の風景：国広哲弥教授古希記念論文集』 pp.79-95. ひつじ書房.
- 松本曜（2000b）「日本語における他動詞／二重他動詞ペアと日英語の使役交替」 丸田忠雄・須賀一好（編）『日英語の自他の交替』 pp.167-207. ひつじ書房
- 松本曜（2002）「使役移動構文における意味的制約」 西村義樹編(2002)『認知言語学Ⅰ：事象構造』 pp.187-209.東京大学出版会
- 松本曜（2009）「複合動詞『込む』『去る』『出す』と語彙的複合動詞のタイプ」 由本陽子・岸本秀樹（編）『語彙の文法と意味』 pp.175-194
- 丸尾誠（2005）『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 白帝社
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化：内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』 1(3),pp 61-76
- 三原健一（2004）『アスペクト解釈と統語現象』 松柏社
- 宮腰幸一（2006）「非目的語指向の結果述語・統合的情報共有の更なる証拠」『日本語文法』 6 卷 1 号, pp3-20
- 宮島達夫（1994）『語彙論研究』 むぎ書房
- 宮島達夫（1972）『動詞の意味用法の記述的研究』 秀英出版
- 宮下博幸（2006）『文法化研究とは何か』 早稲田言語研究会会報第 10 号 pp.20-47
- 宮地裕編（2005）『日本語学—語彙Ⅰ』 明示書院
- 望月圭子（2003）「日本語と中国語における使役起動交替」『松田徳一郎教授追悼論文集』 pp.236-260 研究社
- 望月圭子（2006）「補文関係をもつVV型複合動詞—日本語と中国語の対照から—」 敦賀陽一郎、三宅登之ら（編）『言語研究におけるコーパス分析と理論の接点』 pp.51-68
- 由本陽子（1996）「語形成と語彙概念構造—日本語の『動詞＋動詞』の複合語形成について—」 奥田博之教授退官記念論文集刊行会（編）『言語と文化の諸相—奥田博之教授退官記念論文集—』 pp.105-118.英宝社
- 由本陽子（2005a）『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た英語の動詞形成』 ひつじ書房
- 由本陽子（2005b）「V+かえる」と「V+直す」の意味と統語」『日本語文法』 5巻2号, pp.110-1276 日本語文法学会

- 由本陽子・岸本秀樹編（2009）『語彙の意味と文法』くろしお出版
- 由本陽子（2011）『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』開拓社
- 山口明穂・秋本守英（2001）『日本語文法大辞典』明治書院
- 山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版
- 山本清隆（1984）「複合動詞の格支配」『都大論究』21:32-49.
- 林慧君（1999）「複合動詞の自他対応について—考察—語形と意味的構造との関わりを通して—」『台湾日本語学報』14, pp.171-196
- 熊莺（2009）『鍵がドアを開けた—日本語の無生物主語他動詞文へのアプローチ』笠間書院
- 楊明（2008）『中国語の結果構文における動補構造の研究』千葉大学大学院 社会文化科学研究科 博士論文
- 岳莎莎・吉田光演（2010）「日本語の複合動詞とテ形動詞の比較—中国人日本語学習者の誤用を通して—」『人間科学研究広島大学大学院総合科学研究科紀要1』5, pp. 57-68
- Amberber, Mengistu（1996）*Transitivity Alternation, Event –types and light verbs*, PHD dissertation, McGill University.
- Beavers, John. (2006). *Argument/Oblique Alternations and the Structure of Lexical Meaning*. PhD Thesis, Stanford University
- Beavers, John. (2008). "Scalar Complexity and the Structure of Events". In Johannes Dölling and Tatjana Heyde-Zybatow (eds.) *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Beavers, John, Beth Levin, and Tham, Shiao Wei. (2010) The typology of motion expressions revisited. *Journal of Linguistics* 46. pp.331-377
- Beavers, John. (2010) The structure of lexical meaning: Why semantics really matters. *Language*.86: 821-864
- Beavers, John. (2011) On affectedness. *Natural Language and Linguistic Theory*. 29:335-370. Springer.
- Beavers, John and Andrew Koontz-Garboden (2012) Manner and Result in the Roots of Verbal Meaning. *Linguistic Inquiry*, 43. pp.331-369.
- Cheng, Lisa Lai-Shen, and C.-T. James Huang. 1994. On the argument structure of resultative compounds. In honor of William S-Y. Wang: interdisciplinary studies

- on language and language change, ed. by Matthew Y. Chen and Ovid J. L. Tzeng, pp.187-221. Taipei: Pyramid Press.
- Clausner, Timothy and William Croft. 1999. Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics* 10-1, pp. 1-31.
- Eve E. Sweetser (1988) Grammaticalization and Semantic Bleaching
 Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (1988) , pp. 389-405
- Elizabeth Closs Traugott and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*.
 Cambridge, UK: Cambridge University Press
- Fukushima, Kazuhiko (2005) Lexical V-V compounds in Japanese: Lexicon vs. syntax. *Language* 81: 3. pp.568-612.
- Heike Narrog and Bernd Heine eds. (2011) *Oxford Handbook of Grammaticalization*.
 Oxford: Oxford University Press.
- Heine B., Claudi U. & Hünnemeyer F. (1991) , *Grammaticalization: a Conceptual Framework*, Chicago
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*.
 Cambridge: Cambridge University Press.
- Hidaka, Toshio (2011) *Word formation of Japanese V-V compounds* . Kobe Shoin Women's University Repository
- Hiromi, Noguchi (2011) Talmy's Dichotomous Typology and Japanese Lexicalization Patterns of Motion Events. Teachers College, Columbia University Working Papers in TESOL & Applied Linguistics, Vol. 11, No. 1, pp. 29-47
- Husband, E.M. (2011) Rescuing Manner/Result Complementary from Certain Death. *Proceedings of the 47th Annual Chicago Linguistics Society*.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantics Structures*. MIT Press
- Johnson, Mark. 1987. *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kazuaya, Kudo (2010) *Augument Realization and Alternations: A Theoretical Inverstigation on the Syntax-Lexical Semantics Interface* . PhD Thesis. Kwansei Gakuin University dissertation

- Lakoff, George (1970) *Irregularity in Syntax*. Holt, Rinehart & Winston.
- Laurel J. Brinton and Elizabeth Closs Traugott (2005) *Lexicalization and Language Change*. Cambridge University Press
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument Realization*. Cambridge University Press, New York.
- Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (2008) Lexicalized manner and result are in complementary distribution. Paper presented at IATL 24, Jerusalem, October 26-27.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (2013) Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity, in B. Arsenijević, B. Gehrke, and R. Marín, eds., *Subatomic Semantics of Event Predicates*, Springer, Dordrecht, pp.49-70
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex predicates in Japanese: A syntactic and semantic study of the notion 'word'* Tokyo: Kurosio Publishers.
- Nishiyama, Kunio (1998) V-V Compounds as Serialization. *Journal of East Asian Linguistics* 7, pp.175-217
- Ono, T. (1992) The grammaticalization of the Japanese Verbs *oku* and *shimau*, *Cognitive Linguistics* 3-4, pp.367-390
- Parsons, T. (1990) *Events in the Semantics of English*. MIT Press. Cambridge, MA
- Paul J. Hopper, Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*. Cambridge University Press
- Pustejovsky, James (1991) The syntax of event structure. *Cognition* 41, pp.47-81
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1998) Building Verb Meanings, in M. Butt and W. Geuder, eds., *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, CSLI Publications, Stanford, CA, pp.97-134.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (2010) Reflections on Manner/Result Complementarity, in E. Doron, M. Rappaport Hovav, and I. Sichel, eds., *Syntax, Lexical Semantics, and Event Structure*, Oxford University Press, Oxford, UK, pp.

- Slobin, Dan I. (2004). The many ways to search for a frog. In Sven Str  mqvist and Ludo Verhoeven (eds.), *Relating Events in Narrative. Typological and Contextual Perspectives*, 219-257. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Susan Rothstein (2004) *Structuring Events*. Blackwell Publishing
- Talmy (2001) *Toward a cognitive semantics*. The MIT Press
- Tenny, C. and Pustejovsky, J (2000) “History of Events in linguistic Theory”, in C. Tenny and J. Pustejovsky (eds.) *Events as Grammatical Objects*, Cambridge University Press.
- Van Voost, Jan (1995) The semantic structure of causative constructions. *Studies in Language* 19, pp.489-523
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics and Philosophy*. Cornell University Press

【辞書類】

- 『広辞苑第6版』 (2008) 岩波書店
- 『精選版日本国語大辞典』 (2006) 小学館
- 『明鏡国語辞典』 (2002) 大修館書店

【データベース】

- 『複合動詞レキシコン (開発版V.2)』 国立国語研究所
- 『Webデータに基づく複合動詞用例データベース (開発版)』 国立国語研究所

謝辞

本研究を遂行し学位論文を作成するにあたり、多くの方々から薫陶を賜りました。ここに記して、感謝の意を表します。

本論文の作成において、終始温かい激励とご指導を頂いた東北大学大学院国際文化研究科言語コミュニケーション論講座教授小野尚之先生に心より深く感謝申し上げます。筆者が修士論文を書くにあたり、大いに小野先生の著書を参考にさせていただきました。その時から、ぜひ小野先生のもとで勉強したいと決意し、その旨をお伝えしたところ、小野先生は快く受け入れて下さいました。日本への留学を実行する時から始まり、その後の留学生活を通して、一貫して小野先生から研究に関する貴重なご指導や温かい励ましの言葉を頂き、それが筆者の大きな支えとなっていました。本当に有難うございました。

そして、研究全般にわたる多大なご支援とご指導を賜りました言語コミュニケーション論講座准教授中本武志先生、同講座准教授ナロックハイコ先生に心より感謝申し上げます。演習の授業で発表するたびに、中本先生からの的確なアドバイスや貴重なご意見を頂き、またナロック先生には貴重な資料及びコメントをたくさんまご提供頂きました。改めて感謝申し上げます。

また、学位論文審査において、貴重なご指導とご助言を頂いた東北大学大学院国際文化研究科言語文化交流論講座准教授副島健作先生に衷心から感謝を捧げます。

同専攻分野の福原裕一、斎藤珠代、檜山祥太、呉蘭、尹賢美、Spring Ryan の諸氏をはじめ、多くの方々にもたくさんの助言と励ましの言葉を頂きました。重ねてお礼申し上げます。

また、仙台のボランティア団体「にほんごのもり」の方々には日本語に関する貴重なご指導と温かい励ましの言葉を頂戴し、深く感謝申し上げます。

日本への留学を実行するにあたり、多くのご支援とご意見を頂いた北京大学外国語学院准教授李奇楠先生に厚くお礼申し上げます。

さらに、留学の機会と経済的な援助を提供して下さいった中国国家留学基金管理委員会に謝意を表します。そして、日本に留学中に多大なご支援を頂いた中国駐日本大使館教育処にも深く感謝いたします。

最後に、論文をまとめるにあたり、筆者に十分な研究の時間を与え、常に励ましながら温かく見守ってくれた家族、特に夫と幼い息子に心からの謝意を記します。夫が生活や研究や精神などの面において絶えず応援してくれたからこそ、本論文を書き上げることができたと思います。ただただ感謝の一語に尽きます。